

炭 礦	九 州	參 宮	收入百圓二付支出		平均營業線路一哩二付		建設費百圓
			收入	支出	收入	支出	
五〇	四八	三三	八	一五	四	七	一一
							八
							四

上述各種ノ表ニ於テ官設線ハ民設線ニ比シ建設費ニ於テ著シク巨額ヲ要セルヲ見ルヘシ固ヨリ線路ノ難易地價ノ高低及ヒ經營ノ主體ノ異ナルコト其重ナル原因タルヘク又其營業費ニ於テ官設線ノ經費著シク多キハ乘客貨物ノ數量ノ多寡線路車輛ノ良否之カ保存修繕旅客貨物ノ取扱列車運轉回數等ニ於テ多額ノ經費ヲ要スルニ外ナラサルナリ而シテ大體ニ於テ官設線ハ民設線ニ比シテ先取順位トシテ最モ良好ナル線路ト私人ノ創業費ニ於テ之カ敷設ヲ敢テスル能ハサル線路トヲ併セ皆比較的長距離ノ延長ヲ有ス東海道線ハ前者ノ重ナル一例ニシテ甲信中央線奥羽線ノ如キハ後者ノ重ナル例ナリ良好ナル線路ハ地價ノ不廉ヲ以テ他ハ線路建設ノ困難ヲ以テ共ニ多額ノ建設費ヲ要スヘク既ニ線路ノ良好ナル以上

ハ旅客貨物ノ數量多カルヘキハ又言テ俟タサル所ナリ從フテ官線ハ複線多ク一日ノ列車平均運轉回數多ク走行哩數モ實哩數ニ比シ民設ノ場合ヨリ遙カニ大ナリ其一哩支出ノ大ナルハ其一哩收入ノ大ナル所以ニシテ營業收支ノ上ニ於テ官線ノ勝レルハ正ニ營業線路一日ノ通過人員及ヒ噸數ノ大ナルカ爲メニシテ平均一人ノ乘車哩數及ヒ一噸ノ運輸哩數ト相俟テ官線ノ良好ナリ中央長幹線路ヲ有セルヲ見ルヘシ是レ獨リ官線ノミナラス私設會社相互間ニ於テモ又前表ニ依リ其大體ヲ付度シ得ヘキナリ此ノ如ク我國ノ鐵道事業ハ累年長足ノ進歩ヲナシ今日ノ發達ヲ見ルニ至リシモ猶之ヲ歐米ノ列國ニ比スレハ其收支延長凡テニ於テ猶甚シク遜色アルヲ見ルヘシ

各國鐵道延長比較表 (一九一八年)

鐵道延長	千英里ニ對スル延長	人口一萬ニ對スル延長	建設費	
			北米合衆國	獨逸
一八六八一〇	六四	二九	二二	一三
三〇〇九三	一四	五	五七〇	五六一四

	鐵長延道	千方哩ニ對スル延長	人口一萬ニ對スル延長	建設費
露西亞及 フィンランド	三〇〇二七	三	二	二八四八一七九
佛蘭西	二三五七六	一一五	六	六二〇六五七九
英領印度	二二四九一	一三	一	一九六三〇〇〇
英國	二一六五九	一七九	五	一一〇七二四二
澳匈國	二〇九五九	八三	五	三二五六九二
加奈陀	一六八七〇	四	三	一八八二五九四
薩州	一四七七三	四	二	
アルゼンチン	九八八五	七	二	
伊太利	九五九二	八六	三	
アラハル	八七一八	二	六	
墨其哥	八〇四〇	一五	七	

	鐵長延道	千方哩ニ對スル延長	人口一萬ニ對スル延長	建設費
西班牙	八〇二〇	四五	四	
瑞典	六三三〇	三六	一	三三六二五〇
日本	三九四一	二六	九	二六六五九八
白耳義	二八六七	二五	四	五六五五七五
土耳其	二五九三	三	一	
瑞西	二二二六	一四五	七	四六八六三〇
和蘭	一七二二	一三六	三	一八八四〇七
丁抹	一五六八	一〇二	七	一二三〇二〇
葡萄牙	一四六四	四〇	三	
埃及	一二二四		一	
諾威	一二二三	二	五	

(英國ノ建設費ハ拂込資本金丁抹和蘭ノ建設費ハ官線ノミナリ)

各國鐵道收支比較表

(千八百九十八年)

	收 入	支 出	純 收 入
北米合衆國(弗)	一二四九五五八七二四	八五九八九二二五〇	三八九六六六四七四
英 國(磅)	九六二五二五〇一	五五九六〇五四三	四〇二九一九五八
獨 逸(馬)	一六八四七三〇〇〇	九五七六七四〇〇	七二七〇五六〇〇
佛 蘭 西(磅)	一、一五三五一四〇〇〇	二七八七一〇〇〇	二五六四三〇〇〇
露 西 亞(ラ)	四五七五四九五四一	二四八二四五七三二	二〇九三〇三八〇九
埃 國(法)	二七八〇五三〇〇〇	一七二四三七〇〇〇	一〇五六一六〇〇〇
匈 國(磅)	一〇五七六〇〇〇	五七三〇〇〇〇	四八四六〇〇〇
伊 太 利(リラ)	二六〇二三五四八九	一八二六一二七四二	七七七六二二七四六
瑞 典(クローン)	六五〇九七五三七	三五四七一九五八	二九六二五五七九
白 耳 蘭(法)	二二二七四六六二四	一一二二八三九一八	九〇四六二七〇六

和蘭(キルダ)	三九四二〇〇〇〇	三〇五六二〇〇〇	八八五八〇〇〇
日 本(圓)	三八二一九二七二	一八八三三二一七	一九三八六〇五五

上述スル所ニ依リテ我鐵道事業ハ之ヲ歐米ノ實況ニ對照シテ次ノ諸點ニ於テ著シク其類ヲ異ニスル所アルヲ見ルヘシ

第一、線路哩程ニ對スル定行哩數ノ比率甚タ少キコト

此現象ハ主トシテ我國ノ鐵道ハ其大部分單線ニ屬スルカ故ニシテ發着度數ヲ多カラシムルコトヲ得サルカ爲ナリ其他線路及ヒ車輛ノ設備及ヒ線路ノ狹軌ニシテ勾配ノ急ナル等又之カ副因タリ

第二、走行哩數ニ比シテ乘客及ヒ貨物ノ數甚タ少キコト

此現象ハ線路車輛ノ設備不充分ナルカ爲メ車輛ノ牽引力少キコト又其一因タルヘキモ其主因ハ三呎六吋ノ狹軌鐵道ナルニ因レリ廣軌ハ其工費及ヒ車輛ニ巨額ノ經費ヲ要スルモ狹軌ニ比シテ多量ノ積載ヲシテ然カモ高速力ヲ得ヘク現時廣軌ニハ五呎三吋五呎六吋等ノ諸種アレトモ四呎八吋二分ノ一最モ廣ク行ハレ三

呎六吋ニ至リテハ喜望峰殖民地クキンスランド西濠洲及ヒタスマニヤノ外行ハ
ルル所ナシ

第三、乗客ノ數、貨物ノ數ニ比シテ著シク大ナルコト

此現象ハ鐵道ノ設備未タ充分ナラスジテ輸送力弱ハク賃率ノ高低ト時期ノ遲速
ニ因リ貨物ノ輸送少カルヘキモ要ハ鐵道設備ノ問題ニ非スシテ我邦產業界ノ發
達猶幼稚ナルニ存セリ

蓋シ民設會社ノ營利ニ急ナルハ固ヨリ官設ノ及フ所ニアラス是レ一方ニハ民設
ニ於テ冗費少ナキト共ニ設備經營ニ周密ナラス一時ノ收益ニ急ナル所以ニシテ
一方ニハ官設ニ於テハ冗費多カルヘキト共ニ之カ設備經營ニ周密ナル所以ナリ
ト然レトモ大體ニ於テ我國ノ鐵道事業ハ官設民設ヲ通シテ比較的良好ナル成
績ヲ示スモノニシテ一方ニハ官設鐵道ハ國庫ニ多少ノ收入ヲ供給シテ而モ甚タ
シク經濟上ノ失態ヲ來サス私設鐵道ニ於テモ相當ノ利益配當ヲ爲シテ而モ甚タ
シク之カ經濟上ノ發達ヲ害スルコトナシ故ニ鐵道事業其物ヲ絕對的ニ觀察スレ
我國ニ於テハ官設私設共ニ著シク其間ニ徑庭アルヲ見ス故ニ殆ト同一ノ效果

ヲ奏スル以上ハ政府ヲシテ之カ事業ノ統一ヲ圖ラシムルコトハ固ヨリ何等ノ非
難アルヲ見ス然レトモ私設鐵道カ又比較的良ナル效果ヲ奏スル以上ハ政府カ
自ラ充分ニ之カ敷設經營ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テ之ヲ民設ノ敷設經營ニ
委テ全國ニ鐵道ノ利便ヲ洽及セシムルコトハ亦國民經濟ヲ發達セシムル上ニ於
テ必要ナル事理ニ屬セリ現ニ我國ニ於テ明治二年ヨリ三十二年ニ至ル期間ヲ通
シテ私設鐵道ハ明治十六年即チ殆ト其中間ニ於テ發生シ而モ七年ヲ經サルニ官
設線ヲ超過シ三十四年ニ至リテハ殆ト三倍ノ延長ヲ見ルニ至レリ而シテ斯ノ如
キ民設鐵道ノ延長ハ固ヨリ國家カ自ラ爲シ能ハサリシ所ニシテ此等ノ鐵道ノ延
長ノ爲メニ得タル富ノ増殖換言スレハ國民ノ生産力負擔力ノ増加ハ又豫想ノ外
ニ在リ今後ニ於テモ鐵道事業ハ尙ホ發達ノ餘地多キカ故ニ比較的少ナキ期間ヲ
以テ政府專ラ之カ衝ニ當ルコトハ事實ニ於テ之ヲ望ムヘカラス是レ政府ノ財政
ニ於テ鐵道敷設法ノ適用上豫定線路ニ於ケル既設ノ私設鐵道ヲ買上ケタル例ナ
キニ反シ豫定線路ニ於テ新ニ私設鐵道ヲ許シタル例多キニ依ルモ又之ヲ知ルテ
難シト爲ササルナリ今日ノ問題ハ如何ニシテ財政ノ急迫ヲ告グルコトナクシテ

國有歸屬ノ實ヲ舉クヘキヤニ在リ既設ノ私設鐵道ニ對シテハ財政ノ餘裕アルニ從ヒ漸次之ヲ買收スルノ外ナキモ新ニ許可セララルル民設會社ニ對シテハ將來ニ於テ財政上ノ負擔ヲ軽減シ之カ國有歸屬ノ實ヲ舉クルコト最モ重要ナル問題ナリ歐洲各國ノ實例ニ於テハ多クハ多少ノ補給ヲ與ヘテ一定ノ營業期限滿了後無償ヲ以テ國家ノ手ニ歸屬セシムルノ方法ヲ採ルモノアリ佛國ノ如キハ今世紀ノ中葉ニ於テ一萬二千哩ヲ超ユル鐵道ハ無償ヲ以テ國家ノ手裡ニ歸屬スルコトトナレリ其他何等ノ補給ヲ與フルコトナク單ニ期限ノ滿了ヲ以テ無償ノ歸屬ヲ爲サシムル例亦尠ナカラス此點ニ於テハ我私設鐵道法規定ノ買上權ハ比較的寬大ニ失スルモノト謂ハスンハアラサルナリ(私設鐵道法第七十二條乃至第七十四條參照)

註一、佛蘭西政府ハ千八百四十二年ノ法律ヲ以テ營業期限ヲ四十五年ト爲シ期限ノ滿了ト共ニ國家ノ手ニ歸屬スヘキコトヲ規定シタリ其後期限ノ延長及口利子ノ補給ニ依リテ鐵道ノ布設普及ヲ獎勵シ營業期限以後政府ハ鐵道ノ改良設備最モ急ナルヲ感シ新ニ新設官有鐵道ノ大計畫ヲ立テシモ到底之ニ要スル巨額ノ資本ヲ得ルニ難キヲ以テ千八百八十三年七大幹線中重ナル六線ヲ民設會社ニ經營セシメ千八百八十五年ノ如キハ純收入僅ニ四百萬フランニ止マリ鐵道資本ノ利息四千萬フランノ一割

ニ過キサルノミナラス其會社ニ支給スル補助金ニ至リテハ著シク巨額ニ達シ一千八百六十七年ヨリ同七十一年マテノ八年間ニハ二億九千萬フランノ多キニ上リタリ然レトモ政府ノ純收入ハ漸次遞増スルト共ニ千九百五十年乃至千九百六十年ノ間ニ於テ一萬二千哩ニ近キ鐵道ハ無償ヲ以テ國家ノ手ニ歸屬スルカ故ニ無謀ナル買收方法ニ依リ鐵道公債其モノノ利子スラモ補給スルコトヲ得サル不確定ナル手段ニ比スレハ却テ簡單ニ且確實ナルモノト謂フヘキナリ

第三章 手數料

第一節 手數料ノ觀念

手數料ナルモノハ收入ノ一綱目トシテ認ムヘキモノナルカ又之ヲ認ムルトセハ其性質及ヒ範圍ハ如何ニシテ之ヲ定ムヘキカ手數料ノ地位ハ學說ニ於テ實際ニ於テ最モ不確定ナルモノト謂ハスンハアラス法文ノ上ニ於テ手數料ナルモノヲ規定セルハ歐米ヲ通シテ唯獨逸及ヒ埃太利等ノ數個國ヲ見ルニ過キス我國ニ於テハ憲法第六十二條第二項ニ於テ報價ニ屬スル行政上ノ手數料及ヒ其他ノ收納金ハ法律ヲ以テ定ムル限リニ在ラサルコトヲ規定シ手數料ナルモノハ報價ニ屬

スルモノタルコトヲ反面ヨリ示セリ然レトモ茲ニ所謂手数料ナルモノハ固ヨリ
豫算雜收入ノ一項タル手数料ト全然其性質範圍ヲ一ニスルモノニアラス之ヲ各
國ノ實際ニ徴スルモ手数料トシテ認メラルモノカ或ハ租稅トシテ認メラレ或
ハ私經濟的収入トシテ認メラレ其所管ノ職制ニ於テ一定スルコトナク其豫算ノ
款項ニ於テ區々ニ分レ其收入ノ主體カ或ハ國庫タリ或ハ官吏タリ或ハ公吏ニ歸
屬スル等複雜ヲ極ムルノミナラス同時ニ同所ニ於テ一ノ手数料カ租稅ニ變形シ
或ハ租稅ノ一種カ手数料ニ變形スルカ如キ各國ノ財政ニ於テ屢目擊スル所ナリ
手数料ナル觀念ハハイソリヲウニ依リテ始メテ唱道セラレタルモノニシテ手
數料ノ發生ハ近時國家ノ事務復雜ヲ加ヘ自ラ専門ノ技能ヲ要スルニ至レル時ニ
在リ殊ニ司法及ヒ教育ノ事務ニ於テ然リト爲ス古代裁判ノ事務ハ國家ノ事務ト
シテ認メラレタルモ事實之カ執行ノ衝ニ當リタル者ハ私人ナリシテ以テ其事件
ノ性質大小ニ依リテ之カ報償ヲ受クルヲ例トセリ第十七世紀ニ至リテ裁判機關
ノ設備稍完全ナルニ至ルヤ政府ハ裁判官ナル職制ヲ設ケ前ニ所謂報償トシテ受
ケタル手数料ナルモノハ直チニ裁判官ノ所得ニ歸シ一種ノ定額ヲキ俸給ト變シ

タリ其後裁判ノ爲メニ要スル書面其他證書等ニ付テハ必ス政府ノ製造ニ係ルモ
ノ又ハ政府ノ定ムル所ニ從ヘルモノニ限リ印紙ヲ貼用スルコトヲ條件トシ所謂
印紙ノ收入ハ又裁判所ノ收入ノ一綱目ヲ形成スルニ至レリ然ルニ印紙貼用ノ法
ハ其後裁判以外ノ取引等ニ通シテ廣ク行ハルルニ至リ延テ手数料ヲ徵收セサル
場合ニモ印紙貼用ノ方便ヲ用ユルニ至レリ而シテ一方ニ於テ裁判ノ手数料ハ財
政上直チニ國庫ノ收入タルヘキモノナリトシ裁判官ノ手数料取得ノ制度止セラ
レ第十九世紀ニ至リテ全國ヲ通シテ國庫ニ所屬スル手数料制度ノ統一ヲ見ルニ
至リ手数料ハ行政行為ノ報償ニシテ人民ノ貴賤階級ニ依リテ差別ヲ立ツヘキモ
ノニアラサルコト明白トナレリ然レトモ手数料ハ一方ニ於テ裁判ノ如キ又ハ教
育ノ如キ純然タル國家ノ行政ニ關セサル場合ニ於テ徵收セララルコトアリ即チ
君主ノレガリヤトシテ認メラレタル道路運河ノ通行料海關稅ノ如キ近時マテ手
數料トシテ認メラレ又一方ニハ財政上收入ノ財源トシテ證券印紙ノ收入ハ手數
料ヨリ分離セラレ人民ノ階級貴賤等ニ依リテ同一ノ手數ニ對スル徵收額ニ等差
ヲ設ケ又其形態ヲ租稅ニ變更スルモノアルニ至レリ例ヘハ我國ニ於ケル符號規

則ノ免許料カ特種法ノ特種免許税トナリ或一部ノ登記ノ手数料カ登録税法ノ登録税トナレルカ如シ

斯ノ如ク手数料ノ性質範圍ハ時ト處トニ依リテ其類ヲ異ニシ殆ト相對的關係ニ依リテ同一ノ實質カ自由ニ其形式ヲ變シ得ヘキ不確定ナルモノナルヲ以テ、
チ、ア、ル、ノ、如、キ、ハ、手、數、料、ト、ハ、國、家、ノ、行、爲、ノ、偶、然、ナ、ル、生、産、物、ナ、リ、國、家、カ、其、職、務、執、行、ノ、餘、暇、ニ、生、ス、ル、副、産、物、ナ、リ、ト、稱、シ、手、數、料、ハ、之、ヲ、租、税、ト、私、經、濟、的、收、入、ト、ニ、分、テ、テ、編、入、ス、ル、コ、ト、ヲ、得、ヘ、シ、ト、爲、セ、リ、斯、ノ、如、ク、手、數、料、ノ、性、質、ハ、頗、ル、不、確、定、ナ、ル、所、論、ヲ、概、括、ス、レ、ハ、

手数料トハ國家其他ノ公共團體カ其勞務ニ因リ特別ノ利害關係ヲ有スル私人ニ對シ徵收スル勞務ノ報償ナリ

ト云フコトヲ得ヘシ蓋シ國家ノ行爲ハ國家全般ノ利益ヲ目的ト爲スモノニシテ其行動ハ公益ヲ目的トスルト同時ニ特定ノ私人ニ對シ特種ノ利害關係ヲ有スルコトアリ此場合ニ在リテハ國家ハ公益ヲ目的ト爲ス點ヨリ一般ニ賦課スル租税

等ノ收入ニ依リテ之カ經費ヲ支辨スルコト固ヨリ不可ナシトスルモ特種ノ利害關係ヲ有スル私人ヨリ其實費ノ一部ヲ支辨セシムルコトハ又毫モ正理ニ反スルコトナシ故ニ國家ハ公益ノ爲メニ爲シタル行動ニ對シ報償トシテ其行動ニ依リ特種ノ利害關係ヲ受ケタル私人ニ對シ自ラ定メタル一定ノ額ヲ報償トシテ徵收ス

手数料ニ關スル大體ノ觀念ハ上述スル所ノ如シ然レトモ手数料其モノノ意義ハ獨リ公法上ノ國家行爲ニ對スル報償ニ止マラスシテ私人カ營造物ノ使用ニ對シテ支拂フ所ノ使用料ヲモ包含シ所謂私法上ノ手数料ヲ認ムル者又少シトセス行政法學者ハ多ク手数料ノ意義ヲ解釋シテ手数料トハ私人ノ利益ノ爲メニシ又ハ私人ノ爲メニ必要ヲ生シタル國家ノ行爲ニ對シ又ハ營造物ノ使用ニ對シ私人カ國家ニ支拂フ所ノ其行爲又ハ使用ニ對スル報酬ナリトシ所謂狹義ノ手数料ノ外ニ營造物ノ使用料ヲ認メ營造物ノ使用中公有物ノ使用ノ如ク別段ノ契約ヲ要セサルモノ(通行料、河川)又ハ營造物ノ使用ニシテ使用ノ義務ノ存在スル場合ノ如ク(學校ノ修繕費、契約ニ基カサルモノ)ハ公法上ノ使用料トシ政府ノ交通業即チ鐵道

郵便、電信等ノ如キ營造物ヲ使用スル場合ハ其使用料納付ノ義務ハ契約ニ基クモ
 ナルヲ以テ之ヲ私法上ノ使用料ト爲セリ故ニ茲ニ所謂私法上ノ使用料ナルモ
 ノハ財政學上一般ニ政府官業ノ一種ニ歸入セラルルモノナリ又彼ノ公法上ノ使
 用料中行爲ヲ要スルコトナク唯物件ノミヲ以テ足レリトスル營造物即チ公有物
 ノ使用料ニシテ道路ノ通行、公園ノ散步、河川ノ航行ノ如キ共同ノ使用ニ對シテ支
 拂ハルルモノハ古來君主ノ特權ニ基ク收入トシテ盛行ハレタルモ今日ニ於テ
 ハ各國殆ト其跡ヲ絶ツニ至リ唯公有物ノ使用料ニシテ道路ノ廣告柱、公園ノ茶店
 河川ノ養魚等特別ノ使用ニ對シテ支拂ハルル場合ヲ除外セルハ前ニ述ヘタル所
 ノ如シ

政府ノ交通業ノ收入ハ固ヨリ公法上ノ收入ニアラス然レトモ單ニ國家カ國庫ナ
 ル私法上ノ主體トシテ利益ヲ目的トスル營業收入ト見ルヘキカ國家カ國家ナル
 公法上ノ主體トシテ國家及ヒ公衆ノ交通ニ於ケル公益ノ保全ヲ目的トスル國家
 行爲ヨリ生スル收入ト見ルヘキカ政府ノ交通業ハ他ノ私經濟的ノ收入ニ比シテ
 公共的性質ノ著シキハ其政府ノ專業ト爲スニ依リテ之ヲ知ルニ足ルヘク一方ニ

於テハ交通其モノノ改良發達ヲ企圖スヘキト共ニ又一方ニ於テハ多少ノ收入ヲ
 目的ト爲スハ又明カナル事實ナリ從テ交通事業ノ收入ハ財政學上手手数料ト見ル
 ヘキヤ否ヤノ論點ハ其公私ノ點ニアラスシテ單ク報償ノ點ニ在リ一部ノ論者ハ
 國家ノ行爲又ハ營造物ノ使用カ私人ニ與フル利益ノ有無及ヒ大小ハ問フ所ニ非
 ス手数料ノ報償ハ對價又ハ賠償ノ觀念ヲ以テ論スヘカラスト爲セリ固ヨリ事實
 ニ於テ手数料ノ額ハ常ニ其利益其費用ト權衡ヲ保持スルコトナキモ大體ニ於テ
 ハ其實費ヲ超過セサルヲ原則トシ而モ其費用ノ算定ハ又最モ困難ナル問題ニ屬
 セリ蓋シ手数料ノ額ヲ算定スルノ標準ハ國家又ハ公益團體カ特定ノ私人ノ爲メ
 ニ要シタル行爲又ハ營造物ノ費用ノ額ニ依ラスンハアラス然ルニ此等ノ費用ノ
 價額ハ之カ算定ニ非常ナル困難ヲ感スルノミナラス事實ニ於テハ又幾多ノ特別
 ナル標準ニ依リテ左右セラルルコトヲ免カレサルナリ即チ一個人カ其勞務ノ爲
 メニ受クヘキ利益ノ大小ノ如キ一個人其報償提供ノ資力ノ大小ノ如キ國家ノ
 提供スル勞務ノ性質即チ其行爲ノ希望スヘキコトナリヤ禁遏スヘキコトナリヤ
 此等ノ問題ハ常ニ手数料ノ額ヲ高低スルノミナラス時ニ國家收入ノ目的ヲ加味

スルカ爲メ其實質ニ於テ租税ト題テ一ニスルモノ又稱ナリト爲ササルナリ
 手数料ト負擔税トハ全ク其性質相酷似セル所アリ蓋シ抑モ負擔税トハ地方公共
 團體ニ於テ或營造物ニ付キ其使用スル或階級ノ者ニ限リ之カ費用ヲ支拂ハシム
 ル法ニシテ其事業ニ對シ特種ノ利害關係ヲ有スルモノニ付キ費用ヲ支拂ハシム
 ル點ニ於テ手数料ト其性質ヲ同ウスルモノナリ然レトモ各個ノ場合ニ於テ徵收
 セラルルコトナク其各個人ニ利益ヲ與ヘタルモノト認メタルヘキ事業ノ存立ニ
 對シテ事實利益ヲ享有セルト否トヲ問ハス支拂ハルルモノニシテ特別ノ目的ノ
 爲メ特別ノ團體ニ對シテ徵收スル一種ノ租税ナリ
 手数料ノ意義ニ付キ之カ範圍限界ヲ圖ニ依リテ示セハ次ノ如シ即チ第一ノ手
 料ハ最廣義ノ手数料ニシテ第一ト第二ト乙ノイトノ手数料ニ最廣義ノ手数料第一
 ト第二ノ甲及ヒ乙ノイノ手数料ハ廣義ノ手数料第一ト第二ト甲及ヒ乙ノイ(ロ)ノ
 手数料ハ最廣義ノ手数料ナリ

第一、命令權ニ出ツル行政
 行爲ニ附帶スル手数料
 甲、公有物ノ使用料
 共同使用料
 特別使用料

手数料

第二、命令權ニ出テナル公
 益手段ニ附帶スル手数料

乙、公有物以外ノ營
 造物使用料
 (イ) 契約ニ基カサル場
 合ニ於ケル使用料
 (ロ) 契約ニ基ク場合ニ
 於ケル使用料

第二節 手数料ノ分類

手数料ノ分類ハ各國制度ノ異ナルニ從ヒ一様ニ之ヲ圖スルコト能ハス然レトモ
 大體ニ於テ手数料ハ之ヲ體様二種ノ方面ニ於テ分類スルコトヲ得ヘシ

第一款 様ニ依ル手数料ノ分類

手数料ノ料額ノ性質徵收ノ方法等總テ手数料ヲ支拂フ勞務其モノノ實體ニ依ラ
 サル分類ニシテ俗ニ手数料ノ制度ト稱セララルルモノナリ之ヲ五種ニ細別スルコ
 トヲ得

第一、國庫手数料及ヒ官吏手数料、國庫手数料トハ直接ニ國庫ニ納ムルモノニ

シテ又直接手数料ト稱セラル官吏手数料トハ官吏カ自己ノ計算ニ於テ所得ト爲スモノヲ謂ヒ又間接手数料ト名ケラル官吏手数料ハ國庫ノ事務ヲ二重ニ省略スルノ便アルヲ以テ古代ニ在リテ多ク行ハレタルハ前節ニ於テ述ヘタルカ如シ然レトモ國家ハ財政行政ノ整理統一改良上不可ナルノミナラス官吏ノ私曲ヲ誘導シ易キヲ以テ現時ハ獨逸ニ於ケル大學教授ノ講座料官吏等ノ公證又ハ執達ニ依ル手数料等ニ於テ稀少ノ實例ヲ見ルニ過キサルナリ

第二、定額手数料及ヒ不定額手数料 定額手数料トハ同種ノ勞務ニ對シ手数料額ノ一定セルモノナリ不定額手数料トハ同種ノ勞務ニ對シ其性質種類大小等ニ依リテ一定セサルモノナリ

限界手数料ト一定ノ階級ニ伴フテ高低スル階級手数料ノ二種ニ分タル

第三、單一手材料及ヒ合同手数料 單一手材料トハ同一ノ事件ニ關シ其各勞務個個ニ付キ徵收セラルモノヲ謂フ合同手数料トハ同一ノ事件全體ニ通シ個個ノ公務ノ多少ヲ問ハス總括シテ徵收スルモノヲ謂フ

第四、一般手数料及ヒ特別手数料 一般手数料トハ一般行政官廳ニ通シテ徵收セラルル手数料ヲ謂フ

第五、直接徵收手数料及ヒ間接徵收手数料 直接徵收手数料トハ公務執行ノ官吏又ハ手数料徵收ノ官吏カ直接ニ報償ヲ徵收スル手数料ニシテ間接徵收手数料トハ證券印紙其他ノ方法ニ依リ間接ニ報償ヲ徵收スル手数料ナリ故ニ此區別ハ主トシテ手数料ノ徵收方法ノ異同ニ依ルモノナリ直接徵收手数料ハ古代廣ク行ハレタル方法ニシテ手数料徵收ノ確實ニシテ個々ノ場合ニ適合セシムルノ便アルモ之カ費用手数料大ナルヲ以テ現時ハ巨額ノ報償ニ付キ時ニ用キタルニ過キサルナリ間接徵收手数料即チ證券印紙ノ制ハ國家收入ノ増加ヲ目的トシテ行ハレシモノニシテ千六百二十六年和蘭ニ於テ行ハレシ以來各國相次テ此方法ヲ採用シ延テ一般收入ノ場合ニ適用セラルルニ至リシコトハ前節ニ述ヘタル所ノ如シ此方法ハ手数料額ノ計算簡單ナル場合ニ適シ政府ハ單ニ切手ノ製造及ヒ賣下ヲ爲スニ止マルヲ以テ經費ト手数料ヲ節減シ會計ノ整理ニ便ナリトス但印紙證券ノ偽造製造再貼用等ノ防遏監督ニ注意スヘキコト論

第二款 體ニ依ル手数料ノ分類

體ニ依ル手数料ノ分類トハ手数料ノ反對給付タル國家又ハ公共團體ノ行動ノ實體ニ依ル手数料ノ分類ナリ之ヲ大別シテ司法手数料及ヒ行政手数料ノ二ト爲ス
第一、司法手数料 司法手数料ハ手数料中最モ早ク發達シタルモノニシテ其沿革ノ古キコトハ前ニ言セル所ノ如シ近時司法行政ノ費用著シク増加シ手数料ハ單ニ一方ニ於テハ健訟ノ弊ヲ助長セ、一方ニ於テハ救正手段ノ途ヲ杜絶セサル範圍内ニ於テ實費ニ對シテハ遙カニ低下スルヲ常ト爲スニ至レリ
司法手数料ハ再分シテ訴訟手数料及ヒ非訟手数料ノ二ト爲ス訴訟手数料ハ又司法裁判手数料ト行政裁判手数料トニ分レ司法裁判手数料ハ又更ニ民事刑事ノ二者ニ細分セラルル凡ソ訴訟手数料ハ其額高キニ失スルトキハ貧民ノ救正ノ途ヲ杜絶スルモノナレトモ其額ニシテ宜シキヲ得ハ特別ノ利害關係ヲ有スル當事者ニ對シテ手数料ノ支拂ヲ命スルハ正理ニ反セサルノミナラス傍ラ健訟

ノ弊ヲ防クコトヲ得ヘシ殊ニ刑事裁判ノ如キ一般ノ人民ハ犯罪者ノ裁判費用ヲ分擔スルノ必要ヲ見サルノミナラス進テハ其犯罪者カ自由刑ノ處分ヲ受ケタル場合ニ於テ其監獄ニ於テ要スル實費ニ至ルマテ之ヲ負擔セシムルハ毫モ不可ナリトセス唯事實ニ於テハ常ニ無資力者タルヲ常ト爲スヲ以テ刑事ノ手数料ハ常ニ收入少ナキノミナラス財産刑モ自由刑ニ換刑セラレテ却テ一般人民ノ負擔ヲ増スニ至ルハ各國ノ例トスル所ナリ

非訟手数料トハ國家カ權利ノ發生移轉消滅等法律行為ノ保證ニ對シ之カ關係人ヨリ徵收スル手数料ナリ此種ノ料額ハ其保證事件ノ性質大小其他當事者ノ資力ノ額ニ關聯シテ實費ヲ超過スルノ場合多キノミナラス又形式ニ於テモ租稅ニ變形スルモノ少ナシト爲サス現ニ我國ニ於テモ新ニ制定セラレタル登録稅法ノ下ニ於テハ在來ノ非訟事件ノ手数料ヲ吸收セルモノ少ナシト爲ササルナリ

第二、行政手数料 行政手数料ハ又分レテ内務行政、軍務行政、財務行政及ヒ外務、行政ノ四種ノ手数料ニ細別スルコトヲ得ヘシ然レトモ茲ニハ軍務行政以下ノ

事體輕易ナルモノハ總テ之ヲ略シ内務行政手数料ノ中重モナル事項ノミヲ略述スヘシ

(甲) 衛生及ヒ教育行政上ノ手数料 衛生上ノ手数料ハ多ク古代ノ警察上ノ手数料ト相類聯セルモノニシテ種痘、消毒等ニ關スル手数料ノ類是ナリ然レトモ此種ノ事項ハ社會交通ノ頻繁ナルト共ニ之カ行政ハ公益上重大ナル利害關係ヲ有スルヲ以テ近時此等ノ手数料ハ漸次其跡ヲ絶ツニ至レリ (生行政費)

教育行政上ノ手数料ハ教育行政上重要ナル問題ニシテ現時小學教育ニ於ケル無手数料主義ハ學說、實際共ニ漸次勢力ヲ有スルニ至リタルモ多數ハ尙ホ手数料ノ徵收ヲ爲セリ教育行政ニ關スル手数料ハ授業料ノ外試験、證書ノ授與、入退學其他ノ事項ニ於テ尙ホ廣ク認メラルルモ其收入ハ些少ナルモノニ屬セリ (行政費)

(乙) 經濟上ノ手数料

(イ) 監督並ニ保證ノ手数料 監督並ニ保證ノ手数料ノ重モナルモノハ度量

衡ノ檢證、貴金屬ノ承認、蓋種ノ檢査、飲食物ノ檢査、土地臺帳ノ謄本、船舶ノ檢査、賣却抵當ノ公認、海員ノ雇入、工場製造場等ノ檢査等ニ伴フ手数料ナリ

(ロ) 免許及ヒ特許料 免許及ヒ特許料トハ醫師、藥劑師、獸醫師、鐵工等ノ免許料、鑛業採掘ノ特許料其他各種ノ免許及ヒ特許ニ關スル手数料ヲ包含スルモノナリ

第二部 無償收入

第一章 租税ノ觀念

第一節 課税權ノ觀念

國家ノ課税權及ヒ人民ノ納税義務ハ國家其モノニ對スル觀念ニ依リテ相消長ス。租税ノ歴史ハ專制課税時代ニ始マリ契約課税時代ヲ經テ今日ノ國民義務課税時代ニ變遷セリ古代強者カ弱者ニ對スル實力關係ヲ以テ成立セル專制國ノ下ニ在リテハ主權者ハ人民ノ身體財產ニ對シ絕對ノ權力ヲ有シ任意ノ方法ヲ以テ人民ヨリ貨財ヲ徵收シ其賦課ノ標準稅額ノ輕重等ハ總テ唯當局者ノ德義心ト智能トヲ待ツノ外ナカリシハ希臘羅馬其他東洋諸國ニ於テ見ル所ナリ其後私有財產制度ノ發達人權思想ノ隆興ト共ニ自由獨立ノ人民ハ國家ニ對シテ納税ノ義務ヲ負擔スルモノニ非スト爲シ一方ニ於テハ在來ノ租税ノ負擔者タル奴隸又ハ從屬國ノ人民ハ次第ニ其地位ヲ變シ當時ノ主權者ノ收入ハ主トシテ敵國ヨリ獲得スル

掠奪品官有財產ノ收入及ヒ君主ノ特權ニ基ク收入ニ依リ所謂絕對無償ノ徵收ハ君主ト雖モ之ヲ敢テスルコト能ハス今日ノ地租ハ或ハ小作料或ハ戶料等ノ同一ノ思想ニ因リテ徵收セラレタル封建時代ニ於テ見ル所ナリ隨テ國務ノ増加ト共ニ君主ハ一方ニ於テ益收入ノ不足ヲ告グ君主ハ常ニ貴族又ハ諸侯ヨリ新租税ノ賦課徵收ノ認諾ヲ求メ爲メニ歐洲ニ於ケル所謂租税承認權ナルモノノ權輿ヲ爲スニ至レリ其後封建政治ノ潰廢ハ中央集權ノ興隆トナリ十七世紀ヨリ十八世紀ノ中葉ニ至ル租税制度ノ紛雜ハ遂ニ自由主義ノ反動トナリ佛蘭西革命ヲ以テ十九世紀ノ義務的課税時代ニ再轉スルニ至レリ乃チ國民ノ納税義務國家ノ課税權ハ國家ノ觀念ノ發達ニ伴ヒテ理論ニ實際ニ公認セラレ曩ニ租税ノ承認權ヲ有シタル國會議會ハ契約ニ因リテ個々ノ場合ニ於テ國民ノ支出ヲ承諾スルニ非スシテ國家カ其生存發達上必要ナル經費ノ種類及ヒ費額ヲ審議シ之ニ應スルノ租税ニ協賛スルノ意義明カナルニ至レリ

斯ノ如ク租税其モノハ國家自體ノ發達ニ伴フテ發達シ其間租税ノ制度ニ對シテハ經濟及ヒ財政上ノ變遷ニ從ヒ單稅ト複稅比例稅ト累進稅間稅ト直稅ノ間ニ於

ヲ幾多ノ波瀾ヲ生シ殊ニ最新學派ハ社會政策主義ヲ加味シテ租稅ノ賦課ニ依リ
財政上ノ收入ヲ目的トスルノ外同時ニ富ノ分配ノ調和ヲ圖ルニ至リシハ前ニ
言セザル所ナリ

以上述フルカ如ク租稅其モノハ時ト處トニ依リ幾多ノ變遷ヲ來セルヲ以テ之ヲ
意識ニ關スル學說モ亦紛紛トシテ一致スル所ナシ彼ノ專制課稅時代ニ在リテ
租稅ノ徵收ノ權利ハ勝者ト敗者トノ關係ニ原因シ殊ニ東西兩洋ヲ通シ討伐征略
ノ盛ニ行ハレタル諸國ニ於テハ租稅ハ戰勝者カ戰敗者ニ對スル自然ノ權利トシ
テ公認セラレタリ然レトモ當時ノ租稅ナルモノハ一般平等負擔力ニ應ジテ賦課
セルモノニ非スシテ所謂戰敗者ニ對スル貢獻ニ外ナラサルヲ以テ其無償ノ納付
タルニ於テハ一ナルモ現時ノ租稅ト著シク其趣ヲ異ニセリ而シテ討伐征略ノ歷
史少ナキ獨逸英吉利佛蘭西等ニ於テハ地租ノ如キハ他ノ諸稅ニ後レテ發生シ而
モ今日ニ至ルマデ地租ノ稅率カ他ノ諸稅ニ比シテ一般ニ輕キハ又此等ノ關係ニ
基キモノナリ蓋シ當時戰勝者ト戰敗者ノ如キ純粹ナル實力關係ノ下ニ在リテハ
戰勝ノ餘威ヲ以テ任意ノ強制ヲ試ムルコトヲ得ヘキモ在來ノ自國民ニ對スル關

係ニ於テハ固ヨリ不法ノ強制ヲ許ササルノミナラス絕對無償ノ徵收方法タル租
稅ハ國家思想ノ幼稚ナルト共ニ多クハ手数料其他報償的ノ名義ニ其形式ヲ變ス
ルヲ常ト爲シタリ即チ國家ハ或直接ニシテ且有形ナル行動ヲ爲シ其報酬トシテ
人民ニ納稅セシムル迂遠ナル手段ヲ取リ所謂狹義ノ手数料君主特權ノ收入ノ如
キハ多クハ租稅ノ變形ニシテ又古代ニ於ケル官有財產ノ巨額ナルコトト私有財
產制度ノ幼稚ナリシコトハ此等ノ問題ニ頗ル密接ナル關係ヲ有セリ今我國古代
ノ財政ニ於テ租稅中ノ重モノナル地位ヲ占ムル所ノ地租ヲ以テ例スレハ孝德天皇
以後大化ノ新政ト共ニ口分田ナル制ヲ設ケ庶人以上六歳トナレハ男子二反女子
一反百二十步ノ土地ヲ給與シ之カ賣買讓與及ヒ相續ヲ禁シ一反ヨリ二束ノ租稻
ヲ徵收シタリ故ニ當時ノ班田ノ制ニ伴ヘル地租ナルモノハ其實定額分頭ノ一種
ノ小作料ニ外ナラス然ルニ土地ニ對スル國家ノ所有權ハ東西兩洋ヲ通シ漸次貴
族僧侶大地主等ノ手ニ移轉スルト共ニ此等ノ強者ハ皆免稅輕稅ノ特權ヲ保有シ
政府ノ收入ハ著シク減少スルト共ニ一方ニ於テハ私人ノ財產私有制度ノ發達ヲ
來シ政府カ財政上無償ノ徵收方法ヲ爲スノ必要ヲ見ルニ至レリ

中世封建時代ニ在リテハ君主諸侯豪族ハ其當初ニ在リテハ所謂大地主經濟ニヨリ財產收入ト特權收入トヲ以テ財政ヲ維持シタリシモ財產ノ減少ト經費ノ膨脹ハ常ニ歲計上ノ不足ヲ生セシヲ以テ十字軍ノ前後ニ在リテハ大陸ノ諸侯ハ臨時ノ補助ヲ豪族ニ要求シ豪族會ハ之ヲ議シテ承認若ハ修正シテ自ラ之ヲ管理シ國會ハ此議決ノ下ニ租税ノ單位稅額等ヲ定メテ徵收スヘキ額ヲ納稅義務者間ニ配賦シ收納セル收入ハ別ニ獨立セル金庫ニ納メ專屬ノ金庫委員之ヲ管理シ政府ハ其承認ヲ得ルニ非サレハ之ヲ引出スコト能ハサルコトト爲セリ當時ハ英國ニ在リテハマクソン王ノマクナカルタ欽定ノ前後ニシテ所謂租税承認權ノ行ハレタル時期ナリトス其後十字軍ハ封建政治壞類ノ動機トナリ中央集權ノ興隆トナリテヨリ常備軍ノ設備官吏ノ常置公債ノ償却公共經費ノ膨脹ニ伴ヒ君主ノ權力ノ増進ハ豪族ノ衰微ト相俟テ租税承認權モ事實名義上ノモノトナリ佛蘭西ヲ中心トシテ列國ノ討伐侵畧ハ益經費ノ増進ヲ來タシ十七世紀ヨリ十八世紀ノ中葉ニ至ル列國ノ財政ハ諸負收稅ノ不平等不公平ト徵收費過多ヲ以テ租税制度ノ複雜ヲ極メ國費ノ濫消益國民ノ苦痛ヲ増シテ止マル所ナク遂ニ自由主義ノ反動トシ

テ米國獨立戰爭トナリ佛蘭西ノ大革命ヲ惹起スルニ至リタリ

所謂契約課税ノ最モ盛ニ行ハレタルハ第十八世紀即チ人權主義ノ最モ盛ナル時代ニ在リ人民ハ經濟上ノ利益其他ノ欲望ヲ満足センカ爲メ國家ヲ構成スルモノナリトスル民約說ノ思想ハ租税ヲ以テ單ニ國家ノ勤勞ニ對シ支拂ハルル報酬ナリトノ觀念ヲ起サシメ人民ハ公權ニ依リテ安寧ヲ保護セララルカ故ニ之カ對價トシテ租税ヲ支拂フヘキモノナリト思慮シタリモンテスキューカ租税トハ人民各自其財產ヲ安全ニ享有スルカ爲メ國家ニ供與スル財產ノ一部ナリト謂ヒ佛國ノ國民議會ハ租税トハ國民全體ノ共同負債ニシテ社會カ彼等ニ與フル所ノ利益ノ對價ニ外ナラスト議決セルカ如キハ皆此主義ニ基ケルモノニシテブルドックンカ租税ハ國家カ勤勞ヲ供シ國民ハ之ニ代ヘテ貨幣ヲ支拂フ所ノ一種ノ交換ナリト曰ヘルハ契約課税主義ノ理想ヲ表示セルモノトス而シテ此等ノ利益交換說ハ其後漸次進化シルワイヤ氏ノ如キハ租税ハ社會生活ノ下ニ於テ人民カ過去現在及ヒ將來ニ於テ享受スル利益又ハ前代カ後世ノ爲メニ消費シタルモノノ報償トシテ勞力又ハ貨物ヲ以テ支拂フ所ノ生産物ノ一部ナリト曰ヘリ抑モ利益交

換税ハ政治上或ハ專制的ノ賦課徴収ニ對スル牽掣トナリ社會ノ福利安寧ヲ増進スルノ刺激トスルノ利益アラシムモ其根據タルヘキ民約論カ一片ノ空想ニ止マルノミナラス所謂交換セラレヘキ國家ノ行動ハ決シテ之カ價額ヲ秤量スヘカラサルモノナルコトハ既ニ總論財政ノ特質ノ下ニ於テ一言セル所ノ如シ今假ニ一歩ヲ讓リテ之カ利益ハ數量ノ上ニ於テ算定スルコトヲ得ヘシトスルモ之ヲ各個ノ人民ノ享有スル程度ニ應シテ分配スルコトハ事實不能ニ屬スルモノナリ尙ホ一歩ヲ讓リテ各個人ノ享有スル利益ノ價額カ精確明瞭ニ算定スルコトヲ得ヘシトスルモ事實ニ於テ國民ノ納付スル租税ノ額ハ其享有スル利益ノ大小ニ比例スルモノニアラス是レ養育院ノ保護ヲ受クル貧民カ利益ヲ享有スルコト著シク大ナルニ拘ハラス納税ヲ負擔スルコトナク又負擔スルコト能ハサルヲ以テ見ルモ明カナリトス

契約課税時代ニ在リテハ又利益交換税ノ外尙ホ租税ヲ以テ一種ノ保險料ナリト解釋スルノ説行ハレタリミラポールノ租税ハ社會ノ秩序ニ對シテ保護ヲ得ンカ爲メニ供スル所ノ前金ナリト曰ヘルカ如キ即チ公安ニ對スル保險料説ナリ此説ハ

又政府ノ行動ヲ以テ總テ公安ノ維持ニ限定スルノ機アルノミナラス各自ノ公安ノ維持ニ依リテ生命財産ノ保護ヲ受クル利益ノ算定シ難キコト及ヒ其納税ノ負擔カ利益ト比例セサルコトハ前説ト異ナル所ナシ殊ニ公安其盡カ破レタルトキハ昔ニ之カ保險ヲ爲ササルノミナラス又却テ租税其他ノ負擔カ増加スルヲ例ト爲スモノニシテ學説トシテハ殆ト何等ノ根據ヲ有セサルモノナリ

近時國家ノ觀念發達シテ所謂國民經濟的課税時代ニ遷ルヤ人民ハ國家組成ノ一分子トシテ國家其モノノ生存上必要ナル經費ヲ支辨スルカ爲租税ノ賦課徴収ヲ受クヘキモノナルト一般ノ公認スル所トナレリ所謂國民義務税ナルモノ是也而シテ此現時ノ租税ノ觀念ハ其萌芽ヲ遠ク十二世紀ノ古ニ發セリ乃チ十字軍ノ影響トシテ商工業及ヒ交通事業ノ發達ヲ促カサレタル伊太利及ヒ獨逸ノ自由都市ハ貨幣經濟ノ發達ト共ニ爲替手形貸付信用ノ制度ヲ創メ都市ノ獨立自治ノ基礎鞏固ニ當リ増殖進ムニ伴ヒ都市自體ノ防禦及ヒ所在侯ノ戰事其他ノ危險ノ擔保ニ價フヘキ報償的納付市民ノ自治行政殊ニ經濟上ノ行政ニ伴フ經費ニ對シテハ土地森林等ノ財産收入及ヒ特權收入ノミヲ以テ之カ歲計ヲ維持スルニ足ラサルヲ

以テ共同ニ都市ノ下ニ利益ヲ享有スル市民ハ凡テ一般市民ノ義務トシテ各其負擔力ニ應レ共同經費ノ補助ヲ負擔スヘキモノトシ消費稅行爲稅等ノ間接稅ヲ以テ經常課稅ト爲シ直接財產稅人身稅地租家屋稅等ノ直接稅ヲ以テ臨時課稅トナシ後經費ノ増進ニ伴ヒ直接稅モ經常課稅トナシ時ニ收入ノ前借タリシ流動公債又ハ確定公債ニヨリ臨時ノ公共信用ヲ開クニ至レリ乃チ十二世紀ヨリ十三世紀ニ至ル伊太利及ヒ獨逸ノ自由都市ハ近世租稅ノ觀念ノ萌芽ヲ發セルモノニシテ爾後自由都市ノ衰頹ト共ニ永ク暗黒時代ニ葬ラレ十九世紀ノ前葉ニ於テ其果實ヲ結ヒタルモノト云フヘキナリ而シテ契約課稅時代ヨリノ變遷時期ヲ見レハハコッサカ租稅トハ富ノ一部分ニシテ國家其他ノ公共團體カ納稅者全體ノ利益ヲ圖ランカ爲メニ必要ナル費用ニ供スル目的ヲ以テ徵收スルモノナリト曰ヘルカ如キハ正ニ過渡時代ノ租稅ノ觀念トシテ利益交換說ノ一部ヲ加味セルモノナリ然ルニ國民義務說ニモ國家ノ行動ノ目的ニ付テ論スルコトナク單ニ國民ノ國家ニ對スル義務ノミニ付テ說ヲ爲スモノアリロシエルノ租稅トハ各個人カ國家其他ノ公共團體ニ從屬セル結果トシテ其財政上ノ必需ヲ充サンカ爲メニ支拂ハサルヘカ

ラサル收納物ナリト曰ヘルカ如キ即チ是ナリ又國家ノ行動ノ目的ニ論及スル者ニハ租稅其モノニ對シ之カ支出ノ目的ヲ加フル者アリメニエーアカ租稅トハ行政費及ヒ國家ノ資本ヲ改進スル一般ノ費用ナリト曰ヘルカ如キ即チ是ナリ或ハ又徵收ノ目的ヲ加フル者アリ近時タクナル等ノ社會政策主義ヲ懷抱セル學派カ租稅ノ徵收ハ財政上收入ヲ得ルノ外同時ニ社會ニ於ケル富ノ調和ヲ目的トスル強制的ノ分配ナリト爲スハ既ニ屢述ヘタル所ナリ蓋シ租稅ノ定義トシテ其支出又ハ收入ノ目的ヲ加味スルハ恰モ法律ノ定義ニ之カ目的ヲ加味スルト同シク租稅其モノノ理想トシテハ固ヨリ不可ナカルヘキモ租稅ナルモノハ必シモ此等理想ノ遂行ノ條件トシテ始メテ成立スルモノニアラサルハ言テ俟タサル所ナリ斯ノ如ク學者ノ所論又區區ニ分カルモ均シク利益交換說ヲ排シテ國民義務說ヲ採ルニ於テハ一ナリ固ヨリ租稅ノ納付ハ無償ニシテ利益ニ對スル交換ニアラス然レトモ何故ニ國民ハ國家ノ經費ニ對シテ租稅ヲ納付スル義務アルカ此問題ハ純然タル哲學上ノ問題ニシテ現ニ國家ノ觀念其モノカ尙ホ理論ニ於テ一定セラレサル今日ニ於テ又本問題ノ論決ニ之ヲ容易ニ決スヘカラサルモノアリ然レ

トモ所謂利益交換説ナルモノニ於テ自ラ多少ノ眞理ヲ存セサルニ非ス換言スハ何等ノ利害關係ヲモ有セスシテ貨財ノ移轉カ發生シ得ヘカラサルコト是ナリ日本人民カ日本國ノ經費ニ對シテ租稅ヲ納付スルモ又外國人カ日本ノ領土ニ住居スルカ故ニ一部ノ租稅ヲ納付スルモ地方人民カ各自其地方團體ノ需要ニ應ジテ租稅ヲ納付スルモ地方團體各自カ必スシモ其地方人民ノ負擔力ヲ別問題ト爲シ其特別ナル事情ニ伴フテ所謂地方特別稅ナルモノヲ起スモ均シク地方稅ニシテ同一地方人民ニ對シテ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ許スモ或ハ特ニ負擔稅ナルモノヲ認ムルモ皆單純ナル國民義務ノ觀念ヲ以テ之ヲ説明シ得ヘキモノニアラス皆其間ニ特有ノ利害關係ヲ有スルニ外ナラサレハナリ所謂條理又ハ衡平ト稱セラルル觀念ハ英國法ニ所謂條理法又ハ衡平法ト稱セラルルモノニシテ社會現象ノ錯雜ナル問題ヲ解釋スル一大標準タルカ如ク國民義務説ニ於テ各自カ負擔力ニ應ジテ納稅スト云フモ衡平ヲ主トスルカ故ナリ國民以外ノ者モ互ニ在外國ニ於テ或ハ本邦ニ於ケル租稅ノ一部ヲ免除セラレ或ハ所在國ノ租稅ノ一部ヲ負擔スルカ如キモ亦衡平ニ基因スルモノナリ其他特別稅ノ設定不均一ノ賦課等

凡テノ現象ニ通シテ之ヲ觀察スルトキハ結局皆利害關係ヲ有スル間ニ於テ衡平ヲ保シモノナリト謂フヘキナリ(租稅ノ原則及地方稅則照)

第二節 租稅ノ定義

租稅トハ國家又ハ公共團體カ其經費ニ充ツルカ爲メ私人ヨリ徵收スル經濟的貨財ノ一般收納ナリ

第一、租稅ハ國家又ハ公共團體カ其經費ニ充ツルヲ目的ト爲スモノナリ

國家又ハ公共團體ハ自己ノ生存發達ヲ爲スカ爲メニ經費ヲ要ス然レトモ其私有財產又ハ營業ニ依ル收入ヲ以テ之カ經費ヲ蔽フコト能ハス故ニ其大部分ヲ租稅收入ニ仰クニ至リシハ近時國家ノ發達ニ伴フ自然ノ數ナリ又獨逸派ノ學者ハ別ニ公益ヲ以テ租稅徵收ノ目的ノ一ト爲シ之ヲ租稅ノ定義中ニ包含セシ者アリ蓋シ租稅ノ種類及ヒ分量ハ一般人民ニ對シ直接ニシテ且重大ナル利害關係ヲ有スルモノナルヲ以テ公益ノ目的ニ使用セラルヘキ租稅其モノノ徵收方法ニ依リ又公益ヲ目的トシテ富ノ分配ニ對スル調和ヲ圖ルヘキコトヲ謂フ

モノナリト雖モ目的ハ定義ニ加味スヘカラサルコト上述セル所ノ如シ
第二、租税ハ私人ヨリ徴収スルモノナリ

茲ニ私人ト云フハ權力團體ニ對シ服從ノ地位ニ在ル者ヲ謂フ其自然人タルト
法人タルト又外國人タルト内國人タルトハ措テ之ヲ問ハサルナリ但外國人ヲ
以テ租税ノ主體ト認ムルコトハ國民義務說ノ觀念ト相混同セサルコトヲ要ス
納税義務ノ範圍ニ關スル問題ハ納税義務ノ根據ニ關スル問題ト其類ヲ異ニス
ルモノナレハナリ國民ハ國家ヲ組織スルニ由リ國家ノ生存ニ必要ナル租税ヲ
納ムルノ義務アリ然レトモ租税ヲ納ムル者ハ必スシモ國民タルコトヲ要素ト
爲サス國民ニアラスシテ外國人カ自國ノ保護利益ヲ享受スルトキハ其保護利
益ニ對スル報酬トシテ租税ヲ納メシムルコト一方ニ於テ自國ノ國民カ外國ニ
居住シテ本國ヨリ利益ヲ受ケス又ハ其享有スル保護利益僅少ニシテ其所在國
ヨリ保護利益ヲ受ケル場合ニ於テ其所在國ニ納税スルト同シク毫モ條理ニ反
スルモノニアラス又徴収トハ公權ノ作用ニ依リテ私人ヨリ無償ノ納付ヲ強制
スルヲ謂フ租税ノ數額徴收ノ方法其他ノ手續ハ總テ國家又ハ公共團體ノ指定

第三、租税ハ經濟的貨財ノ一般收納ナリ

スル所ニシテ納税者ノ選擇協定ヲ許スモノニアラサルコトヲ云フ
茲ニ一般收納ト稱スルハ手數料官業官有財産ノ收入等ノ如ク相互提供ノ原則
ニ依リ特別ニ收納セララル所謂有價收入ナルモノニ非スシテ國家又ハ公共團
體カ指定ノ條件ニ適合スルモノニ對シ等シク絕對ノ收納ヲ爲スヘキコトヲ謂
フ租税ハ經濟的貨財ナリ故ニ非經濟的貨財即チ自由貨財ハ租税ト爲スコトヲ
得ス然レトモ經濟的貨財ハ有形ト無形トヲ問ハス等シク租税ト爲ルヲ得ヘキ
カ又無形ノ經濟的貨財カ租税ト爲ルヲ得ヘシトスルモ金錢ヲ以テ之カ價額ヲ
秤量スルコトヲ得ヘキ夫役ノ如キモ金錢ヲ以テ之カ價額ヲ秤量スルコトヲ得
サル兵役ノ如キモ等シク租税ト見ルヘキカ是レ學說ノ岐ルル所ナリ夫役ノ如
キ地方團體カ負擔者ノ利益ヲ圖リ之カ負擔ヲ輕減センカ爲メニ特ニ指定ノ勞
務ヲ命シ一方ニ於テ金錢ノ代納ヲ許スコトヲ原則ト爲スコトヲ得ルモノハ又
一ノ租税タルコトヲ妨ケサルニ似タレトモ兵役ノ如キ忠實服從ノ義務ハ金錢
ヲ以テ秤量シ得ヘキモノニ非サルカ故ニ無形ノ貨財ヲ徴收スルヲ以テ等シク

之ヲ租税ナリトスル論者ニ在リテモ勤務ハ總テ性質上租税ノ一種ト見ルヘキ
モ形式ノ上ニ於テハ決シテ租税ト見ルヘカラスト爲ス者亦少ナシトセス
アールズ氏ノ如キハ即チ是ナリ

第三節 租税ノ用語

第一、租税ノ主體 租税ハ主體トハ租税ヲ賦課セラルル人ヲ謂フ所謂被稅者ト
稱セラレルモノ是ナリ而シテ形式上其姓名納税額等ヲ租税原簿ニ記入セラレ
直接ニ政府ニ對シテ租税ヲ納付スル者ヲ納稅者ト謂ヒ其租税ヲ負擔シテ之ヲ
自己ノ所得又ハ財産中ヨリ支出スル者ヲ負稅者ト稱ス所謂直接稅ナルモノハ
納稅者ト負稅者トノ同一人ナルコトヲ豫期セル租税ニシテ間接稅ナルモノハ
納稅者ト負稅者トノ相異ナルヘキコトヲ豫期セルモノナリ

第二、租税ノ客體 租税ノ客體トハ租税賦課ノ標準トナル人物又ハ事實ヲ謂フ
即チ其人物又ハ事實ノ存在發生消滅若クハ變更ニ依リテ租税ノ支拂ヲ爲スヘ
キモノニシテ所謂課稅物件ト稱セララルルモノ是ナリ人カ課稅物件トナルハ分

頭税ヲ課スル場合ニシテ此場合ニ於テハ租税ノ主體ト客體トハ共ニ相合致ス
ルモノナリ古代歐洲各國ニ於テ人民ノ階級ニ應シ各相異ナルハ税率ノ分頭税
ヲ課シタルコトアリ今日ニ於テモ尙ホ佛蘭西ニ於ケル兵役稅ノ如キ多少ノ實
例ナキニアラス物ヲ課稅物件トスル場合ノ主要ナルモノヲ土地家屋等ノ不動
產ト爲ス勤勞又ハ財産ニ依ル所得モ亦課稅物件トスルヲ例ト爲セリ事實ヲ課
稅物件ト爲ス場合ノ主要ナルモノハ營業契約財産ノ賣買讓與相續等トナス
第三、稅源 稅源トハ租税ノ流出スル源泉ナリ稅源ノ課稅物件ニ對スル關係ハ
納稅者ノ納稅者ニ對スル關係ノ如シ課稅物件ハ稅源ヨリ租税ヲ吸收スル
標準トナリ方便トナルモノナルヲ以テ稅源ト課稅物件トハ相合致スルコトア
リ又否ラサルコトアリ例ヘハ所得稅ニ在リテハ其所得稅トシテ納ムル金額ハ
其所得ノ一部ヨリ支出シ而モ其賦課ノ標準ハ所得ノ多寡ニ存スルヲ以テ稅源
ト課稅物件トハ相合致スルモノトス之ニ反シテ地租ノ如キハ其賦課ノ標準ハ
土地ノ面積又ハ地價等ニ依リ而モ其稅源ハ其土地ノ收益ニアルヲ以テ稅源ト
課稅物件トハ相合致セサルモノナリ租税ノ收入ハ結局社會ノ財源即チ主體ノ

所得若クハ財産ヨリ生スルモノニシテ而シテ一方ニハ租税ハ經常ノ收入ニ充ツヘキモノナルヲ以テ租税ノ負擔ヲ財産ニ及ホストキハ稅源其モノチ枯渴スルノ憂アリ從テ所得ノミニ課スルコトヲ課税ノ原則ト爲シ又僅少ナル所得ニ對シテ賦課ヲ免除スルコト近時課税ニ對スル一般ノ原則ナリ

第四、租税ノ單位、稅率、稅尺及ヒ稅步 租税ノ單位トハ課税物件ノ一定ノ分量ニシテ租税ノ賦額算定ノ基礎トナルモノヲ謂フ稅率トハ租税ノ單位ニ對シテ賦額スル稅額ヲ謂フ稅尺トハ租税ノ單位ニ對スル稅額ノ比率ヲ謂フ而シテ稅率ト稅尺トヲ包含シテ別ニ稅步ト稱スルコトアリ但現行ノ租稅法規ニ在リテハ稅率ヲ以テ茲ニ所謂稅步ノ意義ヲ像タシムル例ト爲セリ

第五、租稅臺帳及ヒ稅表 租稅臺帳トハ租税ノ主體客體及ヒ租税ノ負擔若クハ義務ヲ證明スル事實等ヲ集錄セル官衙ノ記錄ナリ租稅臺帳中最モ重要ナルハ地租ノ臺帳ニシテ歐洲諸國ニ在リテハ特ニ之ニ關スル法規ヲ制定セル所少ナカラス(明治二十二年三月勅令第三十九號土地臺帳規則第三條) 稅表トハ或種ノ租税ノ各物體ニ付テ單位及ヒ稅步等ヲ記錄セル官衙ノ表ナリ移轉稅等ニ在リテハ一一輸出入物品ノ重量

品質ニ應ジテ租税ノ賦課ヲ爲スモノナルカ故ニ此種ノ租税ニ對シテハ稅表ハ租稅臺帳ノ效用ヲ爲スモノナリ

第二章 租税ノ原則

緒論

租税ノ原則トハ租税ノ應課分合度、其賦課徵收ニ關シ之カ標準トナリ之カ準繩トナルヘキ法則ニシテ近時租税制度ノ複雜ヲ増スニ從ヒ租税ノ原則ハ租税問題ニ於テ甚重要ノ度ヲ増スニ至レリ租税ノ原則ニ於テ最モ有名ナルモノハアダムスミスノ法則ナリ其法則ノ大要ヲ舉レハ即チ

- 第一、國民ハ其財力ニ應ジテ政府ノ費用ヲ分擔スヘシ國民ハ國家ノ保護ノ下ニ在リテ享有スル所ノ收入ニ比例シテ政府ノ費用ヲ分擔セサルヘカラス
- 第二、總テ租税ノ種類、數額、納税ノ時期及ヒ場所等ハ不法ナル賦課徵收ヲ爲サシメサルカ爲メニ公正ニシテ且確實ナルコトヲ要ス
- 第三、租税ノ徵收方法ハ總テ納税者ノ便宜ニ反セザランコトヲ要ス

第四、租稅徵收ノ費用及ヒ期間ハ成ルヘク少ナクシテ且迅速ナルコトヲ要ス
 ノ四原則ナリ此四原則ハ固ヨリ大體ニ於テ非難スヘキ點ナキノミナラス爾來ノ
 ニ學者ノ注意ヲ喚起シ第十九世紀前後ニ於ケル各國ノ租稅政策上ニ及ホシタ
 影響ハ誠ニ尠少ナリトセス但此原則ニ於ケル多少ノ誤解ト不備脫漏ノ缺點ト
 爾後幾多ノ學者ニ依リテ改正増補セラレ漸クワグネル氏ニ至リテ最モ完備ナ
 理論的秩序的ノ分類ヲ見ルニ至レリ氏ハ租稅ノ原則ヲ財政上ノ原則經濟上ノ原
 則道義上ノ原則及ヒ行政上ノ原則ノ四部ニ大別シタリ財政上ノ原則ハ又細分シ
 テ

- (一) 經費ヲ支辨スルニ充分ナル收入ヲ得ヘキコト
- (二) 經費ノ増減ニ伴ヒテ屈伸力ヲ有スルコト
- ノ二者ニ分類シ經費上ノ原則ハ又細分シテ
- (一) 稅源ノ種類ニ對シテ選擇ヲ爲スヘキコト
- (二) 負擔ノ輕重ヲ計リテ稅源ノ涸竭ヲ防クコト
- ノ二ト爲シ道義上ノ原則ハ又細分シテ

- (一) 租稅ノ負擔ハ國民一般ニ普及スヘキコト
- (二) 租稅ノ負擔ハ國民ノ納稅力ニ比例スヘキコト
- ノ二ト爲シ行政上ノ原則ハ又細分シテ
- (一) 租稅ノ賦課徵收ハ正確ナルヘキコト
- (二) 租稅ノ賦課徵收ハ納稅者ノ便宜ニ副フヘキコト
- (三) 租稅ノ賦課徵收ハ成ルヘク徵收ノ費用ヲ節減スヘキコト
- ノ三ト爲セリ氏ノ分類法ハ現時一般ニ模範ト爲ス所ニシテ茲ニハ大體ニ於テ氏
 ノ分類方法ニ依リ唯財政ノ意義ヲ廣義ニ解シ財務行政ノ原則ヲ均シク財政上ノ
 原則中ニ包含セシメ結局次ノ三原則ト爲ス
- 第一、財政上ノ原則 財政上ノ原則トハ租稅ニ依リテ國庫ニ必要ニシテ且充分
 ノ收入ヲ與ヘ又租稅行政ノ完備スヘキコトヲ謂フ
- 第二、公正ノ原則 公正ノ原則トハ租稅ハ一般平等ニシテ且正確ナルヘキコト
 ヲ謂フ
- 第三、經濟上ノ原則 經濟上ノ原則トハ租稅ノ賦課徵收ニ因リテ經濟上ノ損害

第二節 無償債入 第二等 租税ノ原則 結論
租税ヲ求メサルヘキコトヲ謂フ

以上ノ原則ニ於テ第一原則ハ租税其モノノ根本的性質ニ基クモノニシテ第二及
第三ノ原則ハ個人經濟及ヒ一般經濟ニ及ホス影響並ニ關係ニ對スル第一ノ原
則ヲ達セシムヘキ調和手段トシテ認ムヘキ原則ナリ故ニ茲ニハ一般ノ例ニ反シ
第一ニ財政上ノ原則ヲ述ヘ以下行政上及ヒ經濟上ノ原則ニ論及スヘシ

註一 「レスモンザイ」ノ如キハ主トシテ經濟上ニ於ケル租税ノ原則ヲ主張シ次ノ四箇
ノ原則ヲ唱ヘタリ

- 第一 租税ノ負擔ハ資本ニアラスシテ收入ニ在ルコトヲ要ス
 - 第二 租税ヲ賦課スルニ當リテハ總生産物ト收入トヲ混合セザルコトヲ要ス
 - 第三 租税ハ決シテ納税者ノ生存必要費ヲ侵スヘカラス
 - 第四 租税ハ之ヲ賦課セル富ナシテ他國ニ流出セシメサルコトヲ要ス
- 「ガルニエー」氏ノ如キハ租税ノ原則ヲ細分詳説スルコトニ依リテ大ニ租税ノ觀念ヲ明
瞭ナラシムヘシト爲シ租税ノ全體ニ關スルモノ十二則ヲ加フルニ同稅ニ關スル四則
合計十六ノ原則ヲ設ケタリ而シテ租税ノ全體ニ關スル原則ハ即チ左ノ如シ
- 第一 租税ハ公平ノ原則ニ基カサルヘカラス納税者ハ法律上皆同等ナルヲ以テ凡
テ租税ヲ納メ得ル者ハ悉ク納税ヲ免ルヘカラス
 - 第二 租税ノ稅額ハ人民所得ノ一小部分ニ止メ輕少ナルコトヲ要ス

- 第三 租税ノ稅額及ヒ徵收ノ時期方法等ハ明確ニ確定シテ憲法粉砕ノ生セサルコ
トヲ期スヘシ
- 第四 租税ノ賦課徵收ハ簡易正確ニシテ徵收費ヲ少クシ速ニ歸庫ニ入ルコトヲ要
ス
- 第五 租税違脫ノ弊害ヲ防遏スルコトヲ要ス
- 第六 租税ハ人民ノ財產所得ニ比例シテ賦課スルコトヲ要ス但稅額重カラザルト
キハ一定ノ限度マテハ果速ノ比率ヲ以テ賦課スヘシ
- 第七 租税ハ同稅ヨリモ直稅ヲ用フルコトヲ要ス
- 第八 租税ヲシテ單一ニ歸セシムルコトヲ務メ成ルヘク簡約ナラシムヘシ
- 第九 納税者ニ租税ヲ許諾シ且之ヲ檢査セシムル權利ヲ保障スヘシ
- 第十 人民ハ政府ニノミ納税シ且眞ニ施行セラレタル國務ニ對シテノミ納税スヘ
シ
- 第十一 租税ハ其性質上又ハ結果ニ因リテ道徳上ノ弊害ヲ生スルコトナカラシム
ルコトヲ要ス
- 第十二 政府ハ租税收入ヲ悉ク支辨シ盡ササル以上ハ新稅ヲ設ケ又ハ公債ヲ起ス
ヘカラス

次ニ關稅ニ關スル四原則トハ即チ

- 第一 關稅ハ奢侈品ニ賦課スルコトヲ要シ比較的輕稅ト爲スコトヲ妨ケス

第二節 無償收入 第二章 租税ノ原則 第一節 財政上ノ原則

第二 間税ハ成ルヘク食品ニ課スルコトナキヲ要ス但健康ヲ害スル如キ物品ハ此限ニ在ラス

第三 間税ヲ一般ノ消費物及ヒ人生必須ノ物品ニ課スルトキハ其額最モ輕カラサルヘカラス又賦課スヘキ税目ハ密買等ノ弊害賦課徴收ノ煩雜等ヲ避クル爲メ成ルヘク少キコトヲ要ス

第四 關税ハ輸入品及ヒ該國ニ産出セサル物品若クハ其製造ヲ禁止スルモ敢テ大ナル不價ヲ生セサル物品ノミニ之ヲ賦課スルコトヲ要ス是レ内國ノ生産ニ就テ政府ノ收税上ノ干渉ヲ避クルカ爲メナリトス

第一節 財政上ノ原則

財政上ノ原則ハ又第一租税收入ノ十分ニシテ且屈伸力アルヘキコト第二租税行政ノ完成スヘキコトノ二則ニ再分セラル

第一款 租税ノ收入額及ヒ性質ニ關スル原則

第一項 租税ノ收入額ニ關スル原則

此原則ハワグネル氏ノ財政上ノ原則ノ一ニシテ經費ヲ支辨スルニ充分ナル收入

ヲ得ヘキコトヲ謂フ蓋シ租税ハ現時各國ニ於テ國庫收入ノ大部分ヲ占ムルモノナルカ故ニ一般ノ收入ニ對シテ最モ重要ナル關係ヲ有ス

租税ノ實際問題ニ於テ或ハ惡税重税ノ非難ヲ受ケ或ハ經費ノ不生産ニ付テ反抗ヲ受クルコトアルハ皆此原則ヲ遂行スルニ基クモノナリ此原則ハ租税ニ關スル各種ノ原則中第一ニ行ハルヘキモノニシテ各國ノ財政ノ歴史カ時ニ經費ヲ支辨スルコト能ハサルハ租税收入殊ニ定率税ニ於テ財政家ノ將來ニ對スル豫算ノ相違ニ基クコト多シ從テ定率税等ノ場合ニ於ケル租税收入ノ豫算ハ當局者ノ最モ注意ヲ要スル點ニシテ又古來理論上鞏固ナリト稱セラレタル租税制度中此原則ノ爲メニ之ヲ實行スルコト能ハサルモノ多シ例ヘハ單一租税制度ハ理論上ニ於テモ租税公平ノ原則ニ背反スル單一ナル租税ヲ以テ國庫ノ總テノ租税收入ヲ得ル能ハサルコト又其重ナル缺點ナリ又奢侈税ノ如キモ風教上ノ點ヨリ一般ニ鞏固ナル租税トシテ重要視セララルモノナレトモ收入ノ數額ヨリ觀ルトキハ其税ト關フコト能ハス何トナレハ奢侈品ハ生活上必要ナル貨財ニアラサルカ故ニ一方ニ於テハ其需要ノ總額カ絶對ニ少ナキノミナラス之カ税率ヲ高ムルトキハ直

チニ應匿廢止其他ノ手段ニ依リ其需要ヲ減シテ收入額ニ減少ヲ來スモノナレハナリ

租税ノ收入額カ充分ナルコトヲ要スト云フモ要スルニ國家ノ經費ニ充用スヘキ萬收入額ヲ意味スルモノニシテ假令同額ノ純收入ヲ得ルトモ其徵收費ノ比率多キニ失スルトキハ實ニ國家カ生産上必要ナル資本ヲ徒費スルノ責ヲ免レサルノミナラス必ス賦課徵收ノ方法ニ於テ紛雜煩苛ヲ來タシ其手續ノ困難ナルト被徵收額ノ大ナルニ依リ國民カ受クル所ノ苦痛一層甚シカルヘシ彼佛蘭西ノ大革命ノ如キハ正ニ租税制度ノ弊害ニ起因セルモノニシテ政治上經濟上ニ於テモ亦甚ク忌ムヘキコトナリトス(經濟編收入徵收)

第二項 租税ノ屈伸力ニ關スル原則

國家ノ經費ハ年々逕フテ増加ノ傾向ヲ有スルカ故ニ經常收入タル租税收入モ亦歲出ノ増加ニ相隨伴スルノ性質ヲ有セサルヘカラス所謂租税ニハ時ノ必要ニ應シ他働又ハ自働ニ其收入額ヲ増加シ得ヘキ力ヲ有セサルヘカラスト爲ス理由ハ

- 一ニ此點ニ存セリ然レトモ尙ホ各國ノ財政上政府ノ官業官有財産ノ收入ノ如キ市場ノ動靜ニ依リテ著シキ變更ヲ來スヘキ收入ノ過不足ヲ生スル毎ニ之ニ應シ自然ニ收入ノ上ニ屈伸力ヲ有スル租税ノ必要ハ更ニ又大ナルモノアリ今收入税所得税移轉税及ヒ消費税ニ付キ屈伸力ニ對スル大體ノ觀察ヲ下セハ次ノ如シ
- (一) 收入税 收入税ハ文化發達セル國家ノ下ニ在リテ財政上ノ原則ニ適合セサルヲ常トス何トナレハ此種ノ租税ハ社會ノ進歩ニ伴ヒ容易ニ増加シ得ヘキモノニアラサルノミナラス性質上不動ヲ尙フモノニシテ縱令財政上餘裕アル場合ト雖モ之ヲ輕減スヘキモノニアラサレハナリ例ヘハ地租ノ類ニ於テハ伸張ノ餘力少ナキノミナラス之カ輕減ハ地主ニ於テ地價ノ騰貴ト共ニ二重ノ利益ヲ與ヘ其復舊ニ付キテハ間接税ノ場合ニ比シ困難ヲ感スルコト大ナリ殊ニ地價修正ニ至リテハ其事業困難ナルコト吾邦地租ノ歴史ニ見ルモ明ナル所ナリ
- (二) 所得税 所得税ハ一般ニ學者ノ稱揚セル所ナレトモ各國ヲ通シテ其收入ノ額ハ他ノ諸税ニ比シテ豫想外ニ少ナキテ例ト爲スモノナリ現ニ我國ニ於テモ三十五年度豫算ニ依レハ所得税ハ六百十萬圓ニシテ地租ノ約八分ノ一酒造税

ノ約十分ノ一ヲ占ムルニ過キス然レトモ其屈伸力ヲ有スル點ニ於テハ又他ノ
諸税ノ重カニ及フ所ニアラス殊ニ英國ノ如ク所得稅收入額ノ著シク大ナル處
ニ在リテハ財政ノ緩急ニ對スル調和ノ手段ト爲シ年殆ト稅率ノ變更ヲ見サ
ルコトナク稅率ハ八厘三毛ヨリ六分七厘ノ間ヲ昇降シタリ蓋シ十九世紀ニ於
ケル英國ノ財政ハ殆ト所得稅ノ經理ニ依リテ之カ成效ヲ見タリト謂フコトヲ
得ヘキナリ

(三) 移轉稅 移轉稅ハ經濟社會ノ發達ニ伴ヒ著シク増加スヘキモノナルヲ以テ
亦屈伸力ヲ有スレトモ移轉ノ度數ニ應スルモノナルカ故ニ戰時其他ノ事變ニ
依リ經濟界ニ移動ヲ生スル場合ノ如キハ一方ニハ收入ノ増加ヲ要スルニ拘ハ
ラス却テ之カ收入ノ急激ナル減少ヲ見ルノ缺點ヲ有スルモノナリ

(四) 消費稅 消費稅ハ租稅收入ニ對シ充分ノ供給ヲ爲スノミナラス又文化ノ發
達ト人口ノ増加ニ伴ヒ富ノ生産消費ノ大ナルニ從ヒ其收入ノ増加ヲ見ルモノ
ナリ然レトモ移轉稅ト同一ノ缺點ヲ有シ又其稅率ノ増加ハ消費ノ減少ヲ來ス
カ爲メニ收入ノ減少ヲ生スルコト少シト爲サス

註一、所得稅ヲ以テ財政ノ緩急ニ對スル調和ノ方策トナシ最モ成效ヲ見タルハ英國
ニシテ千七百九十八年ヒツトハ英佛戰爭ノ爲メ新財源ヲ求ムルノ必要ニ迫リ戰時稅
トシテ雜種稅及ヒ特別所得稅(勞働及ヒ俸給稅)ニ代ハリ一般ニ財產及ヒ勞力ノ收入ニ
對シ所得稅ヲ起シ平和ノ後之ヲ廢セシモ千八百三年戰爭ノ再發ト共ニ千八百六年一
割ノ稅率ヲ以テ再興シ當時千六百萬磅ノ收入ヲ得タリ千八百十五年奈翁戰爭ノ終了
ト共ニ再ヒ之ヲ廢シ爾後政府ノ開稅政策ノ失敗ハ千八百四十二年ロバート・ピールノ
入閣トナリ所得稅ヲ三々ヒ復興シテ穀物初メ各種ノ關稅及ヒ幾多ノ國內消費稅ヲ廢
シテ財政ヲ整理シ千八百七十六年ニ至ル迄約七億千萬元ノ租稅收入額ヲ廢シ一方ニ
ハ租稅收入ノ不足ヲ補填スルノミナラス戰時ニ於ケル非常ノ財源トナリ千八百五十
三年ヨリ五十六年ニ至ルクニミナラズ戰費ノ如キ其大部ハ所得稅ノ増徴ニ依リテ支辨
セラレタリ

第二款 租稅行政ニ關スル原則

租稅行政ニ關スル原則ハワグネル等カ財政經濟及ヒ公正ノ三原則ト相並ヒ行政
上ノ原則トシテ認ムル所ノモノナリ此原則ハ公正ノ原則ト最モ密接ナル關係ヲ
有スルモノニシテ又再分シテ租稅ノ賦課ニ關スル原則ト租稅ノ徵收ニ關スル原
則ト二ト爲ス

第一項 租税ノ賦課ニ關スル原則

租税ヲ人民ニ賦課スルニ方テハ先ツ法規ヲ以テ之カ規定ヲ爲スヘキコトヲ要ス
 租税ノ賦課トハ納税者課税物件租税ノ單位及ヒ税率ニ關スル法規ヲ實際ノ場合
 ニ適用スル行政行爲ナリ古代社會經濟ノ尙ホ幼稚ナリシ時ニ在リテハ課税物件
 及ヒ租税單位ノ如キ皆自ラ單純ニシテ租税ノ賦課ハ行政上著シキ困難ヲ見サリ
 シカトモ貨財ノ種類及ヒ分量カ文化ノ發達ト共ニ益々複雑ヲ極メ之ニ對シテ各個
 人ノ納税力ニ應シ公平ナル賦課ヲ爲スコトハ今日ニ於テハ頗ル困難ヲ感スルニ
 至レリ從ヒテ何レノ國ニ於テモ課税物件ノ調査其他租税ノ賦課ニ關スル行政ハ
 獨リ政府ノ官吏ニ委テスシテ他ニ種種ノ補助ノ方法及ヒ機關ヲ設クルニ至レリ
 今租税中首要ナル所得税ニ就テ見レハ

第一ハ納税者自身ノ申告是ナリ(明治三十二年法律第十四號)申告トハ納税者ノ所得
 財產又ハ收入ノ多寡其他總テ納税義務ヲ決定スルニ必要ナル事實ヲ納税者自ラ
 官廳ニ届出ツルヲ謂ヒ所得税收入税等ノ構成ニ於テ頗ル重要ナルモノナリ而シ

テ納税者ヲシテ眞正ノ申告ヲ爲サシムルカ爲メ或ハ申告者ヲシテ誓詞ヲ爲サシ
 ムル處アリ或ハ公衆ニ其申告ヲ表示シテ申告者ノ不當ナル申告ノ豫防ト一般公
 衆ノ批評トヲ期スル處アリ又我國ノ如ク公衆ニ對シテ之カ嚴正ヲ保ツカ爲メ申
 告ノ秘密ヲ保障スルコトアリ(所得税法 四三條)但其何レノ方法ヲ採ルニ拘ハラズ單ニ納
 税者ニ申告ノ義務ヲ負ハシムルモ他ニ何等ノ規定ヲ設ケサルトキハ其實行ヲ爲
 シ難ク又德義上ノ制裁モ比較的薄弱ナルモノナルヲ以テ法律上相當ノ取締方法
 及ヒ制裁ヲ設ケテ實際ノ狀態ニ符合セシメ殊ニ申告者カ申告スヘキ事項ヲ隱蔽
 シ之カ遁脱ヲ圖ルカ如キ場合ニハ嚴重ナル財産上ノ制裁ヲ與フルコトヲ要ス(所
 得税法 第四
 十六條)第二ノ方法ハ地方團體ノ官吏公吏又ハ公證人ノ如キ特種ノ人ヲシテ租
 税ノ賦課ニ對シテ補助ヲ爲サシムルコト是ナリ(同 第十六條 第十
 七條 第二十條)第三ノ方法ハ租
 税ノ賦課ニ對シテ特別ノ調査委員審査委員等ヲ設ケ之ヲシテ國家又ハ地方團體ノ
 吏員ヲ補助シ課税物件ノ調査ニ與カラシムルコト是ナリ(同 第九條 乃至 第十三條 第三
 十七條)第四
 ノ方法ハ一般ノ私人ヲシテ報告ノ任ニ當ラシムルコト是ナリ斯ノ如ク國家カ種
 種ノ方法機關ヲ設ケテ精密ニ課税物件ヲ調査シ人民ノ納税ノ有無數額ヲ確定ス

ルモ其間ニ錯誤又ハ不當ナル決定ナキヲ保セス一方ニ於テハ納税義務ヲ免レン
カ爲メ不正ノ行爲ヲ行フ者ニ對シ之カ制裁ヲ加フルト共ニ一方ニ於テハ納税義
務者ニ對シ其賦額ニ付キテ異議アルトキハ之カ救済ノ手段トシテ審査ノ請求權
訴訟訴訟提起ノ權ヲ與フルヲ例トス(同第三十六條 第三十九條)

第二項 租税ノ徵收ニ關スル原則

租税行政ニ於テ租税ノ賦課ニ次テ爲スヘキモノハ租税ノ徵收ナリ租税ノ徵收ハ
國庫並ニ納税者ニ對シテ不便不利ナキコトヲ要ス即チ其徵收方法ハ正確ニシテ
收税上ノ誤謬怠慢等ノ豫防及ヒ救済ヲ圖リ徵收方法ヲ簡易ニシテ徵收費ノ減少
ヲ期シ併セテ納税者ノ利便ヲ害セサランコトヲ要ス故ニ徵收ノ時期場所其他ノ
手續ハ皆ニ經費ノ上ニ於テ密接ナル關係ヲ有スルノミナラス納税者ニ及ホス利
害關係モ亦甚タ大ナルヲ以テ之カ施行ニ付テハ最モ慎重マシムルハアルヘカラス從
テ租税ノ徵收ニ付テハ其徵收機關ノ制度ハ重要ナル問題ニ屬セリ
租税ノ徵收方法ハ大別シテ間接徵收法及ヒ直接徵收法ノ二種ト爲シ間接徵收法

ハ更ニ再分シテ請負法及ヒ配付法ノ二種ト爲スコトヲ得ヘシ
(一) 間接徵收法

(イ) 請負法 請負法ハ中世封建時代ニ於テ歐洲ノ列國殊ニ佛蘭西ニ屢行ハレ
タル方法ニシテ今日ニ於テモ支那朝鮮等ニ於テ二三ノ實例ヲ存セサルニア
ラス此方法ハ國家カ殆ト徵收費ヲ要セスシテ一定ノ時期ニ於テ一定ノ確定
收入ヲ得ルノ利益アリ且請負人ハ政府ノ吏員カ收税スル場合ト異ナリテ自
己直接ノ利害關係ニ依リ經費ヲ節約スルコト著シキヲ以テ請負料ヲ支拂フ
モ結局國庫ニ收納スヘキ純收入ノ額ハ直接管理法ノ場合ニ比シテ大ナルヘ
キコトヲ得ヘシ然レトモ租税ナルモノハ國家ノ經費ヲ支辨スルカ爲メニ一
般人民ヨリ徵收スルノミナラス近時社會政策ノ發達ニ伴ヒ之カ賦課徵收使
用支出ニ對シテ私法上ノ觀念ヲ挾ムヘカラサルモノナルカ故ニ國家ト納税
者トノ間ニ立チテ租税ノ徵收ヲ以テ營業ト爲ス所ノ一種ノ請負人ヲ介在セ
シムルコトハ事理ニ於テ妥當ヲ缺クノミナラス政治上弊害ヲ生スルコト最
モ多シ之ヲ史乘ニ徵スルモ請負者ハ收歛ニ勉メ私利ヲ圖ルニ專ラニシテ頗

ル人民ヲ苦メ之カ爲メニ人民ト請負者トノ間ニ於テ確執ヲ生シ延テ國家ノ治安ヲ害セシ例ハ一ニシテ足ラス從ヒテ方今請負法ハ單ニ稀少ナル例外ノ場合ニノミ採用セラルルニ過キス彼ノ清韓等ニ於ケル關稅其他ノ租稅收入ハ配付稅ノ形式ノ下ニ請負ノ實ヲ行フモノ多ク其ニ財政紊亂ノ主要ナル原因ヲ造レリ

- (ロ) 配付法 配付法ニ依レハ國家ハ先ツ一定ノ下級團體ヲシテ指定ノ租稅ヲ納メシメ其指定ノ租額カ更ニ下級團體ニ於テ如何ニ之ヲ賦課スルヤニ付テハ全ク之ヲ問ハサルモノナリ此方法ハ財務行政ノ未タ發達セス中央集權ノ實舉ラサル時代ニ於テハ租稅徵收上便宜ノ方法ニシテ古來封建時代ニ於テハ君主ト諸侯諸侯ト都市等ノ間ニ於テ屢行ハレタル方法ナリト雖モ今日ニ於テハ殆ト其跡ヲ絶チ唯清韓其他ノ國ニ於テ多少ノ形跡ヲ存スルニ過キス
- (二) 直接徵收法 現時各國ニ於テ行ハルル租稅徵收ノ方法ハ國家カ其任命スル官吏ニ依リテ直接ニ徵收スルモノナリ此方法ヲ取ルニ當テハ官吏殊ニ下級官吏ヲシテ租稅ノ徵收ニ務メシムルノ方便トシテ徵收額ノ多寡ニ應シテ幾分ノ

報酬ヲ其俸給ニ加フルコトアリ是レ蓋シ絕對ニ可トスヘカラサルモ場合ニ依リテ多少ノ實效ヲ奏スルコトナシト爲サス而シテ此方法ヲ採ル場合ニ於テハ其徵收ノ手續ニ付テ便宜上之ヲ下級團體ニ委任スルコトアリ其何レノ場合ニ通スルモ一方ニ於テハ收稅官吏ノ採用及ヒ監督ニ付キ充分ナル取締ヲ要スルノミナラス一方ニ於テハ特種ノ法規ニ依リ之カ徵收ノ實ヲ舉ケシメコトヲ要ス故ニ我國ニ於テモ明治三十年三月法律第二十一號國稅徵收法ヲ公布シ同法第三章ハ滯納處分ニ關スル事項ヲ規定シ間稅以外ノ國稅ノ滯納ニ係ル者ニ對シ滯納者ノ所有財產ニ付テ差押賣却ノ特權ヲ保有シ以テ之カ收入ノ正確ヲ期セリ

第二節 公正ノ原則

公正ナル語ハ或ハ正義、道義、倫理、條理等ノ文字ヲ以テ表示セラレ其用語一ナラサルノミナラス其意義ニ至リテモ亦時ト處トニ依リ相異ナル所アリ是レ道德ノ觀念、善惡ノ標準其モノカ相對的ニ變化スルニ伴フ自然ノ數ナリトス故ニ希臘羅馬

ノ時代ニ在リテハ奴隸及ヒ從屬國ノ人民カ課税セラレ市民カ免税ノ特權ヲ有シ
封建制度時代ニ在リテハ貴族僧侶家族等カ租税ヲ負擔セシテ農商工業者カ重
キ負擔ヲ受ケシハ所謂其當時ニ於ケル公正ノ觀念ヲ代表セルモノナリ從テ茲ニ
公正ノ原則ト稱スルハ今日ノ文明諸國ニ於ケル公正ノ原則ニシテ國民ハ國家又
ハ公共團體ニ對シテ納税ノ義務ヲ有シ無償ノ給付ヲ爲スヘキト共ニ此等ノ負擔
カ國民ノ間ニ一般ニ且平等ニ分配セラレヘキコトヲ謂フニ外ナラズ

第一款 一般ノ原則

租税ノ負擔カ一般ナルハシトノ原則ハ第一期ニ於テハ專ラ主觀的ニ租税ノ主體
ニ付テ行ハレ第二期ニ於テハ專ラ客觀的ニ租税ノ主體ニ付テ行ハレタリ第一期ニ在リ
テハ佛國革命以來貴族僧侶其他ノ階級又ハ特定人ニシテ最も多ク負擔スヘキ者
ニ對スル免税輕税其他ノ特權ハ漸次之ヲ廢止シテ租税負擔ノ義務ヲ總テノ階級
及ヒ人ニ對シテ普及セラレ租税ノ主體ニ對シ一般ノ原則カ行ハルルト共ニ第二
期ニ至リテハ總テ課税シ得ヘキ財源ニ付テハ其種類其他ノ事故ノ如何ニ拘ハラ

ス總テ租税ヲ賦課スルコトナレリ換言スレハ租税ノ賦課ハ主體ノ普及ヨリ一
轉シテ税源ノ普及即チ負税ノ能力ニ對スル普及ヲ原則ト爲スニ至レリ是ニ於テ
或一部ノ人民又ハ或種類ノ事實ニ對シテ特ニ免税又ハ減税ヲ行フニ至レリ即チ
限定生計費ニ對スル所得税ノ免除天災其他ノ事變ニ因ル損害ニ原由セル地租ノ
免税減税ノ處分ノ如キ各國ノ立法例ニ於テ遍チ認ララル所ナリ蓋シ所得税
ニ於テ限定生計費ニ對シ免税スルハ固ヨリ社會政策ノ旨趣ニ合致スルモ社會政
策ノ結果トシテ生シタルモノニアラスシテ税源ノ普及ニ對シ限定生計費ハ税源
ト認ムヘカラサルニ依ルニ外ナラス殊ニ所得カ限定ノ生計費ヲ降ル下級ノ人民
モ固ヨリ直接税ニ付テハ一般ニ之カ負擔ヲ爲サス又其負擔ヲ爲スモ其額ハ僅少
ニ止マルヘキモ間接税ニ於テハ其所得ニ比例シテ受クル所ノ負擔ハ決シテ輕カ
ラサルハ生計費ノ增加率ハ所得ノ増減率ニ伴ハサルニ依ル自然ノ理ナリトス又
地租ヲ負擔スル土地カ荒地トナルニ由テ免租若クハ減税ヲ爲スカ如キハ荒地ト
ナリシ爲メ税源タルノ條件ヲ失ヒ又ハ輕クセルニ原由セルモノナリ(所得税法、地
方租税特別處分法、水害)

租税一般ノ原則ニ就テハ猶ホ人ニ對スル一般ヲ意味シ税源ニ對スル一般ヲ意味スルモノニ非スト解釋スルモノアリ固ヨリ租税ノ一般ノ原則ハ主トシテ中世紀ニ於ケル貴族、僧侶等最モ納税力ニ富メル者カ免稅輕稅ノ特權ヲ保有セルニ對シテ生セルモノニシテ人ニ對スル一般ヲ意味シタルモノナルモ若シ貴族、僧侶ノ徒カ租税ヲ負擔スルトモ單ニ形式ノ上ニ於テ少額ノ賦課ニ止マルトキハ事實何等ノ相違ヲ見ルコト無カルヘク又納税力弱キ者又ハ全ク無キ者ニ對シテ非常ナル苦痛ヲ與ヘ又ハ不能ヲ強ユルコトハ租税賦課ノ主旨ニアラサルヘキコト論無キナリ故ニ人ニ對スル一般ノ原則ト稱スルハ寧ろ事實ニ遠キ議論ニシテ税源ニ對スル一般ノ原則ノ理論實際ニ適切ナルニ如カス税源ニ對スル一般ノ原則ハ一方ニハ納税力ニ富メル階級ヲ漏ラスコト無キト同時ニ一方ニハ税源ヲ有セサル者不能納付ノ者ヲ當然賦課ノ域外ニ除斥スレハナリ

然レトモ税源ノ一般ハ理論上之ヲ一貫スルノ可ナルヲ見サルノミナラス又事實之カ成功ヲ期シ得ヘキモノニアラス社會ノ凡テノ階級ニ通シ以テ税源ト認ムルニ足ルヘキモノ千萬ニシテ足ラス然レトモ財政ノ要ハ所求ノ額ヲ充ステ以テ足

レリト爲スノミナラス強テ凡テノ税源ヲ網羅セシカ爲メ巨額ノ徵收費ヲ支出スルハ頗ル忌ムヘキモノタリ況ンヤ公平周密ナル賦課ヲ完ウスルコト能ハサルニ於テハ徒ラニ收支相償フニ足ラサル不生産的支出ヲ爲シテ社會ニ不正不平等ナル苦痛ヲ與ヘントスルモノナリ故ニ各國ノ租税制度ハ土地、家屋、營業、財產所得等重ナル税源ニシテ其純收入額大ニシテ且之カ公平ナル賦課徵收ニ容易ナルモノヲ選擇シ猶ホ國稅地方ノ別ニ伴ヒ各國財政ノ沿革ト社會ノ狀態ニ鑑ミ少數ノ直接稅ヲ賦課シ其他ニ至リテハ間接稅ヲ以テ間接ニ税源ノ普及ヲ所期セリト解スヘキナリ

其税源ニ對スル平等問題租税ノ制度及ヒ分配特ニ重複課税及ヒ免稅ニ就テハ各其節自ニ就テ參照スヘン

第二款 平等ノ原則

經濟ノ現象ニ於テ平等ト稱スルハ其與フル貨財ト受クル貨財トカ同一ノ價格ヲ有スルヲ謂フ故ニ所謂利益交換說又ハ公安保險料說ノ行ハレシ時代ニ在リテハ

人民カ提供スル收納物ハ國家又ハ公共團體ヨリ受クル利益ニ伴フテ以テ平等ナ
リト認メラレタリ固ヨリ相互提供ノ原則ハ條理ノ根底ヲ爲スモノナレトモ租稅
其モノハ根本ニ於テ國家カ自己ノ生存發達ヲ爲スカ爲メ其組成分子タル國民ヨ
リ徵收スル無償ノ納付タル以上ハ其納稅力ニ應シテ租稅ノ賦課ヲ爲スコトハ社
會全般ニ對シテ平等ナリト謂ハスンハ非ス

租稅ノ負擔ノ平等ニ付キ經濟學上始メテ研究ヲ爲シタル者ハ「アダム・スミス」ニシ
テ唯氏ハ租稅ノ負擔力ヲ以テ直チニ各人ノ所得財產ニ對シテ正比例スルモノナ
リト誤解セルコトハ先ニ一言セル所ナリ租稅ノ負擔力ハ財產ト所得ニ依リテ其
類ヲ異ニスルノミナラス同一ノ財產又ハ所得ハ必スシモ同一ノ負擔力ヲ有スル
モノニアラス是レ財產又ハ所得ニ應スル支出ハ各種ノ原因ニ由リテ必スシモ相
同シカラサレハナリ租稅ノ負擔力ニ對スル平等ヲ保タンカ爲メ從來租稅行政上
用ヒ來リタル手段ニアリ一ハ租稅ノ種類及ヒ賦課ニ關スル行政上ノ選擇ニシテ
一ハ稅率ニ對スル選擇ナリ前者ハ租稅制度及ヒ前欸ニ於テ述ヘタル所ニシテ一
方ニハ稅源ノ普及ヲ圖リテ一般平等ノ主旨ヲ達スルコトヲ目的トシ一方ニハ收

入額ト徵收費ノ比率賦課徵收ノ公平正確難易ノ程度ヲ照應シ之カ選擇ヲ爲サス
ンアラス後者ハ同一ノ稅源ニ對シテ平等ナル賦課ヲ爲スニハ其課稅物件ノ數額階
級ニ應シ如何ナル方法ヲ以テ稅率ヲ定ムヘキヤニ在リ固ヨリ稅源ノ種類ニ應シ
課稅物件ノ數額階級ノ選擇ヨリ又之ニ對スル稅率ノ標準ヲ異ニスルモ主トシテ
比例稅及ヒ累進稅ノ得失及ヒ累進稅ノ累進方法ニ關スル問題ニ歸着スルモノナ
リ (比例稅及累進稅ノ通稅論參照)

第三節 經濟上ノ原則

經濟上ノ原則トハ租稅ノ賦課徵收ニ依リテ經濟上ノ損害擾亂ヲ來サシメサルコ
トヲ謂フ故ニ經濟上ノ原則ハ一ハ賦課徵收ノ方便ニ存シ一ハ課稅ノ種類及ヒ其
稅額ニ存ス

第一款 賦課徵收ノ手續ニ關スル經濟上ノ原則

租税ノ賦課徵收ハ精確ニシテ且簡易ナルコトヲ要スルハ曩ニ財務行政上ノ原則ノ下ニ於テ一言セル所ナリ蓋シ現時租税制度益々複雑ヲ極ムルニ至リテハ賦課徵收ノ方法モ亦勢ヒ益々繁雜ヲ來シ從テ賦課徵收ノ時期場所度數其他ノ手續ニ於テ精確簡易ヲ缺キ納税者ノ不便不利ヲ顧ミサルトキハ當ニ納税者ノ收入ヲ減少スルノミナラス國民ノ經濟上一般ノ生産ニ及ハス弊害又少ナシト爲サス故ニ租税立法ハ變動スヘカラスト曰ヘル原則又ハ舊税ハ最良税ナリト稱スル古語ハ亦多少ノ眞理ヲ包含セルモノアリ蓋シ習慣ハ社會ノ現象ヲ通シテ最モ重大ナル勢力ヲ有スルモノニシテ其行ハルルコト久シクレハ一般ノ人心ニ逆ハサルノミナラス縱令其租税ノ種類及ヒ稅額カ租税負擔ノ輕重ヲ失シ平等ヲ缺クモノタルモ或程度迄ハ租税負擔ノ轉嫁ニ依リ經濟社會ノ關係ハ總テ其間ニ衡平ヲ維持スルモノナレハナリ故ニ租税ノ法規ニシテ屢々變更シ又其法規執行ノ方法ニシテ確實簡

易ヲ缺クトキハ納税者ノ經濟上受クル損害甚ニ少ナシト爲ササルナリ

第二款 租税ノ種類及ヒ稅額ニ關スル經濟上ノ原則

租税ハ貨財ノ生産、交易、分配消費ニ對シテ重大ノ關係ヲ有スルカ故ニ貨財其モノニシテ之カ生産ノ發達ヲ望ムヘカラサル奢侈品ノ如キハ比較的重稅ヲ課シ生計ノ必需品ニ對シテハ成ルヘク之カ負擔ヲ輕減シテ其生産ノ發達ヲ圖ルハ通常各國ノ稅法ニ通シテ見ル所ナリ殊ニ國際貿易ニ關シテハ其輸出入品ニ對スル課税ノ有無稅率ノ高低ハ直チニ其貨財生産ノ死命ヲ制スルモノナルヲ以テ各國ニ於テ各種ノ貨財ニ輸出税ノ免稅ヲ爲シ時ニ戻リ稅ノ法ヲ取ルコトアルハ前ニ一言セル所ナリ又租税負擔ノ轉嫁ニ關シ立法者ハ一般人民ノ財產所得ニ依リ之カ納稅力ヲ審査シ或ハ之カ轉嫁ヲ豫期シ或ハ其轉嫁セサルコトヲ豫期セサルモノナルカ故ニ苟クモ立法者ノ所見ニシテ妥當ナル以上ハ常ニ豫期ノ目的ヲ達スルコトヲ務メサルヘカラスト何トナレハ負擔ノ轉嫁ヲ豫期セサル地租、家屋稅等ニ於テ

其負擔カ小作人、借家人ニ移轉シ負擔ノ轉嫁ヲ豫期スル酒造税、煙草税ニ於テ其負擔カ酒造家、煙草製造家ノ下ニ停マルトキハ即チ平等ノ原則ニ反スルモノニシテ經濟上平均ヲ失スヘキコト明カナレハナリ

經濟上ノ原則トシテ最も重要ナルモノハ税源ノ問題即チ納税力ノ問題ニシテ租税ハ所得ヨリ徵收シ財産ニ及フヘカラスト云フニ在リ勿論税源ト爲ルヘキモノハ財産ナリ即チ租税ナルモノハ私人ノ所有權ニ屬スル貨財中ヨリ出ツルコト言フ俟タス然レトモ等シク財産ト稱スルモノニシテ常ニ所有者カ自己ノ手ニ於テ利用シ收入ノ基本ト爲スヘキ基本財産ト稱スヘキモノト一定ノ時間ニ繰返シテ吾人ノ財産トナル收入財産即チ所得ト稱スヘキモノト別アリ前者ハ之カ消費ニ依リテ其所得ノ率ヲ減シ延テ經濟上ノ地位ヲ損害スヘク後者ハ之ヲ消費スルモ尚ホ同一ノ所得ヲ獲得シテ其經濟上ノ地位ヲ變スルコトナシ從テ茲ニ經濟上ノ原則トシテ論究スル所ハ租税ハ總所得ヨリ生産費ヲ扣除シタル純所得ニ止マラ決シテ基本財産ヲ侵スヘカラスト云フニアリリカカ租税ナルモノハ畢竟其國ノ資本若クハ收入ヨリ支拂ハル然レトモ資本ニ課セラルル租税ハ將來ノ

生産ヲ抑壓スヘキ傾向アルヲ以テ租税ハ資本ヨリ寧ロ收入ニ課スヘキモノナリト曰ヘルハ又大體ニ於テ同一ノ旨趣ヲ表示セルモノナリ故ニ課税物件ノ所得タルト財産タルトハ毫モ問フ所ニアラス要ハ租税カ個人ノ財産ヲ侵シ税源ヲ枯渴スヘカラスト云フニ在リ

租税ハ如何ナル程度ニ於テ果シテ財産ヲ侵スニ至ルヘキカヲ研究スルニハ先ツ所得其モノニ付テ研究スル所ナクンハ非ス所得ハ其所得ヲ得ル爲メニ要スル生産費ト其生産ニ依リテ得タル収益トヲ包含シ其生産ニ依リテ得タル収益ハ狹義ノ所得又ハ純所得ト稱セラル而シテ私人ハ其純所得ノ一部ヲ生計費ニ支出シ其殘餘ハ或ハ之ヲ浪費シ或ハ之ヲ貯蓄ス所謂自由所得ト稱セラルルモノ是ナリ故ニ個人經濟ニ於テハ通常其所得ヨリ生産費ト生計費ヲ支出シ其殘餘額ヨリ租税ヲ納付シ尚ホ其殘餘ノ額ニ付テ或ハ資本トシテ貯蓄シ或ハ浪費スルヲ原則トス故ニ純所得ナルモノハ負擔力ヲ測定スル好個ノ標準ナリト雖モ必スシモ負擔力ハ純所得ニ正比例スルモノニ非ス今其理由ノ重ナルモノヲ擧クレハ次ノ如シ

第一、純所得中ヨリ支出セラルル生計費ハ其家族ノ數、所得者ノ年齢、健康、負債ノ

有無其他時ト處トニ依リ種々ノ原因ニ由リ純所得ニ對シテ常ニ比率ヲ異ニスルモノナリ

第二、純所得ノ分量ハ同一ナリト雖モ其所得者ハ經濟上ノ地位及ヒ關係ハ納税力ト純所得ヲ相伴ハシムルコト能ハス例ヘハ老衰者兒童婦女等ノ得ル所ノ純所得ヘ一般ニ其額少ナキカ故ニ其生計費ニ對スル純所得ノ比率比較的大ナルト自由所得ノ比較的些少ナルトニ依リ其負擔力ハ比較的ニ少ナキモノナリトス何トナレハ生計費ハ一定ノ限度ヲ有シ其屈伸力甚タ少ナキモノナレハナリ又巨大ノ資力ヲ有スル者ノ邸宅莊園ノ如キハ縱令直接ニ收益ヲ生スルコトナキモ其納税力ハ頗ル大ニシテ之ニ對シテ税率ヲ多クスルモ條理ニ反スルコトナシ此場合ハ純所得力唯一ノ税源ナリトスル學說ニ對シ獨逸ニ於テ近時之カ反對說ノ好材料トシテ認メラルモノナリ近時獨逸派ハ租税ハ公民ノ上ニ賦課セラレ公民カ國家ニ對スル義務トシテ支拂ハルヘキモノニシテ所謂純所得ト稱セラルル抽象シタル貨財ニ依リ支拂ハルヘキモノニアラストシ彼ノヨシヘルマンノ使用資本說(Nutzkapital theorie)ノ如キモ生産ヨリ生スル經濟上ノ収

入ニ加フルニ尙ホ享樂上ノ收入ナルモノアルコトヲ主張セリ即チグスタフ・コーンカ家屋所有者カ其住宅ヨリ享受スルノ所ノモノ邸園ノ所有者カ其邸園ヨリ享受スル所ノモノ又ハ其他ノ人人カ自己ノ獵場若クハ自己ノ繪畫室ヨリ享受スル所ノモノハ皆是レ所得ナリ此等ノ物ヲ特ニ財產ノ享樂ヨリ受クル所ノ一種ノ所得ナリト曰ヘルモ亦同一ノ意味ヲ現ハスモノニシテ此第二ノ場合ヲ指セルモノナリ

第三、所得ハ性質ノ如何ハ又同額ノ所得ニ對シテ之カ負擔力ヲ異ニスルモノナリ即チ所得ノ性質ニシテ臨時ノ所得ニ係ルモノ又ハ危險多キモノ或ハ其他ノ理由ニ依リ多少ノ保護ヲ與フヘキモノ例ヘハ生命保險ノ掛金軍人從軍中ノ俸給扶助料傷痍疾病者ノ恩給旅費學資金法定扶養料等ノ類ハ性質上負擔力ノ少ナキモノナリ(所得税法第五條參照)

以上述フルカ如ク純所得ハ必スシモ納税力ヲ表彰スルモノニアラス然レトモ何レノ所得ニ通スルモ租税ハ強制的ノ分配トシテ所得ニ於テ第一位ノ先取權ヲ有シ生産費及ヒ生計費之ニ次キ其殘餘ニ依リテ始メテ貯蓄又ハ浪費ヲ爲スニ於テ

ハ、ナリ故ニ租税ハ重キニ從テ先ツ浪費ヲ侵シ次ニ貯蓄ヲ侵スヘキヲ例ト爲ス
 モノナリ但此場合ニ於テ資本ナルモノハ元本ノ收入ヨリ出ツルモノナルヲ以テ
 實際經濟上資本ト非資本トノ限界ハ管ニ學說ニ於テ一致セサルノミナラス實際
 ニ於テモ頗ル不確定ナルモノニシテ之カ區別ヲ識認シ難キノミナラス資本ト収
 入トノ區別ハ國家ノ上ヨリ觀察スルト一個人ノ上ヨリ觀察スルト亦相異ナルカ
 故ニ租税カ自由所得中ヨリ徵收セラルルニ付テモ自由所得中ノ資本ヨリ徵收ヤ
 ラルルモノト見ルヘキカ租税ハ生産費ト同等ニ見ルヘキ支出ニシテ其殘餘ノ貯
 蓄セラレタルモノヲ始メテ資本ト見ルヘキカニ依リ多少ノ見解ヲ異ニセサルヲ
 得スジヨシ、スチワード、ミルノ如キハ租税ヲ以テ全然所得ノ負擔ニ歸セシメ毫モ
 資本ニ及ホサシメサラントスルハ租税制度ノ實際能クスル所ニアラスト曰ヒ又
 パステールノ如キモ資本ノ迅速ニ増加スル國ニ於テハ一個人ノ資本ヲ蠶食ス
 ル感アル租税例ヘハ相續税ノ如キハ比較的困難ヲ受クヘキモノニアラスト曰ヒ
 リ要スルニ此等ノ解釋ハ其孰レヲ採ルモ資本ト收入ハ互ニ同一ノ物ニ對スル觀
 察ノ異ナルニ從フ名目ノ差ニ過キスシテ一方ニ加フル行爲ハ必ズ他ノ一方ニ影

響ヲ與フヘキモノタルコト旨ヲ俟タス從テ租税カ其貯蓄ハ全部又ハ其最大部分
 ヲ侵スニ至ラハ産業ノ發達ハ又之ヲ豫期スヘカラス蓋シ經濟上所得ノ額ニハ需
 要供給ノ原則ニ從ヒ自ラ一定ノ歩合アリ然ルニ今其歩合ヲ低減シテ個人ハ得ル
 所ノ所得ニ依リ僅カニ生産費ヲ償ヒ自己ノ日常ノ生計ヲ維持スルニ止マリ他ヲ
 舉ケテ納税スルニ至ラハ租税ハ既ニ重キニ失セルモノニシテ貨財生産ノ動念ヲ
 阻壓スルモノナレハトリマ、カ、ロツクハ重税ハ却テ勤勉ノ刺激トナルモノナリト曰
 ヘルモ租税ノ率重クシテ個人ノ貯蓄ヲ侵シ延テ生産費生計費ノ減少ヲ惹起スニ
 至ラハ生産費及ヒ生計費ノ屈伸力ハ固ヨリ僅少ナルモノニシテ自ラ一定ノ限度
 アルカ故ニ勢ヒ其基本財産ヲ減殺シテ租税ノ支辨ニ充テスンハアラス故ニ個人
 カ租税支辨ノ爲メ基本財産ヲ侵スニ至レハ正ニ貯蓄スルノ餘裕ナク最低度ノ生
 計費ヲ以テ甘ヌル時ニシテ國民生産ノ動念ヲ失シ資本ヲ減少シ經濟上最モ忌ム
 ヘキ狀況ニ陥レルモノト謂ハサルヲ得サルナリ果シテ然ラハ租税カ自由分配ノ
 一部ニ止マリ個人ヲシテ貯蓄ノ餘裕ヲ殘サシメンニハ如何ナル程度ヲ以テスヘ
 キカボリユ一氏ハ此問題ニ對シテ次ノ如キ説明ヲ爲セリ

凡ソ人民ノ負擔スル所ノ租税ハ國稅府縣稅市町村稅ヲ合シテ所得ノ百分ノ五ヲ超過スヘカラス戰時其他ノ事業ニ際シ國家ノ財政上稅率増加ノ必要ヲ見ルニ至ルモ尙ホ所得ノ一割乃至一割二分ヲ限度ト爲スヘシ此限度ヲ超ユルニ至リテハ經濟界ノ紊亂ヲ免カサルコト能ハス伊太利ノ如キハ正ニ其程度ニ達セラル實例ナリ

ト固ヨリ所得ニ對スル租税ノ比率ハ時ト處トニ依リ經濟上進歩ノ程度物價貨幣ノ高下資本ノ多寡相異ナルヘキヲ以テ必スシモ數字ヲ以テ精確ナル標準ヲ立ツヘキモノニアラサルノミナラス國民ノ所得ノ算定ハ又頗ル不確定ナルモノナルヲ以テ結局其國ノ資本ノ増加生産力ノ發達ニ依リ個々ノ事實問題ニ就テ之ヲ決定スヘキモノニシテ要ハ租税ノ負擔重キニ失シテ國民ノ財產ヲ侵シ產業ノ發達ヲ阻害スルコトナカラシムルニ存ス(富及所得ニ關スル統計表参照ス)

第三章 租税ノ分類

緒論

租税ハ其標準ヲ異ニスルニ從ヒ各種ノ分類ヲ爲スコトヲ得ヘシ學者或ハ大體ニ於テ經濟學的ノ分類法即チ理論的分類法ト實際的分類法即チ財政的分類法トニ分ツコトアリ前者ハ主トシテ經濟學上富ノ分配要素ヲ以テ收入ノ源泉ト認メ租税ハ此等ノ要素ニ賦課スヘキモノト爲スモノナリアダム、スミスカ租税論ノ劈頭ニ於テ凡ソ一個人ノ收入ハ地代勞銀及ヒ利潤ヨリ生スルモノニシテ租税ハ此等ノ收入ノ源泉ノ一個若クハ二個以上ヨリ支拂ハルルモノナリ故ニ此分類ニ從テ各種ノ租税ヲ研究スヘシト曰ヘルハ即チ經濟學上ノ理論的分類法ヲ採レルモノニシテ其後ノ英國派ノ學者ハ多ク此分類法ヲ採リ經濟學ニ於テ分配要素ニ對スル學說ノ變スルト共ニ租税ハ利子地代及ヒ利息勞銀及ヒ利潤ヨリ支拂ハルヘキモノト爲スニ至レリ然レトモ此分類方法ハ單純ニシテ且經濟學ノ原則ヲ適用スルノ利益アルモ事實ニ於テ此單純ナル分類ニ依ルコト能ハサルハアダム、スミス自身カ土地ノ生産物ニ對スル課税人頭稅物品稅等ニ付キ講究セルニ依リテ明カナル所ニシテステューアード、ミルノ如キハ經濟上ノ源泉ニ從テ形式的租税ノ分類ハ唯之ヲ所得ニ課スル直接稅ノミニ限リテ適用スヘキモノニシテ物品稅ノ如キ

又契約通信等ニ課スル所ノ租税ノ如キハ全ク此以外ニ置クヘキコトヲ論セリ斯ノ如ク理論的分類法ハ租税ノ分類ニ於テ實益少ナキカ故ニ近時此分類法ハ一般ニ行ハルルコトナク多クハ行政上又ハ財政上ヨリ實際的ノ標準ヲ立テテ之カ分類ヲ爲スニ至レリ今其重モナルモノヲ舉クレハ次ノ如シ

- 第一、 收納ノ實體ニ依ル分類
- 第二、 租税ノ存続期間ニ依ル分類
- 第三、 場所ノ種別ニ依ル分類
- 第四、 賦課ノ方法ニ依ル分類
- 第五、 負擔ノ所在ニ依ル分類
- 第六、 課税物件ノ種類ニ依ル分類

第一節 收納ノ實體ニ依ル分類(實物税、勤勞税及ヒ貨幣税)

收納ノ實體ヲ標準ト爲ストキハ實物税、課役及ヒ貨幣税ノ三種ニ分類スルコトナ

得

第一、實物税 實物税ハ實物經濟時代ニ於テ行ハレタル租税ニシテ我國ノ史乘ニ於テハ崇神帝ノ御宇ニ於ケル弭^ミ調^テ及ヒ手末^テノ調^テヲ以テ租税制度ノ嚆矢ト爲セリ弭^ミ調^テハ男子ヨリ弓矢ヲ以テ射獲シタル獸皮ノ類ヲ納付スルヲ謂ヒ手末^テノ調^テハ女子ノ手工ニ依リテ製作セラレタル布帛ノ類ヲ納付スルヲ謂フ當時ノ歴史ハ固ヨリ詳カナラサルヲ以テ貨幣ノ効用ヲ爲シタルモノアルヤ否ヤ明カナラスト雖モ要スルニ上古ノ時代ニ於テハ獸皮、布帛、米穀等ノ類ハ直接ノ供用ヲ爲スト共ニ又一種ノ貨幣トシテ間接ノ供用ヲ爲シタルモノナルヘキヲ以テ此等ノ租税ハ今日ヨリ見レハ明カニ實物税タルモ其當時ニ在リテハ純然タル實物税ト稱スルコト能ハサルコトハ注意ヲ要スヘキ點ナリトス孝德帝ノ大化以後田租ヲ調ヨリ分離シテ地租、雜税及ヒ夫役ノ別ヲ立テタリ租^ノ庸^ノ調^ノ制^是ナリ當時ノ收納物ハ米穀、布帛、鐵鹽、魚介、海藻ノ類ニシテ其後班田ノ制衰ヘ莊園ノ制益盛ナルニ及ヒテハ調^ハ之^ヲ爲^ササル者アリ或ハ之ヲ抑留スルモノアリ庸ハ兵役ニ變セリ源平以後ハ上古ノ調庸ハ廢セラレテ主トシテ田租ニ加重セラレ小物^成ト稱セ

ラルル山海ノ年貢ハ上古ノ調ノ一部ヲ殘存シ又別ニ課役及ヒ雜役トシテ造營其他ノ事故ニ際シ米穀其他ノ物品ヲ納付セシメ又ハ五節ノ供御ヲ調進セシメタルコトアリ小物成ナルモノハ徳川時代ニ至ルモ尙ホ繼續シテ山年貢山小物成草役川運上海役等各種ノ名稱ヲ有シ商工業ノ生産ニ課スル雜役モ尙ホ小物成ト稱シ或ハ運上冥加分一等各种ノ名稱ヲ存シタリ但此時代ニハ必スシモ實物納付ニ限ララルコトナク漸次貨幣稅ニ變形シタリ現時ニ至リテハ或特種ノ事情ヲ有スル場合ニ於テ例外トシテ認メラルルニ過キス彼ノ夫役ノ場合ニ於ケル實物ノ徵發ノ如キ沖繩縣ニ於ケル砂糖(明治三十二年三月末ヲ以テ廢止)八丈島ノ絹布ノ收納ノ如キ是ナリ

第二、勤勞稅、勤勞稅即チ課役ノ制モ崇神帝ノ御宇始メテ人民ヲ檢校長幼ノ別使役ノ順序ヲ定メラレタリ大寶令ニ至テ課役ノ制始メテ完備シ庸ハ口ニ課スルモノニシテ男子二十一歳ヨリ六十歳ニ至ル壯丁ニハ十日十七歳ヨリ二十歳ニ至ル中男、六十一歳ヨリ六十五歳ニ至ル老丁ニハ五日ノ歳役ヲ課シ若シ現役ニ服セザレハ布帛ヲ代納スルコトトセリ庸ノ制モ源平以後兵役相次テ起ルニ從ヒ漸次其類シ唯課役トシテ内裏、社殿等ノ造營及ヒ城池、道路、橋梁、堤防ノ構築、驛傳ノ運輸等

事故アルニ臨ミテ民人ヲ使役シタリ課役ハ鎌倉時代ニ於テ最モ盛ニ行ハレシモ爾後漸次其度ヲ減シ明治八年ニ至リテ殆ト其跡ヲ絶チ現時ニ於テハ唯地方團體ニ於テ治水其他ノ際ニ於テ夫役トシテ種ニ民人ニ課役スルコトアルニ過キス

第三、貨幣稅、貨幣稅ハ貨幣經濟ノ發達ト共ニ現時普ク行ハルルモノニシテ貨幣稅カ財務行政ノ整理、財政學ノ發達ニ對シ密接ナル關係ヲ有スルコトハ總論財政學史ノ下ニ於テ一言セル所ナリ

第二節 租税ノ存續期間ニ依ル分類(常時稅及ヒ臨時稅)

租税存續ノ期間ヲ標準ト爲ストキハ常時稅及ヒ臨時稅ノ二種ニ分類スルコトヲ得ヘシ

第一、常時稅、常時稅トハ永久ニ存續シ、毎會計年度ニ繰返シテ徵收セラハルモノニシテ財政ノ發達セル今日ニ於テハ租稅ハ常時稅タルヘキヲ原則トス蓋シ現時ノ財政ニ在リテハ年年必ス一定ノ經常支出ヲ要スヘキヲ以テ又之ニ充ツヘキ經

常ノ収入ナクシテハアラス故ニ收入ト支出トノ關係又ハ租税ト租税以外ノ收入トノ關係ニ依リ時ニ其稅步課稅物件ノ種類分量等ニ付キ多少ノ増減變更ヲ試ムルコトナキヲ保セサレトモ臨時ノ支出ニ充ツルカ爲メニ短期ノ存続ヲ豫定スルモノニ非スシテ永久ノ存続ヲ豫期スルモノナリ

第二臨時稅、臨時稅トハ臨時ノ支出ニ充ツルカ爲メニ便宜短期ハ存続ヲ豫期シテ設定セラハルモノナリ古代財政ノ幼稚ナリシ時期ニ在リテハ臨時稅ハ常ニ原則トシテ行ハレタルモノトス當時一方ニハ財政ノ未タ幼稚ナルト共ニ收入支出ニ於テ經常臨時ノ區別存スルコトナク重モニ兵事ヲ以テ國家ノ常務ト爲セルカ故ニ年年歳歳支出ノ數額常ナラサルノミナラス一方ニハ信用經濟未タ發達セサルニ因リ公債紙幣等ノ制度存セサルカ故ニ臨時稅ノ必要又多キヲ加ヘシコト論テキナリ其後契約課稅時代ニ至テハ租稅ハ實質上漸次常時稅ノ性質ヲ具フルニ至リシモ形式上尙ホ臨時稅ノ外觀ヲ有シタリ蓋シ租稅承諾權ノ勢力ヲ退ウシタル時代ニ在リテハ租稅ハ常ニ一年度ヲ原則トシ年年議會ノ協贊ニ依リテ始テ之カ成立ヲ見ルニ至リシモノナルカ故ニ形式上年年租稅ハ一年間ノ存続ヲ條件ト

シテ成立シタリシモ此等ノ租稅ハ年年繼續シテ提出セラレ又繼續シテ之ニ承諾ヲ與ヘタルカ故ニ實質上ニ於テハ漸次常時稅ノ性質ヲ具フルニ至リ其後國民義務時代トナリテハ租稅ハ形式實質共ニ常時稅ノ性質ヲ具有シ臨時ノ支出ハ公債官有財産ノ拂下等臨時收入ニ依リテ支辨セラハルニ至レリ但近時ニ至ルマテ時ニ當初ヨリ臨時ヲ豫期ヲシテ在來ノ稅率ヲ増スコトアリ現時我國ニ於ケル地租ノ増徴ノ如キ其一例ナリ而シテ英國ノ如キハ今世紀ノ始メニ於テ戰時稅トシテ再度所得稅ヲ廢置セルハ前章第一節第一款註ニ述ヘシ所ノ如ク異例ニ屬スルモノナリ

第三節 場所ノ種別ニ依ル分類(國內稅及ヒ

國境稅)

場所ノ種別ヲ標準ト爲ストキハ國內稅及ヒ國境稅ノ二稅ニ分類スルコトヲ得ヘシ

第一國內稅 國內稅トハ內國ニ於テ內地居住者ヨリ徵收スル租稅ニシテ内外國

人ノ別ヲ問ハサルモノナリ。國內税ハ又分レテ國税及ヒ地方税ノ二種ト爲ス。國税、地方税分類ノ標準ハ各國法制ノ異ナルニ從ヒ亦一致スル所アルヘシ然レトモ大體ニ於テハ賦課徵收ハ地域ヲ標準ト爲スト。徵收品ハ使途ヲ標準ト爲スト。ハ二種ニ分ツコトヲ得。前者ニ在リテハ中央政府カ全國一般ニ通シテ徵收スル租税ヲ國税ト云ヒ府縣市町村等ノ公共團體カ其行政區劃内ニ限リテ徵收スル租税ヲ地方税ト云フ。後者ニ在リテハ中央政府カ一般ノ經費ヲ支辨スルカ爲メ徵收スル租税ヲ國税ト曰ヒ府縣市町村等ノ公共團體カ中央政府ヨリ付與セラレタル權限内ノ職務ヲ行フカ爲メ必要ナル經費ヲ支辨スルノ目的ヲ以テ徵收スル租税ヲ地方税ト曰フ。我國ニ於テハ維新當初租税ハ總テ國税ナリシモ明治八年二月從來ノ雜稅中國税トシテ存スルモノノ外ハ悉ク之ヲ廢シ同年九月第四百四十號布告國税、地方税區別ハ租税ノ賦金ヲ國税、地方税ノ二ニ分チ全國一般ニ賦課シ得ヘキ分ニシテ大藏省ニ收入シ國費ニ供スルモノ即チ前二様ノ標準ヲ兼チタルモノニ限リ之ヲ國税トス。賦金ト稱シテ收入スル租税及ヒ地方ニ於テ收入スル雜稅ヲ名ケテ府縣税ト曰ヘリ。明治十一年七月府縣税及ヒ民費ノ名ヲ以テ徵收スル府縣費ヲ名ケテ

地方税ト曰ヒ。明治二十一年ニ至リ又新ニ市町村税ヲ設ケ同二十三年府縣税ノ制ヲ立ツルニ及ヒテ國税、府縣税、市町村税ノ三種トナルニ至レリ。故ニ今日ノ制度ノ下ニ於テハ沖繩縣酒類出港税及ヒ前ノ北海道水産税ノ如キ限地税ハ單ニ徵收地域ヲ標準トスルトキハ一種ノ地方税ナリト雖モ其徵收者ト支辨ノ費途ヲ標準トスルトキハ國税ニ屬スヘキモノニシテ一般ニ後者ノ標準ニ從ヒ國税ト看做セルモノノ如シ。

第二國境税

國境税トハ内外國地域ノ關係アルニ依リ内外國人ヨリ徵收スル租

税ナリ。國境税ハ二國以上カ陸上ニ於テ相隣接セル場合ト海洋ヲ境界トスルトニ依リ後者ノ場合ヲ特ニ關稅ト稱スルコトアリ。故ニ我國ノ如キ島國ニ於テハ國境税ハ同時ニ關稅ト同意義ヲ有スルモノナリトス。

國境税ハ又之ヲ細別シテ輸出入税及ヒ通過税ノ二種トナス。輸出入税トハ内外國間ニ或特定ノ貨財ノ出入ニ依リテ賦課スル租税ニシテ財政上ノ收入ヲ目的トスルコトアリ。商業政策上ノ旨趣ニ出ツルコトアリ。保護貿易ノ盛ニ行ハレタル時代ニ在リテハ粗製品原料品等ニ對シテ輸出税ヲ課スルコト廣ク認めラレシモ漸次

其種類ヲ減シ現時ハ輸出品ハ輸出税ノ免税ヲ以テ原則ト爲スニ至リ時ニ之カ生産獎勵ノ爲メニ戻リ税ノ制ヲ設クルコトアルハ前ニ一言セル所ニシテ又別ニ補助金獎勵金ヲ與フルコトアルハ今日尙ホ目撃スル所ナリ又輸入税モ保護貿易ノ盛ニ行ハレタル時代ニ在リテハ精製品等ニ對シ廣ク且重ク賦課セラレ時ニ絶對ニ輸入ノ禁止ヲ爲セルコトスラアリシモ現時ハ其程度漸次輕キテ加フルニ至レリ然レトモ自國ノ生産獎勵ノ爲メニ政策上多少ノ重税ヲ課スルハ今日尙ホ各國ニ通シテ見ル所ナリ保護貿易政策ヲ加味スルコトナク純然タル財政上ノ收入ヲ目的トシテ輸入税ヲ賦課スル國ハ現時唯英吉利トバルガン半島ノ諸國アルニ過キス但英吉利ハ保護政策ヲ要スヘキ時代既ニ經過セルニ原因シバルガン半島ノ諸國ハ未タ保護政策ヲ要スヘキ時代ニスラ到達セサルニ原因スルモノナルヘシ通過税ハ古來廣ク行ハレタル所ノモノニシテ外國ヨリ自國ノ陸上又ハ領海ヲ通過シテ外國ニ出入スル場合ニ賦課スルモノナリ歐洲大陸ノ如ク海陸ニ於テ列國互ニ相隣接セル所ニ在テハ通過税ハ又重要ナル問題ニ屬シ獨逸聯邦ノ關稅同盟ノ如キハ有名ナルモノナリ然レトモ現時交通ノ便利ヲ圖リ又之カ爲メ却テ國民

經濟ノ發達ヲ妨クルコトヲ避クルカ爲メ此等ノ制ヲ廢シ唯通過ノ貨財ニ對シテ一時關稅ヲ徵收シ通過ノ後之ヲ還付シテ以テ關稅通脫ノ弊害ヲ防遏スルニ過キス我邦モ亦此方法ヲ取り關稅法第三十五條ニ依リ關稅通脫ニ關スル勅令公布セラルシモ地勢上未タ此等事實ノ發生ヲ見タルコトナシ

第四節 賦課ノ方法ニ依ル分類(配賦税及ヒ定率税)

賦課ノ方法ヲ標準ト爲ストキハ配賦税及ヒ定率税ノ二種ニ分類スルコトヲ得ヘシ

第一配賦税 配賦税トハ最初ヨリ徵收セントスル所要ノ數額及ヒ課税物件ヲ一定シ之ヲ被税者ニ分擔セシムル租税ニシテ當初ヨリ被税者ニ其負擔スヘキ税額ヲ配付スルコトアレトモ多クハ先ツ各地方團體ニ配付シ各個ノ被税者ニ對スル負擔ノ分賦ニ關シテハ一ニ其地方團體ニ委任スルヲ常トス此種ノ方法ハ先ツ被税者課税物件ノ精確ナル調査ヲ爲シ得ヘキコトヲ要シ且比較的永久ニ繼續シテ時時ノ變動ヲ爲ササルモノ即チ租税臺帳ニ依リテ賦課徵收シ得ヘキモノニ限ル

ヘキヲ以テ直接税ニ於テノミ之ヲ採用スルコトヲ得ヘシ配賦税ノ行ハルルハ佛蘭西ニシテ佛蘭西ハ直接税ハ配賦法ニ依ルテ原則トシ議會ハ先ツ徵收スヘキ租税ノ總額ヲ定メテ之ヲ最高行政區劃タル各縣ニ其課税物件ノ價格ニ應シテ配賦シ縣ヨリ郡及ヒ市ニ郡ヨリ町村ニ町村ヨリ被税者ニ順次配賦スルノ法ヲ採レリ我國ニ於テハ配賦税ナルモノナシ唯北海道水産税ハ少シク之ニ似タル所アルモ其賦課ノ數額ハ財政上所要ノ數額ニアラスシテ唯過去數年間ノ水産物ノ價額ヲ標準トシテ總額ヲ定メ之ヲ水産物營業人組合ニ配付スルモノナルヲ以テ其形式上少シク配賦税ニ似タル所アリト云フニ過キササルナリ(北海道水産税則第三條) 配賦税ノ利益ナリトスル點ハ要スルニ其所定ノ額ヲ精確ニ徵收スルコトヲ得ルニアリ然レトモ伸縮力ヲ有セサル點ニ於テ人民カ納税額ノ幾何ナルヘキヤヲ知ルコト能ハサル點ニ於テ其配付ノ度數多キト共ニ其團體相互間ニ於テ及ヒ各被税者相互間ニ於テ不公平ノ生シ易キ點ニ於テ弊害少ナカラサルカ故ニ各國皆定率税ヲ以テ原則ト爲セリ

第二定率税 定率税トハ單ニ課税物件ニ對スル税率ヲ一定シテ徵收スル租税ヲ

謂フ故ニ其收入ノ總額ハ會計年度ノ終リニ至ラサレハ之ヲ知了スルコトヲ得サルノ不便アリト雖モ間接税ノ如キハ配賦税ニ依ルコト事實不能ナルノミナラス此方法ハ配賦税ト利害相反スルモノニシテ其税率ノ一定スルニ於テ被税者ハ自己ノ負擔額ヲ知ルコトヲ得又一般ノ平等ヲ期シ易ク平時ニ於ケル經費ノ増加ニ隨伴スルコトヲ得ヘキノ利アリ我國ノ租税ハ總テ定率税ニ依ルモノニシテ我國税法ノ一特色タリ但其定率カ比例率ニ依ルヤ累進率ニ依ルヤハ學說實際ニ於テ最も重要ナル問題ニ屬セリ

第五節 負擔ノ所在ニ依ル分類(直接税及ヒ間接税)

租税負擔ノ所在ヲ標準ト爲ストキハ直接税及ヒ間接税ニ分類スルコトヲ得ヘシ直接税間接税ノ種別ハ行政上政治上重大ナル關係ヲ有スルノミナラス學理上其沿革古クシテ最も議論多キ點ナリトス抑モ此分類カ學說ノ上ニ顯ハレタルハ第十六世紀ニシテジャン・ボーダン(Jean Bodin)ノ「レパブリック」(Republie)ヲ始メトシ重農學派ニ依リテ最も詳細ニ研究ヤラレ爾來直接税及ヒ間接税ノ意義ニ付テ

ハ幾多ノ變遷ヲ經テ現時ハ學理上ノ分類ヲ試ムルモノト實際上ノ分類ヲ試ムルモノト其分類ノ根柢ノ標準ニ於テ説ヲ異ニスル者アルニ至レルノミナラス絶對ニ直接税間接税ノ分類ヲ非難スル者亦相踵テ出ツルニ至レリ
所謂學理上ノ分類トハ租税負擔ノ所在ヲ標準ト爲スモノニシテ時ト處トニ依リ其解釋ノ異ナルニ從ヒ又幾多ノ變遷異同ヲ生セリ今時期ニ依リテ分類スレハ大凡ソ之ヲ四期ニ分ツコトヲ得ヘシ

第一期ニ於テハ重農學派ノ單一税論ハ同時ニ直接税ト相關聯シ地租ヲ以テ唯一ノ直接税トナシ其他ノ租税ハ總テ之ヲ直接税ト看做シタリ蓋シ此學派ハ土地ノミヲ以テ唯一ノ生産物トナシ農業ヲ以テ純收入ヲ生スヘキ真正ノ生産業ナリト認メシテ以テ生産的ノ土地ニ賦課スル地租ハ經濟上新ニ價值ヲ造出シ又ハ増加スル直接ノ財源ニ課スル租税ナリトシ人體若クハ貨物其他商工業ニ賦課スル租税ハ究竟其負擔ハ眞ノ生産ヲ爲スヘキ土地ニ歸着スヘキヲ以テ凡テ皆間接税ナリト曰ヘリ故ニ重農學派ノ單稅論ハ租税ノ負擔ノ轉嫁ハ租税其モノノ本質ニ反スルモノナリト解釋スルコトハデーラーリビエール氏(Da La Riviere)カ租税ノ

體形ハ之ヲ其存セサル處ヨリ徵收スルコトヲ望マスシテ之ヲ其現在スル處ヨリ直接ニ徵收スルニ在リ租税ノ此直接ノ體形ヲ變シテ間接ノ體形ヲ以テセントスルハ自然ノ順序ヲ顛倒スルモノニシテ非常ナル不便ト不利ヲ生スルモノナリト曰ヘルヲ見ルモ明カナル所ナリトス故ニ第一期ニ於ケル分類ハ均シク負擔ノ所在ヲ標準トナシ負税者ト納税者ト相合致セル場合ヲ直接税トシ二者相異ナル場合ヲ間接税トシタルモノニシテ當時重農學派ノ土地ヲ唯一ノ税源ト爲シタル根柢ノ誤認カ地租ヲ以テ唯一ノ直接税トナシ其他ヲ舉ケテ間接税ト爲スニ至レルモノナリ

第二期ニ於テハ獨逸ニ於ケル一部ノ學者ハ財産ノ收得ニ基キテ徵收スルモノヲ直接税トシ財産ノ消費ニ基キテ徵收スルモノヲ間接税ナリト論セリ此説ハ固ヨリ獨逸ノ一部ニ於テ行ハレタルモノニシテ學說上勢力ヲ有スルモノニアラス蓋シ此説ハ均シク消費税ニシテ直接ノ消費税タル住居税僕婢税等ト間接ノ消費税タル酒造税醬油税等トヲ混同セルモノナリ此他カールハインリッヒラウ氏ノ評價税ト消費税ノ區分即チ直接ニ納税力ノ確定セルモノヲ直接税トシ出費ヨリ間接

ニ納税力ヲ測定スルモノヲ間接税ト爲セルカ如キ又ハ所得及ヒ財産ノ直接ノ現象ニ賦課スルモノヲ直接税トナシ其間接ノ現象即チ消費及ヒ財産ノ移轉等ニ賦課スルモノヲ間接税ナリト論セルカ如キ皆同一ノ意義ヲ表示セルモノニシテ現時尙ホウルテンプルク國王ニ於テ犬税ヲ間接税ノ一種トシテ認ムルカ如キハ其實例ノ一ナリトス

第三期ニ於テハ負擔ノ所在ヲ標準ト爲スモ同時ニ租税ノ數額カ負擔者ノ財産所得ニ對シ比率ヲ有スルヤ否ヤヲ以テ分類ノ重モナル標準ト爲セリ乃チ負擔者ノ財産又ハ所得ニ對シ一定ノ比率ヲ有スル租税ヲ以テ間接税トナシ比率ヲ有セサル租税ヲ以テ直接税ト爲セリ
直
ニシテ氏ハ直接税及ヒ間接税ニ付キ次ノ如キ學理上ノ定義ヲ下セリ曰ク直接税トハ立法者カ直接ニ眞ノ負擔者ヲシテ支拂ハシムル租税ニシテ當初ヨリ其資産若クハ收入ニ比例シテ之ヲ賦課シ中間ノ納税者アルコトナク又負擔者ノ財産若クハ收入ニ比例シテ平等ナランコトヲ期スルモノナリ之ニ反シテ間接税トハ立法者カ負擔者ノ誰タルヲ問ハス又負擔者ノ財産若クハ收入ニ對シテ平等ヲ保テ

ルヤ否ヤヲ問ハス間接ニ中間ノ納税者ヲ經由シテ徵收スル租税ナリト此學說ニ對シ其比例ト曰ヘル語辭ニ拘泥シテ直接税中ニハ累進税ヲ採ル者アルヲ理由トシテ此定義ヲ非難スル者アリ然レトモボリユ一氏ノ意見ハ要スルニ立法者カ一負擔者ノ納税力ノ多寡ヲ豫期シテ徵收スルカ又負擔者ノ何人ナリヤ又負擔者ハ各其納税力ニ應シテ納付スルヤ否ヤヲ問ハス間接ニ徵收スルカヲ要點ト爲セルモノナルカ故ニ其納税力ノ多寡ニ應スルカ爲メニハ比例ノ率ヲ以テスルヤ累進ノ率ヲ以テスルヤハ毫モ氏ノ論旨ヲ輕重スルニ足ラス故ニ學理上ノ分類トシテハ氏ノ見解ハ一點ノ非難ヲ容ルヘキモノニ非サルナリ

第四期ニ於テハ直接税トハ其負擔スヘキ者ヨリ直接ニ徵收スル租税ヲ謂ヒ間接税トハ間接ニ中人ヨリ徵收スル租税ヲ謂フワグネルハ租税ノ負擔ノ轉嫁ハ名實相適ハサルコト種ナラサルニ依リ立法者ノ希望ヲ以テ二者ノ區別ノ標準ト爲セリ即チ直接税トハ立法ノ目的上納税者ヲシテ同時ニ負擔者ヲラシムルニ依テ其負擔ヲ他人ニ轉嫁スルコトヲ豫期セス又轉嫁セシメサルモノナリ間接税トハ立法ノ目的上納税者ヲシテ負擔者ヲラシメサルニ依リテ其負擔ヲ納税者以外ノ負

稅者ニ移轉スルコトヲ豫期シ又ハ移轉スルノ方法ヲ立テシモノナリ此定義ノ根本ノ觀念ハ既ニ第一期以來發生セル所ニシテミルノ如キモ既ニ立法者ノ目的ニ依リテ之カ分類ヲ試ミタリ

斯ノ如ク直接税間接税ノ學理上ノ分類ハ立法者カ負擔者ト納稅者ト同一人タルコトヲ豫期スルノ有無ヲ以テスルコト現時一般ノ通説ト爲レルト共ニ又一方ニ於テハ直接税間接税ノ區別ヲ以テ無用ノ分類ナリト非難スル者續出スルニ至レリ直接税間接税ノ分類ニ對スル消極論ハ主トシテ學理上ノ標準ニ對スル非難ニシテ其論點ハ要スルニ次ノ二點ニ歸ス

第一、租稅ハ必スシモ其負擔ノ轉嫁ニ付キ性質一定セルモノニアラス是レ立法者カ負擔ノ轉嫁ヲ目的トスルノ有無ニ依リテ二者ノ區別ノ標準ト爲スヘシト論セルニ依リテ明カナリ既ニ立法者ノ一片ノ希望ニ過キサレ以上ハ其希望ノ失當ナルカ爲メ或ハ其希望正當ナルモ客觀的事情ノ變更ニ依リ其目的ノ全部又ハ一部カ豫期ノ希望ヲ満足スルコト能ハサルヘキハ當然ニシテ立法者カ直接税タラシメントスルモノニシテ其負擔カ却テ納稅者以外ニ轉嫁シ又立法者

ハ間接税ト定メタルモノニシテ其負擔カ納稅者以外ニ轉嫁セサルコトアルハ事實屢見ル所ナリ既ニ同一租稅ニシテ或ハ直接税トナリ或ハ間接税トナルハ地租家屋稅營業稅消費稅等ニ於テ小作人借家人消費者ノ需要ノ狀況如何ニ依リ常ニ變動スル所ニシテ或ハ負擔其モノカ消滅シ或ハ全部ノ移轉ヲ爲シ或ハ一部ノ移轉ヲ爲シ多クノ場合ニ於テハ直接税間接税ヲ通シテ納稅者ト負擔者カ共同負擔ノ結果ヲ呈スルコトアルハ吾人ノ常ニ目撃スル所ナリ殊ニ近時國際貿易ノ發達ニ伴ヒ國際的分業ノ結果トシテ輸入品ニシテ内地ノ生産物ト競争ヲ爲ス場合少ナシト爲サス爲メニ間接税タル一般ノ消費稅ニシテ其負擔カ轉嫁スルコトナクシテ納稅者ノ下ニ止マルハ甚タ多ク而モ此等ノ場合ニ於テハ國際上ノ關係ニ屬スルカ故ニ立法者ノ手段ハ唯一定ノ限度ヲ限リトシテ又之ヲ左右スルコト能ハサルモノナリ殊ニ租稅ト種類ニ依リテハ性質上負擔ノ孰レニ歸スヘキモノナリヤ之ヲ識別シ難キモノアリ例ヘハ取引所稅ノ負擔ハ取引所ニアルカ又ハ取引所ノ顧客ニアルカ又ハ取引所ノ顧客ニアリトスルモ取引所ノ讓渡人買受人孰レニ屬スヘキカ明カナラサルカ如シ

斯ノ如ク直接税間接税ノ區別ヲ負擔ノ所在ニ依リテ決スルハ番ニ租税其モノノ性質ニ依リテ之ヲ定ムルニ難キモノタルノミナラス縱令其負擔ノ所在カ容易ニ決定シ得ヘキモノト雖モ客觀的ニハ一般經濟社會ノ狀態ニヨリ主觀的ニハ税率ノ高低ト負擔ノ輕重トニヨリ豫期ノ目的ヲ達スル能ハサルコト多キハ事實見ル所ナルヲ以テ此分類ハ何レノ方面ヨリ觀察スルモ有名無實ノ識ヲ免カレサルモノニシテ何等ノ實益ヲ與フルコトナク却テ財政上經濟上無用ノ煩雜ヲ増スモノナリ

第二、負擔轉嫁ノ問題ハ、財政上利害關係ヲ有スルコト極メテ薄弱ナリトス負擔ノ轉嫁ハ租税ノ種類ニヨリテ之カ識別ヲ爲スニ困難ナルノミナラス又常ニ立法者ノ希望ニ副フモノニ非ス是レ負擔ノ所在ハ租税其モノニ絕對固有ノ特性ニアラサレハナリ直接税ニシテ絕對不動ノモノトシテ一般ニ認ラルル所得税ノ如キモ資本家特ニ債權者カ負擔スヘキモノニシテ間接ニ之ヲ債務者ニ負擔セシムルハ事實ニ於テ稀ナリトセス蓋シ負擔ノ孰レニ轉嫁スルヤハ毫モ財政上實益ヲ生スルモノニアラス直接税間接税ヲ區別スル實益ハ其負擔ノ轉嫁

ハ有無ニ存セスシテ事ハ此區別ニ伴フ徵税ノ方法ニ在リ反面ヨリ言ヘハ納税者ノ租税納付ノ方法ニ存セリ即チ直接税ハ法規ノ定ムル所ニ從ヒ其負擔者カ一定ノ時期一定ノ場所ニ於テ指定ノ額ヲ納付スルモノナリ間接税ハ中人ニ依リテ一タヒ國庫ニ納付セラレ實際ノ負擔者ハ隨時自己ノ便宜ナリト信スル時ト處トニ於テ任意ノ額ヲ支拂フモノナリ故ニ直接税間接税ノ區別ハ負擔ノ移轉ノ有無中人存在ノ如何ニアラスシテ負擔者ノ納付手續及ヒ數額カ總テ任意ナリヤ否ヤノ點ニ在リ所謂第三期ノ學理上ノ分類トシテボリエー氏カ其租税ノ數額カ納税力ニ對シテ比率ヲ有スルヤ否ヤヲ以テ一標準ト爲セル所以ノモノハ又正ニ此理由ヲ反面ヨリ觀察シタルモノニ外ナラサルナリ

上述スル所ノ分類ハ皆多少ノ眞理ヲ包含スル所ニシテ各國租税制度ニ徵スルモ直接税間接税ノ區別ハ學理上ノ分類ヲ爲セルモノ殆ト之ヲ見ルニ難シ從テ直接税間接税ノ區別ニ付テハ或ハ課税納期ノ確定ノ有無或ハ收入金額確定ノ有無或ハ手續上検査ヲ要スルノ多少或ハ全ク行政上ノ便宜等區區ノ標準ニ依リ復歸一スル所ナシ今實際上ノ分類トシテ廣ク行ハレ殊ニ佛蘭西ニ於テ行ハルル種別ハ

臺帳税及ヒ税表税ノ區別ハ形式上ヨリ分類スレハ臺帳ニ依ル租税ヲ臺帳税ト曰
ヒ税表ニ依ル租税ヲ税表税ト曰フ又實質上ヨリ分類スレハ連續シテ存在スル一
定ノ課税物件ニ賦課スル租税ヲ臺帳税ト曰ヒ一時ノ事實ニ對シテ賦課スル租
税表税ト曰フ所謂ボリユーノ行政上ノ便宜ヲ標準トスル分類ト殆ト其實質ニ
於テ趣テ一ニスル所アリ即チ氏ノ定議ニ依レハ直接税トハ直接ニ人民及ヒ人民
ノ財産ノ所有者クハ使用等確定不動ノモノニ賦課シ豫メ收入ノ數額並ニ收入時
期ノ一定スルモノヲ謂ヒ贈與交換取引等ノ事故アルニ當リテ賦課スル租税ニシ
テ收入ノ數額及ヒ徵收時期ノ確定シ難キモノヲ間接税ナリト曰ヘリ即チ此分類
ハ租税負擔ノ所在ヲ問ハスシテ徵收ノ方法ヲ標準ト爲セルカ故ニ租税ノ數額存
續期間等ニ於テハ其間ニ差異ヲ見サルモ其收入ノ性質及ヒ方法ニ至リテ其類ヲ
異ニシ彼ノ確定公債及ヒ流動公債ノ種別ト其趣テ一ニスル所アルヲ見ルヘシ斯
ノ如ク二者ノ分類ハ其間ニ標準ヲ異ニスルヲ以テ其範圍又自ラ相合致セサル所
アリ例ヘハ相續税贈與税ノ如キハ學理上ハ純タル直接税トシテ認メララル所ナ

レトモ行政上ノ分類トシテハ税表税トシテ認メララルカ如シ
之ヲ要スルニ直接税間接税ノ區別ニ對シ負擔ノ所在ヲ標準ト爲スコトハ租税立
法ノ上ニ於テ租税公正ノ原則ヲ保持スル上ニ於テ重要ナリト雖モ租税ノ種類ニ
依リテハ之カ負擔ノ所在ヲ認定シ難キモノ尠ナカラサルノミナラス縱令之カ所
在ノ明カニ認定シ得ヘキモノモ固ヨリ永久不動ニ確定スルモノニアラサルヲ以
テ臺帳税及ヒ税表税ノ分類カ事實ニ於テ行ハルルコト固ヨリ恠ムニ足ラサルナ
リ

第六節 課税物件ノ種別ニ依ル分類(人税) 物税及ヒ事實税)

課税物件ヲ基礎トスルトキハ人自體ニ賦課スル租税ト貨物ニ賦課スル租税ト事
實ニ賦課スル租税ト三種ト爲ルヘキコトハ本章第一節課税物件ニ於ケル解釋ニ
依ルモ明カナル所ナリトス所謂人税物税及ヒ事實税ト稱セララルモノ是ナリ人
税トハ納税者ノ自然人タルト法人タルトヲ問ハス其法律上人格ヲ有スルモノタ

ル點ヨリ人格其モノヲ課税物件トスルモノニシテ或ハ狹義ニ解釋シテ分頭税階級税等ノミヲ認ムルモノアリ或ハ廣義ニ解釋シテ財產又ハ所得ヲ得ル經濟上ノ主體トシテ之ニ賦課スル一般ノ所得税ヲ人税ト認ムルモノアリ物税トハ人ヲ離レテ有形ノ貨財ヲ課税物件ト認ムルモノニシテ事實税トハ消費移轉等ノ事實ヲ課税物件ト認ムルモノナリ

此分類方法ハ理論上批難ナキモノナレトモ狹義ノ人税ノ如キハ其實用少ナキヲ以テ單ニ物税及ヒ事實税ヲ認メテ人税ヲ認メサルモノアリホッフマンノ財產税行爲税ノ如キ即チ是ナリ又ハコーンワグチル等ノ如ク收得税財產税消費税ノ三種ニ分類スルモノアリ

第四章 租税ノ分配

緒論

租税分配ノ問題ハ租税公正ノ問題ト其性質ヲ一ニセルモノナリ即チ如何ニスレハ租税ノ負擔カ一般ニ普及セラレ且納税者間ニ於テモ負擔カ平等ニ分配セラレ

ルヤヲ研究スルモノナリ租税其モノハ人爲的ノ制度ナリ之カ分配ノ一般平等ヲ研究スルハ道德上政治上ノ問題ニシテ又同時ニ經濟財政上ノ問題ナリ故ニ租税ノ分擔ハ實ニ事實ニ於テ公正ナルヲ以テ足レリトセス其公正ナルコトカ一般人民ニ公認セラレルコトヲ要ス故ニ租税ノ賦課徵收ハ現状ノ許ス限リ社會ニ其公正ナル分配ヲ實現セシメ一般人民ニ租税分配ニ關スル原理ヲ知悉セシメサルヘカラス前ニ租税ノ觀念ヲ論スルニ當リテ租税觀念其モノハ常ニ時ト處トニ依リ其意義ニ變遷ヲ生スヘキコトヲ一言セリ故ニ場合ニ依リテハ平等課税說利益交換說ノ如キモ亦批難スヘキモノニアラス唯今日ノ國民經濟ノ下ニ於テハ國民ノ納税力ニ應シテ租税ヲ徵收スルコトハ最モ公正ニシテ又最モ一般ニ承認セラレルコトハ上述セル所ニシテ次ノ二點ニ就テ論述スヘシ

- 第一、 比例税及ヒ累進税論
- 第二、 重複課税及ヒ免税論

第一節 比例税及ヒ累進税論

第一款 比例税及ヒ累進税ノ沿革

納税力ヲ以テ課税ノ標準ト爲スヘシトノ學說ハ遠ク其源ヲポーダンニ發シ其後
 アダムスミスカ四大原則ノ第一則トシテ租税ハ國民ノ資力ニ應シテ負擔スルモ
 ノタルコトヲ説キテヨリ學說實際共ニ廣ク行ハルルニ至レリ資力課税ハ佛蘭
 西大革命以前ニ於ケル貴賤階級ノ懸隔ニ伴ヒ最モ資力アル貴族僧侶カ免税輕税
 ノ特權ヲ有シ下級人民ハ最モ重キ負擔ヲ受ケシ不平等ニ對シテ發生セルモノニ
 シテ當時比例税ノ學說盛ニ起リ租税ナルモノハ人民ノ財產所得ニ比例シテ賦課
 スヘシト唱道セラレタルハ主トシテ一部階級ノ免税輕税ニ對スルモノニシテ形
 式上之ヲ租税一般ノ原則ニ對スル比例税ト稱スルコトヲ得ヘシ其後佛蘭西ノ革
 命ト其他國ニ及ホセル變動ハ不平等ナル免税輕税ノ特權ヲ根柢ヨリ破壊シ租税
 一般ノ原則カ普ネテ認メラルルニ至リテヨリ比例税ハ一變シテ租税平等ニ對ス
 ル比例税トシテ累進税ト對抗スルモノトナレリ即チ比例税トハ課税物件ノ價額

數量ニ應シテ同一ノ税率ニ課スル所ノ租税ヲ謂ヒ累進税トハ課税物件ノ價額又
 ハ數量ニ應シテ追加ノ定率ヲ課スル租税ヲ謂フモノニシテ其論旨ハ要點ハ一ニ税
 率ヲ變更スルノ有無ニ存セリ故ニ等シク比例税累進税ト稱スルモノニシテ其課
 税物件ニ付テ或ハ所得ノ總額ニ課スル場合アリ或ハ制限的比例税又ハ累進税ト
 稱シ所得ヲ以テ標準トナシ或ハ所得ヨリ必要費ヲ控除シ或ハ所得ノ混成物ヲ分
 析シテ多少ノ變更ヲ加フル場合アリ其税率ノ増減算定ノ方法限定生計費ノ免除
 等其間ニ幾多體様ノ異動ヲ生シ得ヘキモ此等ハ比例税ト累進税ト區別ノ要素ニ
 アラサルコトハ言テ俟タス

累進税ノ學說ニ對シテ前世紀ヨリ今世紀前半ニ於テモンテスキュー、ルソー、老ミ
 ラボ、セ、ガルニエール等既ニ積極論ヲ唱道セシモ其最モ學說實際共ニ旺盛ヲ
 極ムルニ至リシハ社會政策學派ノ物與ニ始マリ英國ノサックス、ウ、カーゼル、獨
 ワグネル、コーン等其最モ有名ナルモノトス然レトモ尙ホ英國ノマ、カ、ロ、ク、バ、ス、テ
 ー、アル、佛、國ノボリ、ユ、ド、バ、リ、ユ、獨、國ノグ、ナ、イ、ス、ト、ヘルマン等ノ大家ニシテ比
 例論ヲ唱フル者亦少ナカラス然レトモ學說實際共ニ各種ノ租税ニ通シテ絶對ニ

比例税及ヒ累進税ノ行ハルヘキコトハ將來ニ於テ望ムヘカラサルコトニシテ範圍ニ對スル論點ハ要スルニ絕對ナル比例税論ト租税ノ一部ニ對スル累進税論トニ大別セラル後者ニ於テモ如何ナル種類ニ對シテ累進税ヲ適用スヘキヤハ亦學說ノ區區ニ分ルル所ナリ然レトモ近時各國ノ立法例ニ徴スレハ累進税ヲ課スヘキ租税ノ種別ハ主トシテ所得稅財產稅相續稅及ヒ登錄稅印紙稅等ニシテ其他ノ租税ニ至リテハ未タ累進法ノ實行ヲ見ルモノ甚タ少ナシトス

第二款 累進税積極論

第一項 純正經濟學上ノ積極論

純正經濟學上ノ積極論ハ主觀客觀兩様ノ方面ヨリ等シク之ヲ説明スルコトヲ得ヘシ客觀的ニ説明スレハ收入ノ增加率ハ支出ノ增加率ニ比シテ大ナリト云フニ在リ尙ホ詳言スレハ收入ト支出トハ常ニ同一ノ歩合ヲ以テ高低スルモ支出ノ屈伸力ハ收入ノ屈伸力ニ比シテ小ナリト云フニ在リ餘額ノ蓄積ヲ目的トスヘキ私人經濟ニ在リテハ收入額増加スルニ從ヒ收入額ト支出額トノ差異ノ比率ハ遞増

シ又ハ遞増シ得ヘキモノナリ今實例ヲ以テ言ヘハ收入年額千圓ノ者カ生産費生計費等ニ要スル支出額八百圓ニシテ收入ニ對シ八割ノ比率ヲ有スルモノト假定スルトキハ收入年額一萬圓ト爲ルモ支出ノ額ハ同一ノ比率ヲ以テ八千圓ニ上ルモノニアラス即チ支出ノ增加率ハ收入ノ增加率ニ伴フコト能ハサルモノニシテ收入額ノ増加スルニ從ヒ收入ト支出トノ差異ハ常ニ收入ニ對シ一定ハ比率即チ二割ヲ保持スルモノニアラスシテ此比率其モノカ又漸時増加スルモノナリ勿論實際ニ於テハ支出カ八千圓又ハ八千圓以上ニ上ルカ爲メニ收支ノ差額ノ比率カ同シキカ又ハ却テ減少スルコトアルヘキモ此場合ノ支出ノ增加率ハ事實ニ於テ一定ノ比率即チ八割以下ニ低下シ得ヘキモノナリトス故ニ一方ニ於テハ收入カ如何ニ増加スルモ支出ハ必スシモ同一ノ比率ヲ以テ増加セサルノミナラス一方ニ於テハ收入カ如何ニ遞減スルモ支出ハ限定生計費ヲ超過シテ之カ低下ヲ許ササルモノナリトス

此觀念ヲ主觀的ニ納稅者カ課税ニ依リテ受クル所ノ侵害ノ程度ヨリ觀察スルモ亦同一ノ結論ヲ生スヘシ即チ主觀的ノ觀察トハ納稅者カ受クル痛苦ヲ標準ト爲

ナルモ、ニシテ所謂ミルカ租税ノ平等トハ、痛苦ノ平等ヲ意味スト、言ヘルモノ是ナリ。此觀念ヲ純正經濟學上ノ學理ヨリ説明セルハ、ゼボンスワラスメンゲル等ノ唱道ニ係ル最終效用説又ハ限界效用説ナリ。此説ニ依レハ貨財ノ效用ハ其分量ノ増加スルニ從ヒテ却テ之カ減少ヲ來スモノナリ故ニ所得モ亦之ト同シク一個入ノ得ル所ノ所得額増加スルニ從ヒ其效用ノ程度ヲ減少スルモノナリ故ニ所得ノ分量増加スルニ從ヒ其所得ノ一部ヲ納税スル苦痛ハ益、減少スヘシ然ルニ一方ニハ自由所得ノ増加率ハ收入額ノ増加率ニ比シテ大ナルカ故ニ之ニ賦課シテ同一ノ苦痛ヲ與ヘンニハ其遞加スル所ノ自由所得ニ對シ又遞加スル税率ヲ以テスヘシト云フニ在リ故ニ一方ニ於テ限定生計費以下ノ收入アル者ニ對シテ租税ノ賦課ヲ爲スヘカラスト云フハ生計ノ必要費即チ最モ效用大ニシテ其價額ノ最モ大ナル部分ヲ徵收スルハ非常ナル苦痛ヲ與フルモノニシテ富者ニ對シテ比較的重キ税率ヲ賦課スヘシト云フハ結極富者ニ於テハ其奢侈ニ屬スル部分即チ效用及ヒ價額ノ少ナキ部分ヲ徵收スルカ故ニ苦痛ヲ與フルコト少ナシト云フニ外ナラサルナリ

第二項 社會政策上ノ積極論

私有財産制度ノ保障ト工業ノ發達ト及ヒ資本ノ増殖ニ伴フ貧富ノ懸隔ハ益、社會ノ不平均不平等ヲ助長シ漸次政治上經濟上ニ害毒ヲ及ホスニ至リシハ歐米ニ於ケル最近ノ狀態ニシテ社會問題トシテ近世學說實際共ニ之カ調和救済ニ對シテ研究セララル所ナリトス累進税ハ租税平等ノ觀念ニ適合スル程度ニ於テハ未ダ直チニ社會政策主義ニ合致スルモノニ非ス、財政其モノハ國家カ生存發達ヲ目的トスル以上ハ單ニ收入ヲ得ルノミテ以テ財政ノ本旨ト爲スヘカラサルコト論ヲ俟タス故ニ社會政策主義ハ比例税ハ益、富者ヲ富マシ貧者ヲ貧フスル手段ナルカ故ニ尙ホ一步ヲ進メ累進税ノ税率ノ歩合ニ依リテ富者ニ對シテ比較的重キ負擔ヲ負ハシメ或程度マテ富ノ分配ノ調和ヲ圖ルヘシト云フニ在リ故ニ要ハ如何ナル程度ヲ以テ能ク富者ノ權利利益ヲ害スルコト少ナクシテ而モ一般ノ富ノ分配ヲ調和シ貧富ノ懸隔ヲ解除シ得ヘキヤニ存ス彼ノ僕婢稅蓄犬稅自轉車稅自動車稅私用車稅等富者ニ特有スル課税物件ニ對シ比較的輕稅ヲ課スヘシト云フ

第三款 累進税ノ消極論

第一、經濟上ノ消極論

累進税ハ富ノ蓄積ヲ阻害シ之カ流出ヲ促スモノナリ貯蓄ノ意思ト貯蓄ヲ爲シ得ルコト即チ餘裕アルコトハ貯蓄ノ要素ナリ今若シ其餘裕ヲ侵蝕スルコト甚クシケレハ貯蓄ヲ爲スヘキ實力減殺セラルルノミナラス之ニ伴フテ貯蓄心ヲ抑制シ延テ國民ノ勤勉心ヲ減却スルニ至ルヘキコト固ヨリ言テ俟タス蓋シ産業ノ盛衰ハ主トシテ新資本ノ供給ノ多寡及ヒ之カ獲得ノ難易ニ原因スル以上ハ資本ノ増殖ニ對スル人爲的ノ抑制ハ必スヤ産業ノ發達ヲ阻害シ一國ノ經濟財政ニ對シテ重大ナル影響ヲ波及スヘキモノナリ故ニ貯蓄ニ對スル一種ノ罰金ト見ルヘキ累進税ハ一方ニハ富ノ蓄積ヲ阻害シ一方ニハ富ノ流出ヲ助長シテ富ノ流入ヲ抑制スルモノナリ此危險ハ近時國際間ニ於ケル資本ノ移動劇甚トナルニ從ヒ一層甚クシキヲ加フルニ至ルヘキモノナリ

第二、行政上ノ消極論

奢侈税ハ租税加高上最モ遁脱ノ弊害多キモノナリ贅澤品高價品ニ課スル租税ハ或ハ密賣商ニ依リテ脱税セラレ或ハ虚偽ノ申告財産ノ隱蔽ニ依リテ之カ課税ヲ免カルルモノナリ是レ一ハ其課税物件カ不確定ニシテ正確ニ之カ調査ヲ爲シ難キト一ハ其税率ノ比較的重キニ依ラスンハアラス、從テ所得税財産税相続税等ノ如キ最モ課税物件ノ精確ナル調査ヲ爲シ難キ租税ニ對シ累進税ヲ採用スルトキハ遁脱ノ弊害多キコト固ヨリ言テ俟タサル所ナリ累進税ハ所得ノ高ニ依リテ税率ニ變動ヲ生スルモノナルカ故ニ課税額ヲ決定セントスルトキハ勢ヒ所得高ヲ精密ニ測定スルコトヲ要ス然ルニ一方ニハ所得ノ増加ニ伴ヒ税率ヲ増加スルヲ以テ脱税ノ誘因一層強大ニシテ之ヲ防壓スルコト最モ困難ナルヘシ

第三、財政上ノ消極論

累進税ノ收入ハ世人カ豫想スル如ク大ナルモノニアラス如何トナレハ第一累進税ハ比例税ニ比シテ遁脱ノ弊害大ナルカ故ニ爲メニ失フ所ノ損失額少ナカラサルノミナラス若シ此等ノ弊害ノ防壓ニ昂ムルトキハ一方ニハ資本ノ流出ヲ來シ

其收入額ヲ减小スルノミナラス一方ニハ徵税ノ費用過大ニシテ結局國庫ノ實收入ハ却テ減殺セラルヘシ第二累進税ニ依リテ高キ税率ニ從ヒテ納付スル税額ハ其納税者ノ數ニ比例スレハ相對的ニハ高額ナルヘキモ納税者其者ノ位數少ナキヲ以テ絕對的ニ總額ノ上ヨリ見ルトキハ僅ニ其最少部分ヲ占ムルニ過キス故ニ租税ノ收入ヲ大ナラシメンニハ多數中等以下ノ階級ニ之ヲ求ムルコトヲ要ス累進税ノ爲メニ殊ニ生スヘキ收入力ノ小額ナルハ尙ホ奢侈税ノ大ナラサルト其趣ヲ一ニスルモノナリ

第四 道徳上ノ消極論

(甲) 累進税ハ專擅的ノモノナリ單ニ立法者ノ臆測ニ依リテ定メラルモノナリ而シテ立法者ハ近時立憲政治ノ下ニ於テ多數ノ人民ノ代表者ニ依リテ定メラルモノナルカ故ニ彼等ハ税率ノ追加ニ依リテ直接ノ利害關係ヲ有セサルノミナラス却テ累進税ニ依リテ自己ノ負擔額ヲ低減スルコトヲ得ヘシト信スルモノナリ故ニ立法者ノ意思ニ依リテ決定セラルヘキ累進税率ハ人爲的ニシテ必然ノ結果トシテ專擅ノ弊害隨伴スヘキモノナリ

(乙)

税率ハ税率ノ遞加スルニ從ヒ終ニ納税者ノ財源ノ全部ヲ徵收スルニ至ルヘシ是レ數理上當然ノ結果ニシテノイマンノ累進所得税法ニ依レハ所得六百磅ニ對スル税額十五磅ニ過キササルモ九萬七千磅ニ對スル税額ハ四萬九千磅ヲ超ユ又ルロア、ホリユーノ累進所得税法ニテハ所得五百フランニ對スル税額ハ五フランニ過キササルモ百二萬四千フランノ所得ニ對スル税額ハ八十八萬五千フランニ至ルニ至ル即チ共ニ一定ノ程度ニ至レハ税額其モノカ却テ所得ヲ超過スルニ至ルモノナリ

第四款 累進税消極論ノ反論

第一 經濟上ノ反論

累進税ニ對スル消極論ノ第一ハ經濟上ノ批難ナリ乃チ累進税ハ富ノ蓄積ヲ阻害シテ之カ流出ヲ促スヘシト云フニ在リ租税ニシテ税率重キニ失シ賦税者ノ財源ヲ侵蝕スルニ至レハ國民生産ノ觀念減却シ富ノ蓄積ヲ阻害スルニ至ルキヘコトハ既ニ租税ニ關スル經濟上ノ原則ノ下ニ於テ述ヘタル所ナリ故ニ重税ト認ムヘ

キ以上ハ其租税カ比例税ニ依ルヤ累進税ニ依ルヤハ毫モ間フ所ニアラス從テ消極論者ハ累進税ヲ以テ直チニ重税ナリト断定スルモノト解釋セズンハアラス然トレモ比例税ノ税率ニ輕重アルカ如ク累進税ニ於テモ其税率ニ輕重アルヘキコト固ヨリ言テ俟タス故ニ本問題ハ富者カ比較的重キ税率ヲ負擔スルモ爲メニ受クル所ノ苦痛ハ等シク之ニ比例スルモノニアラサルコトヲ一言スレハ足レリ是レ第二款第一項ニ於テ既ニ詳論スル所ニシテ又特ニ辯明スルノ要ヲ見サレトモ尙ホ他ノ方面ヨリ之カ理由ノ一端ヲ證スル所アルヘシ今所得税ヲ以テ例センニ大所得ヲ得ルモノハ多クハ其所得ハ其所有財産ヨリ生スルモノニシテ小所得ヲ得ルモノハ多クハ其所得ハ勞力ヨリ生スルモノナリ財産ヨリ得ル所得ハ其財産ノ存在ト共ニ永久ニ且確實ニ之カ收入ヲ獲得スルコトヲ得ヘキノミナラス財產其モノハ無限ナルヲ以テ其所有額及ヒ之ニ伴フ收入額ハ亦等シク無限ノ伸縮力ヲ有スルモノナリ加之財産ノ所有者ハ全然財産ノ收入以外ニ立テテ自己ノ勞力ニ依リ又特種ノ收入ヲ獲得スルコトヲ得ヘシ故ニ單ニ勞力ノミニ依リテ得ル所ノ所得ノ如ク永久ト確實トヲ保シ難ク且限リアル勞力ニ伴ヒテ收入ノ少額ニ止

マルモノト比スルトキハ比較的重キ租税ヲ負擔スルモ苦痛ヲ感スルコト少ナキノミナラス一方ニハ富者ハ資本額多キニ從ヒ徒費スル所ナクシテ其收入ヲ増加シ一方ニハ貧者ハ日夜勤勉シテ而モ得ル所ハ僅カニ費ス所ヲ支フルニ過キサレモノ多シトス是レ大所得ニ比較的重キ税率ヲ高ムルモ毫モ苦痛ヲ増加セサル所以ニシテ或ハ所得税法ニ於テ此區別ニ依リ所有財産ニ對シテ特ニ負擔ヲ重カラシメ或ハ別ニ財産税ナルモノヲ所得税以外ニ定ムルモノアルニ至リシ所以ナリトス

第二 行政上ノ反論

累進税ニ對スル消極論ノ第二ハ行政上ノ批難ナリ即チ累進税ハ逋脱ノ弊害大ナリト云フニ在リ租税ニシテ重キニ失スルトキハ勢ヒ逋脱ヲ誘導スヘキコト固ヨリ言テ俟タス累進税ト雖モ其税率重キニ失セサルトキハ逋脱ノ弊害少ナカルヘク比例税ト雖モ重キニ失スレハ逋脱ノ弊害大ナルヘシ即チ第一ノ批難ノ根據破レタル以上ハ本論モ等シク立論ノ根柢ヲ失フモノナリ等シク課税物件ノ調査ニ困難ナル所得税財産税ニ於テハ逋脱ノ弊害大小ハ其税率カ累進税ニ依ルヤ比例税ニ依ルヤノ問題ニ存セスシテ税率其モノノ輕重其他租税ノ賦課徵收ノ良否風

第三、財政上ノ反論

累進稅ニ對スル消極論ノ第三ハ財政上ノ批難ナリ即チ累進稅ハ絕對的ニ收入少
ナキノミナラス遁脫多キヲ以テ又相對的ニ收入少ナシト云フニ在リ本論ハ第一
ニ租稅負擔ノ問題ト租稅收入ハ問題トヲ混同セルモノハナリ、收入ノ大小ハ租稅ノ
種類、課稅物件ノ多少及ヒ稅率ノ高低ニ正比例スルモノナリ故ニ同一ノ收入ヲ得
ルカ爲メニ累進稅比例稅何レノ稅法ニ依ルモ之ヲ徵收スルコトヲ得ヘシ要ハ唯
稅率高低ニ存スルモノニシテ又累進稅ハ必スシモ比例稅ノ場合ヨリ著シク巨額
ノ收入ヲ得ルコトヲ豫期スルモノニアラサルナリ第二反對論者ハ他ノ方面ヨリ
觀察シテ累進ノ重稅ヲ避ケ經濟上ノ批難ヲ遁レントスレハ累進稅ノ比率モ亦之
ヲ減少セズンハ非ス故ニ一國經濟社會ニ於テ最大多數ヲ占ムル小所得小財產ニ
賦課スル稅率輕キニ過クルカ爲メ豫期ノ收入ヲ得ルコト能ハサルヘシト論スル
モ此等ハ要スルニ却テ積極論者ニ權ヲ借スモノト謂フヘキナリ如何トナレハ今
所得稅ニ付テ例スレハ一方ニ於テ免稅ト爲スヘキ限定生計費ノ額又一方ニ於テ

所得ヲ賦課スヘキ最小所得ニ對スル比率ハ常ニ所得稅算定ノ根據ヲ爲スモノニ
シテ又容易ニ増減變更ヲ許ササルモノナリ故ニ今我國ニ於テ例ヘハ六百圓ノ所得
ニ對シ千分ノ十ノ所得稅ヲ課スルトセハ比例稅ト爲セルトキト累進稅ト爲セル
トキトハ後者ハ常ニ比例率ト累進率トノ差異ニ應シ各自ノ課稅物件ヲ相乘セル
乘積丈前者ニ比シテ收入多カルヘキコト言フ俟タス蓋シ此場合ニ於テ累進稅ニ
依リテ得ヘキ總額ヲ比例稅ニ換算シテ最小所得ニ對スル稅額ヲ高ムルコトハ却
テ事理ニ反スルノミナラス又在來ノ比例稅ニ依リテ得ヘキ總額ヲ累進稅ニ換算
シテ最小所得ニ對スル稅率ヲ輕減スルノ要ヲ見サレハナリ故ニ本問題ノ如キハ
根本ニ於テ問題ヲ混同セルノミナラス累進稅カ常ニ比例稅ニ比シテ收入ノ大ナ
ルコトヲ忘却セルモノナリ

第四、道徳上ノ反論

累進稅ニ對スル消極論ノ第四ハ道徳上ノ批難ナリ即チ累進稅ハ專擅的ニシテ稅
率ヲ累進スル結果富者ノ所得ハ全部徵收セラルルニ至ルヘシト云フニ在リ累進
稅ハ專擅的ナリ立法者ノ一定スル所ニ任サレ立法者ハ多數ノ代表者ニシテ一部

富者ノ損害ノ大ナルニ依テ利益ヲ感スルカ故ニ漫リニ累進税率ヲ高ムヘシト謂ヘルハ理論實際共ニ矛盾ヲ免カレサルナリ比例税モ專擅的ナリ比例税ノ税率モ等シク立法者ノ定ムル所ナリ唯其課税物件ノ階級及ヒ之ニ對スル税率ノ算定等立法者ニ依リテ定マルヘキ事項ノ多キタケ危險發生ノ度數多カルヘシト云フニ過キス然レトモ此等ノ問題ハ累進税ニ特有ナル問題ニアラスシテ總テノ行政ニ通有スル政治問題ナリ固ヨリ事實トシテ比例税ノ税率カ重キニ失セルコト各國ノ租税歴史ニ徴シテ多キカ如ク又和蘭ニ於テ進歩黨カ議會ノ多數ヲ占メタル時ニ極端ナル累進税法ヲ行ヒシカ如キ實例ナキニアラサルモ此等ハ例外ノ場合ニ屬スルモノニシテ立法者ハ立憲國ニ於テハ多數ノ代表者タルヘキモ實際ニ於テハ此等ノ立法者ハ却テ多數ノ代表者タルノ實ヲ舉ケサルヲ原則トスル者ニシテ代表セラレタル立法者自身及ヒ之ヲ選舉スル選舉人ハ比較的所得財產ノ大ナルモノナルカ故ニ自己及ヒ選舉者ノ利害關係ニ左右セララルノミナラス少數ノ富者ノ力ニ依リテ其意思ヲ動かサルコト多キハ東西兩洋ニ通シテ常見ル所ナリ尙ホ一步ヲ進メテ若シ立法者カ事實最大多數ノ爲メテ計リテ少數ノ利害ヲ後

ニスルトキハ果シテ社會上道德上不可ナル所アルカ余輩ハ寧ロ事實ニ於テ現ハレサルコトヲ悲ムモノナリ

累進税ハ税率カ遞加スルモノナルカ故ニ如何ニ其遞加ノ比率カ輕キ場合ト雖モ遞減累進税ノ特種ノ場合ニ於ケル外ハ究極其稅額カ課税物件ノ價額ヲ超過スルニ至ルヘキコト固ヨリ言テ俟タサル所ナリ故ニ學說立法例共ニ課税物件ノ一定ノ額ヲ最高ノ限度トシテ其以上ハ總テ同一ノ税率ヲ賦課スルヲ例ト爲セリ所謂累退税 (Degressive Taxation) ト稱セララルモノ是ナリ我國現行所得税法ノ如キモ亦此方法ニ依リ所得三百圓ヲ最低限度トシテ千分ノ十ノ税率ヲ課シ漸次累進シテ十萬圓ヲ最高限度トシテ十萬圓以上ハ總テ千分ノ五十五ヲ賦課スルコトト爲セリ斯ノ如ク累進ノ方法ハ一定ノ限度ニ於テ停止スルモノナルヲ以テ夫ノ消極論者カ批難スル如キ弊害ハ固ヨリ之ヲ避クルコトヲ得ヘキナリ

第五款 累進税ノ種別

第一項 課税物件ノ累進税

課税物件ノ累進税トハ税率ハ一定ノ比例税率ニ因リテ變更スルコトナキモ課税物件ヲ變更シテ假想的課税物件ヲ案出スル方法ナリ假想的課税物件ノ案出方法ハ又種種アレトモ其重モナルモノハ實在ノ課税物件ニ或實數ヲ乘スルモノト或實數ヲ加減スルモノトアリ前者ハ古代ノアゼン現時ノ瑞西ノ一部ノ州ニ於テ行ハルル方法ニシテ各個人ノ所得額ニ對シ或歩合ヲ乘シテ其乘積ヲ以テ所得税ヲ課スヘキ假想ノ課税物件トナシ其相乘スル歩合ヲ所得ノ大小ニ從ヒテ遞加ノ率ヲ以テ増加スルモノナリ後者ハバーアンウルテンブル等ニ於テ行ハルル方法ニシテ所得額ノ増減ニ從ヒ特ニ所定ノ額ヲ増減シテ所得税ヲ賦課スヘキ假想ノ課税物件ヲ算定スルモノニシテ少額ノ所得ニハ多少ノ數額ヲ減シ所得額巨額トナルニ從ヒ之ニ加フル數額ヲ遞加スルモノナリ

第二項 税率ノ累進税

税率ノ累進税トハ課税物件ノ數額ヲ變更スルコトナク税率ノミテ累進セシムルモノニシテ通常狹義ノ累進税トシテ最モ廣ク認メラルルモノナリ然レトモ其税率ノ累進方法ト課税物件ノ數額ト相關聯シテ其間ニ種種ノ別アリ今私見ニ從ヒ所得税ノ場合ヲ想像シテ其重モナルモノヲ分類スレハ左ノ如シ

第一目 單純累進税

單純累進税ハ最低限度トシテ一定ノ所得ニ一定ノ税率ヲ賦課シ以上所得ノ増加ニ比例シテ税率ノ増加カ又一一定ノ歩合ヲ以テ累進スルモノナリ前ニ一言セシボリ氏ノ考按ニ係ル累進税ハ所得額二倍スルニ從ヒ税率ヲ三倍スルモノニシテ一定ノ比率ヲ以テ累進スル單純累進税ノ一種ナリトス

第二目 複雑累進税

複雑累進税トハ最低限度トシテ一定ノ所得ニ一定ノ税率ヲ賦課シ以上所得ノ増加スルニ從ヒ其税率増加ノ歩合カ一定セサルモノナリ複雑累進税ハ亦分レテ追加複雑累進税及ヒ遞減複雑累進税ノ二種トナル前者ハ税率ノ歩合ノ増加ノ比率カ増加スル場合ニシテ後者ハ遞減スル場合ナリ例ヘハ千圓ニ對シテ千分ノ十ヲ課シ其倍額二千圓ニハ千分ノ十五(千分ノ十二千分ノ十ノ二分ノ一即チ五ヲ加ヘタルモノ)ヲ課スルノ場合ニ於テ其倍額四千圓ニハ千分ノ十五ニ千分ノ十五ノ二分ノ一即チ七五ヲ加ヘタル二十二五ヲ以テセスシテ千分ノ二十二五以上ヲ賦課スルカ如キハ遞加複雑累進税ト云ヒ千分ノ二十二五以下ヲ賦課スルカ如キ場合ハ遞減複雑累進税ト云フ

我現行所得税法ノ如キハ遞減複雑累進税法ニ依ルモノニシテ五百圓ノ所得税率ハ千分ノ十二ニシテ其倍額一千圓ノ所得税率ハ千分ノ十五ナルカ故ニ四分ノ一(十五ト十二ノ差三ハ十二ノ四分ノ一ナリ)ノ増加ヲ見ルモ五萬圓ノ所得税率ハ千

分ノ五十ニシテ其倍額十萬圓ノ所得税率ハ五十五ナルカ故ニ十分ノ一(五十五ト五十ノ差五ハ五十ノ十分ノ一ナリ)ノ比率ニ遞減セリ
 遞減複雑累進税ハ所謂累退税ナルモノト同一ノ原因ニ出テシモノニシテ所得額上ルニ從ヒ累進税率追加ノ歩合ヲ減少スルモノニシテ道德上ノ消極論ニ對スル救済方法タリ

第三目 混同累進税

混同累進税トハ最低ノ限度トシテ一定ノ所得ニ一定ノ税率ヲ課シ以上所得ノ増加ニ伴ヒ其新ニ増加スル所得額ニ付テノミ累進セル税率ヲ課スルモノニシテ其税率ノ累進方法ニハ又單純ナル場合ト複雑ナル場合トアリ前ニ一言セルノイマシノ累進税ハ混同累進税ニシテ單純累進法ヲ採用セルモノナリ氏ノ累進税ハ百磅以下ノ所得ニ對シテハ之ヲ免除シ百磅以上千磅以下ノ所得ニ對シテハ其超過額ノ千分ノ三ヲ課シ以上千磅ヲ加フル毎ニ其増加シタル千磅ニ對シ千分ノ十ヲ増加シタル税率ヲ課スルモノニシテ今混同累進税ヲ採用スルトキハ二千九百磅

ノ所得ニ對シテハ百十二磅ニシテ三千百磅ニ上ルモ百二十三磅ニ上ルニ過キス然レトモ此方法ニ依ラサルトキハ二千九百磅ノ所得總額ニ對シテ千分ノ六十ヲ課スルカ故ニ税額百四十五磅トナシ三千百磅ノ所得ニハ其總額ニ對シテ千分ノ六十ヲ課スルカ故ニ税額ハ直チニ百八十六磅ニ上ルヘシ故ニ混同累進税ニ依ルトキハ最モ平等ノ觀念ニ適合シ課税物件ノ階級ノ限界點ニ近キシモノニ對スル不平等ヲ救済スルコトヲ得ヘシ

註一、現行所得税法ハ第三種ノ所得ニ對シ混同税率累進税法ヲ採用セサルカ爲メ比較的平等ノ弊害少シト爲サス今二箇ノ場合ヲ例證シテ混同累進法ノ租税ノ原則ニ協ヘル所以ヲ明カニスル所アルヘシ

現行所得税累進税率 (第三種ノ所得)

三百圓以上	千分ノ十
五百圓以上	千分ノ十二
千圓以上	千分ノ十五
二千圓以上	千分ノ十七

(以下省略)

第一 最低限度ノ所得額ヲ限界ト爲ス場合

甲者 所得額	二百九十九圓
乙者 所得額	三百一圓
現行租税制度ノ税額	甲者 免 税 乙者 三圓一錢
混同累進法ニ依ル税額	甲者 免 税 乙者 二 錢 (超過額二圓ニ對ス)
所得額二圓ノ差ニ基ク二者税額ノ差額	三圓一錢
現行制度	三圓一錢
混同累進法	二 錢
第二 税率ノ累進點ノ限界ヲ爲ス場合	
甲 所得額	千九百九十九圓
乙 所得額	二千一圓
現行租税制度ノ税額	甲者 二十九圓九十八錢五厘 乙者 三十四圓一錢七厘
混同累進法ニ依ル税額	
甲者	$(399 \times 0) + (200 \times 1) + (500 \times 1.2) + (1000 \times 1.5) = 21$
乙者	$(293 \times 0) + (200 \times 1) + (500 \times 1.2) + (1000 \times 1.7) = 23.034$
所得額二圓ノ差ニ基ク二者税額ノ差額	二十三圓三錢四厘

第三項 餘論

上來述べタル所ニ依リ消極論ノ論點ハ税率ニ最高限度ヲ設ケ尙遞減累進法混同累進法等ニ依リ十分ニ之カ弊害ヲ除去シ却テ益、公正ノ原則ニ適合スルコトヲ得ヘキコトヲ見ルヘシ此他、ボリュー氏ノ如キハ別ニ物品ノ賣買、保險ノ掛金、貨物運送ノ賃金等カ其一方ノ當事者ノ資力ヲ有スル程度ノ大小ヲ問フコトナク又其額ノ大ナルニ從ヒ其對價カ却テ比較的遞減セラルルコトヲ例ト爲シ以テ累進税ヲ非難スト雖モ根本ニ於テ私法上ノ有價行爲ト公法上ノ無價行爲トヲ混同セル僻論ナルカ故ニ又特ニ茲ニ辯駁スルノ要ヲ見ス又一部ノ折衷論者ハ一國ノ租税負擔ノ狀況ニ照シテ若シ未タ重カラスシテ國民カ納税ノ餘力ヲ有スルトキ又ハ國民ノ貧富ノ懸隔大ナラサルトキ又ハ間接税重カラズシテ租税ノ負擔カ貧者ニ偏重セサルトキハ特ニ累進税ヲ行フノ要ナシト論セリ然レトモ上述ノ如ク累進税ヲ

設定スルノ是非ハ根本ニ於テ租税ニ適合スルコトヲ期スルニ在ルカ故ニ他ノ各種ノ政策ト同シテ苟モ其方法ニシテ宜シキヲ得ハ常ニ之ヲ實行スヘク所謂折衷論者カ論スル如ク特ニ一國租税負擔ノ狀況ニ照シテ之カ取捨ヲ爲スヘキモノニアラサルコト言フ埃タサルナリ若シ累進税法カ租税ノ公平ヲ期シ得ヘキニ於テハ租税ノ種類賦課ノ時期ノ如キハ問フ所ニ非サルナリ

第二節 重複課税及ヒ免税論

第一款 重複課税論

租税一般ノ原則ハ今日ニ於テハ租税ノ主體及ヒ税源ニ付テ殆ト網羅シ盡セルト共ニ一方ニ於テハ同一ノ課税物件ニ對シテ時ニ重複ノ課税ヲ爲スコトナシトセズ課税ノ重複ニハ形式上ノ重複ト實質上ノ重複トノ別アリ形式上ノ重複トハ國家又ハ其他ノ公共團體ニ於テ國家又ハ公共團體カ同一税源ナルコトヲ豫期シテ賦課スル場合ナリ現時各國ノ地方財政ニ於テ國税ニ伴フ所謂附加税ナルモノハ此類ニシテ國税ノ課税ヲ再ヒスルカ如キモ單ニ形式ニ止マルモノナリ實質上ノ

重複ニハ、又國法上ノ重複即チ國家又ハ其他ノ公共團體ニ於テ其同一ノ稅源ナルコトヲ豫期セスシテ賦課スル場合ト國際上ノ重複トシテ獨立國ノ間ニ於テ互ニ自國在留ノ外國人及ヒ在外ノ自國人ニ課稅スルニ依リ同一ノ稅源カ二重ノ賦課ヲ受クル場合トアリ前者ハ稅法ノ改正ニ依リテ之ヲ救正スルコトヲ得ヘキモ後者ハ國際稅法ノ確定セサル今日ニ於テハ尙ホ未タ救正ノ手段ナキナリ

歐洲ニ於テハ、スタイン氏國際稅法ノ制定ヲ主張シテ以來此問題ニ付テ研究スル者相次キ學說ノ上ニ於テハ一般ニ土地、家屋、資本並ニ營業ヨリ生スル利益ニ對スル租稅ハ財源ノ存在スル國ニ於テ課稅シ分頭稅所得稅、消費稅、移轉稅等ノ如キ租稅ハ納稅者ノ居住スル國又ハ消費移轉ノ行ハレタル國ニ於テ課稅スヘシト爲セリ勿論元首、皇族、公使其他ノ在外官吏及ヒ其家族等ニ至リテハ別ニ絶對的身上ノ權トシテ一般ノ私人ト異ナリ殆ト其居住國ノ租稅ノ負擔ヲ受クルコトナク唯時ニ內務行政ニ伴フ二三ノ負擔ヲ受ケタルコトアルニ止マレリ國際上ノ課稅ニ付テ我國ノ所得稅法ハ大體普漏西ノ所得稅法ニ倣ヒ明治三十二年二月法律第十七號所得稅法第一條及ヒ第二條ニ於テ積極ニ帝國內及ヒ此法律施行地ニ住所ヲ有

シ又ハ一箇年以上居所ヲ有スル者ハ此法律ニ依リ所得稅ヲ納ムル義務ヲ有シ尙ホ此等ノ條件ニ該當セサル者此法律施行地ニ資産營業又ハ職業ヲ有スルトキハ其所得ニ付テノミ所得稅ヲ納ムル義務アルヲ規定シ一方ニハ第五條第六號ニ於テ消極的ニ外國又ハ此法律ヲ施行セサル地ニ於ケル資産營業又ハ職業ニ因ル所得ニ對シテハ施行地ニ本店ヲ有スル法人ノ所得ヲ除キ所得稅ヲ課セサル旨ヲ規定セリ

第二款 免稅論

斯ノ如ク租稅ノ賦課ハ租稅ノ主體及ヒ稅源ニ付キ普及セラレ既ニ稅源ニ對シテハ重複ノ場合ヲ生スルニ至リシモ一方ニ於テハ尙ホ法規上特ニ一般ノ原則ニ對シ納稅力ヲ有スル者及ヒ稅源ト爲リ得ヘキモノニ對シ各國皆多少ノ除外例ヲ設クサルハナシ今之ヲ大別スレハ國際關係ニ於ケル除外例ト國內關係ニ於ケル除外例トノ二ト爲スコトヲ得ヘシ

第一、國際關係ニ於ケル除外例ハ又內國人ノ外國ニ居住スル場合ト外國人ノ內

國ニ居住スル場合トニ分タル外國ニ居留シ其國ノ保護利益ヲ受クル内國人ハ
恰モ自國ニ住居シ自國ノ保護利益ヲ受クル外國人ト同シク本國ノ課税ヲ免カ
レテ所在國ノ課税ヲ負擔スルハ毫モ條理ニ反スル所ナシ然レトモ其納稅資格
ノ條件租税ノ種類等ニ至リテハ未タ國際稅法ノ統一ヲ見サルヲ以テ或ハ消極
的ノ衝突ニ依リテ同一ノ稅源ニ付キ本國並ニ居住國ニ對シテ絕對ニ負擔ヲ免
カルルコトアルヘク又積極的ノ衝突ニ依リテ同一ノ稅源ニ付キ二重ノ課税ヲ
受クルコトナシトセス然レトモ此ノ如キハ國際稅法ノ統一ヲ俟テ共ニ之カ衝
突ヲ避クコトヲ得ヘシ

爾シテ在外國ニ於クル公使領事其他ノ官吏及ヒ其家族等ニ至リテハ別ニ身上ノ
特權トシテ殆ト絕對ニ居住國ノ課税ノ負擔ヲ免カルルモノニシテ唯時ニ内務行
政ニ伴フ少數ノ地方税ノ負擔ヲ受クルコトアルニ過キス

第二、國內關係ニ於ケル除外例ハ其重モナルモノヲ次ノ四種ト爲ス

- (甲) 皇室及ヒ皇族
- (乙) 公法人

(丙) 保護政策其他ノ理由ニ依ル輸出品

(丁) 營利ヲ目的トスル公共事業

(甲) 皇室及ヒ皇族ノ所得及ヒ財產ニ對シテハ或ハ主體ニ於テ皇室ノミニ限定
シテ皇族ヲ包含セサルモノアリ或ハ客體ニ於テ御料財產ト限定シテ私產ニ
及ホササルモノアリ課税ノ種類ニ於テハ國稅ノミニ限定シテ地方税ノ賦課
ヲ免除セサルモノアル等各國皆歴史上ノ沿革ニ依リ多少其類ヲ異ニセリ我
國ニ於テハ皇室及ヒ皇族ハ共ニ其所得及ヒ財產ニ對シ免稅ノ特權ヲ有シ地
方税ノ如キモ明治十六年大藏省第三十號告示ニ依リ將來ニ於テ皇族所有ノ
場所ニ對シテ之ヲ課スヘカラサルコトヲ公示セリ

(乙) 公法人ニ對スル課税ノ原則モ亦殆ト一定スル所アルナシ唯其大體ニ於テ
一方ニハ國稅ハ一般ニ免除セラルルコトヲ原則ト爲スニ反シ地方税ノ負擔
ハ均シク公法人ニ課スルコト歐米ニ於テハ漸次一般ノ原則トナルモノノ如
シ

(丙) 保護政策其他ノ理由ニ依テ特種ノ輸出品獎勵ノ爲メ關稅ヲ免除シ又ハ輸

出品獎勵ノ爲メ戻リ稅等ノ特權ヲ付與スルコト今日ニ於テモ一般ニ認ムル所ナリ我國ニ於テハ明治六年以來各種ノ貨物ニ對シテ輸出稅ノ免除ヲ與ヘ又明治二十一年七月勅令第五十四號ハ輸出ノ酒類ニ對シ戻リ稅ヲ認メタリ

(丁) 營利ヲ目的トセサル公共事業即チ祭祀宗教慈善學術技藝其他公益ニ關シ營利ヲ目的トセサル事業ニ對シテハ各種ノ租稅特ニ所得稅ノ免除ヲ爲スハ各國ノ一般ニ原則ト爲ス所ナリ(所得稅法第五條第四款參照)

第五章 租稅制度

緒論

國家又ハ公共團體ハ文化ノ發達ト共ニ其行動ノ範圍益々廣ク之ニ應スルカ爲メ新ニ特種ノ租稅ヲ設クルコトヲ要スヘク或ハ在來ノ租稅ニ對シ之カ稅率ヲ高ムルコトヲ要スヘシ然レトモ稅率ノ高低ハ又自ラ一定ノ限度アリ租稅ノ種類モ亦無限ナリト謂フヘカラス是ニ於テ租稅ノ負擔重キニ失スルコトナク一般ニ且平等ニ分配セラレ而モ國庫ニ充分ノ收入ヲ得ントスルニハ此等ノ種類性質ノ異ナレ

ル諸種ノ租稅ニ對シテ如何ナル政策ヲ採ルヘキカ是レ租稅制度ノ問題トシテ租稅論ニ於テ最モ重要ナル地位ヲ占ムルモノナリ租稅制度ノ問題ハ單稅及ヒ複稅論ヲ以テ足レリト爲スヘキモノニアラス直接稅及ヒ間接稅ノ相對的觀察ハ單稅及ヒ複稅論ニ關聯シテ之ヲ論究スルコトヲ要スルノミナラス國稅及ヒ地方稅ノ負擔ノ分配ハ又租稅制度ニ關スル重要ナル問題ナリ故ニ本節ノ下ニ於テハ單稅複稅論直接稅論及ヒ國稅地方稅ノ三問題ニ付キ略述スル所アルヘシ

第一節 單稅及ヒ複稅論

第一款 單稅論ノ沿革

古代ニ於テハ國ヨリ租稅制度ナルモノナシ是レ元首ノ收入ハ經費需要ノ大小及ヒ度數ノ多少ニ應ジテ支出ノ必要生スルニ伴ヒテ時時其徵收ノ最モ容易ニシテ而モ最モ力弱キ人民ノ所有ニ係ル貨財ヨリ徵收スルコトヲ例ト爲セシテ以テナリ第十六世紀以後中央集權ノ漸次興隆スルト共ニ國勢ノ膨脹ハ益々租稅ノ必要ヲ來タシ雜稅ナル許多ノ租稅ハ煩雜ナル賦課徵收ノ方法ニ因リテ一般經濟界ヲ害ス

ルコト甚クシキノミナラス。徵收ノ費用ヲ實收入額ノ半ヲ超過スル有様ヲ見ルニ至リシコトアルハ前ニ財政學史ノ下ニ於テ一言セルカ如シ夫ノ佛蘭西ニ於テ保護政策主義ノ行ハレタル時代ニ在リテポーダン等カ始メテ財政上ノ現象ニ對シ理論的ノ研究ヲ爲スニ至リシモ其原由ハ實ニ租稅ノ負擔不平等ニシテ下級人民カ其租稅行政ノ煩苛ニ堪ヘザリシニ基因セリ故ニ當時各國ノ租稅制度ニ對シテ學說實際共ニ最モ批難多カリシハ國民中最モ納稅力大ナル一部ノ階級カ免稅ノ特權ヲ有スル點ト租稅ノ種類多キニ過キ賦課徵收ノ方法煩雜ニ失セル點ノ二者ニ存シ單稅論ハ後者ニ對スル救濟手段トシテ發生セルモノナリ單稅論者ニシテ最モ古キハ千五百七十七年ノ頃各戸ノ竈及ヒ財產ニ應シテ課稅スヘシト論シタルボクセツトナリ其後シスモンロー及ヒホルボルネー等ハ總テ國內ニ於テ相當ノ生計ヲ營メル者ニ對シテ一錢ヲ賦課スレハ足レリト論シポーバンノ如キハ其十分ノ一稅論ニ於テ鹽稅海關稅及ヒ或種ノ行爲稅ヲ特ニ副稅トシテ存シ他ハ總テ農工業ノ生産物ニ對シ稅率百分ノ五乃至十ノ租稅ヲ賦課スヘシト云ヒポーアールベールモ亦農工業ノ生産物ニ十分ノ一ノ單稅ヲ課スヘシト云ヘリ其後或ハ

消費單一稅ヲ唱フル者出テマシユードカールハ家賃ヲ標準トシテ賦課シタル家屋稅ヲ單一稅ト爲スヘシト論シ其他土地公債證書及ヒ紙幣ヲ有スル者ニ單一稅ヲ爲スヘシト論シ甚クシキニ至リテハ麵粉一斤ニ付テ二片ノ稅ヲ課シテ單一稅ト爲スヘシト論スル者アル等幾多ノ學說續出セシモロック、ヴァンタール等カ唱道セシ土地ノ生産物ニ賦課スル單一稅論ハ最モ有名ナルモノニシテ重農學派ノ地租單一稅論ノ先驅ヲ爲セシモノナリ

單一稅論ニシテ輿論ヲ動カシ實際ノ財政ニ勢力ヲ波及スルニ至リシハ重農學派ノ單一稅論ナリ重農學派ノ土地ノミヲ以テ唯一ノ純生産ヲ爲スモノナリトスル學說ハ地代ノミヲ以テ租稅唯一ノ源泉ナリト認メ縱令如何ナル課稅物件ヲ選擇スルモ其負擔ハ漸次轉嫁シテ地主ノ負擔ニ歸着スルモノト思惟シタルヲ以テ直チニ土地ヲ以テ課稅物件ト爲ストキハ稅法ヲ簡易ニシテ徵收ノ煩雜ヲ減殺スヘシト云フニ在リ

地租單一稅ニ次テ起ルハ財產單一稅ナリ財產單一稅ニハ不動産ノミニ課稅スヘシト爲スモノアリ又廣ク固定資本ニ課稅スヘシト爲スモノアリ最後ノ說ハド

シラードン及ヒメニエーノ唱道スル所ニシテ租稅ハ常ニ固定資本ノ所有者ニ歸着スルモノト爲セリ即チ租稅ノ負擔ハ勞働者商人等ニ歸スルコトナク租稅ノ賦課ハ勞銀ノ騰貴需要ノ減少トナリテ一般生産費ヲ増加シ結局製造家地主等ノ負擔ニ歸着スヘレト云フニ在リ

財產單一稅ニ次テ起リシハ所得單一稅ナリ蓋シ租稅ハ常ニ國民ノ所得ヨリ徵收スルモノニシテ各納稅者ノ所得ノ比例ニ應シテ賦課セラレスンハアラス故ニ國庫ノ需要額ハ納稅者ノ所得ニ比例シテ一度ニ彼等ヨリ徵收セラルヘシ其所得ノ土地ヨリスルト資本ヨリスルト勞力ヨリスルトハ毫モ問フ所ニアラス故ニ所得單一稅ハ實ニ納稅力ニ對シテ不平等ノ嫌ナキノミナラス他ノ單一稅ノ如ク課稅ノ基礎カ一部ニ限定シテ租稅一般ノ原則ニ適合セサルノ弊害ナシト云フニ在リ以上ハ單一稅ノ沿革ノ大要ニシテ近時ハ米國ノ一部ニ於テヘンリージョージハ又別ニ地租單一稅又ハ土地國有論ナルモノヲ唱道セリ然レトモ皆理想トシテハ不可ナルコトナキモ如何ナル種類ヲ以テ單一稅ト爲スモ事實租稅一般ノ原則及ヒ平等ノ原則ニ適合スルコト能ハサルカ爲メ延テ經濟上財政上ノ原則ニ反シ之カ

效果ヲ奏スルコト難キヲ以テ今日ニ於テハ殆ト單一稅論ヲ唱フル者ナク單一稅問題ハ一變シテ租稅如何ナル系統ノ下ニ整理スレハ所謂單一稅論者ハ批難スル租稅ノ弊害ヲ除去スヘキヤノ問題ニ移レリ從テ單一稅論ハ學說ニ於テモ近時益々其勢力ヲ失ヒ事實ニ於テモ古來ヨリ之カ實行ヲ見タルコトナク唯重農學派ノ學說カ盛ニ行ハレタル時代ニ於テバーデンノカールフリードリッヒカ地租單一稅ノ實行ヲ企テシコトアルモ全然失敗ニ了リタルコトアルノミ

第二款 單稅論消極論

單一稅論ノ重モナルモノハ地租單一稅財產單一稅及ヒ所得單一稅ノ三種ナリ共ニ單純ニシテ費用少ナキ租稅ヲ確保セントスルモノナルカ故ニ苟モ豫期ノ如ク事實ニ於テ之ヲ遂行スルコトヲ得ハ徵收費ヲ削減シテ國民ノ負擔ヲ減少スルコトヲ得ヘク各負稅者ノ直接ノ負擔ハ精密ニ之ヲ決定スルコトヲ得ヘク納稅者ハ租稅納付ノ煩雜ヲ減殺スルコトヲ得ヘシ故ニ理想トシテハ毫モ一點ノ批難ヲ加フヘカヲサルノミナラス後世國家ノ觀念國民經濟ノ狀況ノ變遷租稅行政ノ發達ニ

件ハ軍費制度ハ永久ニ不能ノ方便ナリト斷言スヘカラス然レトモ少ナクトモ現時及ヒ近キ將來ニ於テハ軍費制度ナルモノハ却テ彼等ノ理想ト全ク相背反スル結果ヲ見ルモノナリ今各種ノ租税ニ對シ各別ニ評論ヲ試ムルハ冗長ニ失スヘキヲ以テ單一税全體ニ付キ其不可ナル所以ノ大要ヲ列記スレハ次ノ如シ

第一、公正ノ原則上ノ消極論

(甲) 一般ノ原則上ノ消極論
一般ノ原則ハ當ニ租税收入ノ充分ナルコトヲ確保スル點ニ於テ必要ナルノミナラス一部ノ人民カ單一税制度ノ結果トシテ免除ノ利益ヲ受クルコトハ公正ノ原則上最モ忌ムヘキコトニシテ其弊害ハ單一税ニ一財政上ノ問題トシテ止マルヘキモノニアラス地租單一税又ハ財産單一税ハ單一地主又ハ固定資本ノ所有者ノミニ課税スルコトヲ主張スルモノニシテ企業家、労働者ノ全部若クハ一部ニ對シテ免税ノ特權ヲ與フルモノナリ總テ貨財ノ生産ハ土地又ハ固定資本ニ限ラレ如何ナル租税モ結局負擔カ此等ノ税源ニ歸着スルモノナリトスル僻論ヲ前提トスルニアラサレハ單一税ニ國民ノ一部ノ階級ニノ

(乙) 課税スル不法ノ租税ト謂ハスンハ非サルナリ
平等ノ原則上ノ消極論

租税ハ國民一般ニ普及スルコトヲ要スルト共ニ又此等國民各自ノ納税力ニ此例セスンヘアラス地租單一税又ハ財産單一税ノ如キハ其土地又ハ固定資本ノ價額ノ算定方法カ正確ナリトセハ地主間又ハ固定資本ノ所有者間ニ於テ各平等ナルコトヲ得ヘシ然レトモ地主殊ニ固定資本ノ所有者ナルモノハ各自カ土地又ハ固定資本ヨリ得ル所ノ所得ノ外ニ尙ホ利潤又ハ勞銀トシテ別ニ得ル所ノ所得アルヲ例トナスカ故ニ其納税力ニ對シテ平等ナルコト能ハサルヘシ又右二者中土地價格ノ算定方法其モノカ困難ナルノミナラス經濟狀況ノ變遷ト共ニ常ニ其價額自體カ動搖ヲ免カレサルモノナルカ故ニ單純ナル地租其モノニ付テ尙ホ平等ヲ期スルコト難シ固定資本ニ至リテハ其種類夥多ニシテ今假ニ財産單一税論者ノ言ノ如ク粗製品及ヒ商品以外ノ總テノ固定資本ノ市價ヲ以テ課税ノ基礎ト爲スモ其市價ノ正確ヲ期シ難キハ地價算定ノ場合ノ比ニアラス所得單一税ニ至テハ此困難又一層大ナルモノ

アリ總テ租稅ハ如何ナル種類ヲ問ハス事實納稅力ニ比例シ納稅者ノ所得ニ應セシムルコトハ殆ト不能ト云フヘキナリ故ニ若シ各種ノ租稅ヲ併用スルトキハ稅率輕キト共ニ或一種ノ租稅ニ於ケル過失ハ重キニ失スルコトナク又各種ノ租稅ニ依リテ互ニ其過失ヲ補償スルモノナリ若シ單稅ナルトキハ管ニ其過失ノ重大ニ過クルノミナラス又他ニ之ヲ救濟スルノ手段ヲ杜絶スルニ至ルヘシ故ニ著者ハ通貨ノ價額ハ高下ニ對スル復本位制度ニ於ケル補償作用ナル語ヲ藉リテ複稅ハ租稅ノ負擔ハ不平等ニ對シテ補償ハ作用ヲ有スルモノナリト謂ハントス

第二、財政上ノ原則上ノ消極論

(甲) 租稅ノ收入及ヒ性質ニ對スル原則上ノ消極論

單稅殊ニ地租單一稅及ヒ財產單一稅ハ租稅一般ノ原則ニ反スルモノナリ既ニ稅源ニ對シテ普及スル所ナクハ單稅ニ依テ複稅ノ場合ト同一ノ收入ヲ確保スルコトハ著シク稅率ヲ高ムルコトニ依テ絕對的ニ不能ナリト云フヘカラサルモ現時及ヒ將來ニ於ケル財政ノ狀態ニ對シテハ事實之ヲ不能ナリ

(乙) 租稅行政ニ關スル原則上ノ消極論

ト謂フモ不可ナカルヘシ殊ニ地租ノ如キ屈伸力ナキモノヲ以テ唯一ノ稅源ト爲ストキハ困難一層大ナリト謂ハスハ非ス

租稅ハ地租ナルト財產稅ナルト所得稅ナルトヲ問ハス之ヲ單稅ト爲ストキハ勢ヒ在來ノ稅率ヲ著シク高ムルコトヲ要スヘシ近時租稅ノ負擔ハ日ニ月ニ重キヲ加ヘバステープルノ如キハ一國國民ノ租稅ノ負擔ハ平均所得ノ一割ニ上ルヘシト謂ヘリ今斯ノ如キ負擔ヲ直接單一稅トシテ各人ニ對シ一時ニ要求スルトキハ之ヲ種種ノ租稅ニ依リテ徵收セラルル場合ニ比シ人民ヲシテ負擔ノ重キヲ感セシムルコト固ヨリ明カナリ況ンヤ此重稅カ公正ノ原則ニ反シテ一部ノ人民ノミカ賦課セラルルニ於テハ其苦痛殊ニ多キヲ加フヘシ蓋シ租稅通脫ノ弊害ハ其賦課徵收ノ手續方法ノ如何ニ存スルモ其主因ハ負擔ノ輕重ニ在ルヘキハ固ヨリ言テ俟タス從テ單稅ノ實行ニ依テ生スヘキ租稅通脫ノ弊害ハ蓋シ吾人豫想ノ外ニアルヘク爲メニ租稅ノ賦課徵收ノ簡易ヲ目的トスル單稅ハ正ニ反對ノ結果ヲ來スニ至ルヘシ殊ニ租稅ノ賦課

ニ於テ財產稅ノ如キ之ヲ難多ノ固定資本ニ通シテ平等ニ賦課シ一般所得稅
ニ於テ其所得ノ流出セル源泉ノ異ナルニ從ヒ必要ナル斟酌ヲ加フルカ如キ
コトハ租稅行政上其困難最モ大ナルヘシ

第三、經濟上ノ原則上ノ消極論

直接單一稅ニ依リテ一部ノ階級ニノミ重稅ヲ課スルニ至レハ爲メニ人民ノ所
得ノ大部ヲ侵蝕スヘク一般經濟上ノ狀態ヲ擾亂スルニ至ルヘキハ前二原則ニ
對スル批難ニ伴フ當然ノ結果ニシテ亦詳説ヲ要セサル所ナリ

以上ハ租稅ノ原則ニ對照セル單稅ニ對スル批難ノ大要ナリ尙ホ茲ニ特ニ一言ヲ
要スヘキハ所謂單一稅ト稱セラルルモノハ單ニ形式上ニ於テ單一稅タルニ止マ
リ事實ニ於テハ或程度マテハ舊ニ依リテ複稅タルヘキコト是ナリ例ヘハ一般所
得稅又ハ消費稅ナルモノモ其實幾種ノ特別稅カ互ニ相聯絡セルモノナリ固定資
本稅ノ如キモ實際ハ土地、鑛山、家屋器具、機械、船舶、車駕、家畜、工作物等ニ課スル各種
ノ租稅ノ結合セルモノナリ從テ租稅制度ノ簡易ヲ目的トスル租稅行政モ或程度
マテハ事實ニ於テ尙ホ舊ニ仍テ複稅ナルコトヲ知ラスンハアルヘカラス

第二節 直接稅及ヒ間接稅論

租稅制度ノ要ハ租稅ノ種類多キニアラスシテ秩序アル複稅ニ在リ從テ各種租稅
ノ比較的ノ效驗ヲ研究スルハ租稅制度ニ伴ヒテ必要ナル問題ナリ而シテ租稅ヲ
負擔ノ所在ヨリ分類スル直接及ヒ間接稅ノ種別ハ殊ニ單稅及ヒ複稅ノ問題ト密
着ナル關係ヲ有スルモノニシテ普通ニ唱道セララルル單稅ハ多ク直接稅ヲ意味ハ
ルモノナリ是レ沿革上地租單一稅ヲ唱道セル重農學派カ負擔ノ轉嫁ハ租稅ノ性
質ニ反スルモノナリトスル觀念ニ原由スルモノナリトス單稅制度ノ理論カ實際
ニ通シテ不可ナルコトハ既ニ前節ニ於テ論セシ所ナリ故ニ茲ニハ直接稅ト間接
稅カ共ニ利害得失相伴フ所以ヲ一言シ尙ホ其理由ヲ言明スル所アルヘシ(租稅ノ
類依分照)

第一款 租稅ノ原則上兩稅ノ比較

第一項 公正ノ原則上兩稅ノ比較

(甲) 一般ノ原則ニ對スル兩稅ノ比較

一般ノ原則ニ依リテ直接税及ヒ間接税ヲ觀察スルトキハ二者各自單獨ニテ國民一般ニ普及シ能ハサルコト言テ俟タサルモ間接税ニ在リテハ大體ニ於テ其課税物件ノ效用ヲ消費シ使用スルモノハ總テ之カ負擔ヲ受クルニ反シ直接税ニ在リテハ其直接税ノ課税物件ヲ所有スルモノニシテ特ニ免狀ヲ受クルコトアリ例ヘハ所得税ニ於テ一定ノ限度ヲ下レル所得ニ對シテ其賦課ヲ免除スルカ如シ之ヲ換言スレハ直接税ハ直接ニ納税者ニ對シテ苦痛ヲ與フルモノナルカ故ニ下級人民ニ對シテ縱令其納税力ニ應シテ相當ノ負擔ヲ課セントスルモ徒ニ費用ヲ要スルコト多ク貧民ノ怨恨ヲ招クコト大ニシテ勢ヒ之ニ賦課スルコト困難ナルモ間接税ハ社會ノ最大多數ヲ占ムル下級人民ニ對シテ此等ノ困難ヲ避ケ容易ニ課税ヲ普及スルコトヲ得ヘシ

(乙) 平等ノ原則ニ對スル兩稅ノ比較

直接税ハ下級人民ニ對シテ殆ト免除ノ地位ニ立タシムルノ弊アルヲ以テ間接税ヲ以テ此等ノ階級ニ負擔ヲ普及セシムヘキハ當然ノ事理ニ屬スルモノナリト雖モ間接税ノ賦課ハ又事實上ノ極端ニ走テ下級人民ニ對シ比較的重稅ヲ負擔セシムルノ弊害ナシトセス是レ私人經濟ニ於テ消費ノ額ハ財産所得ノ額ニ正比例セサルニ因ルハ自然ノ數ニシテ生計ニ必要ナル物品ニ賦課スル租稅ニ至リテハ上下ノ階級ヲ通シテ殆ト同一ノ負擔ヲ受クルノ不平等ヲ生スヘキコトハ既ニ屢々説述セル所ナリ是レ雷ニ生計ニ必要ナル物品ノ消費ノ分量ニ於テ富者貧者其間ニ著シキ區別ナキノミナラス物品稅ハ其物品ノ品位ニ依テ稅率ヲ異ニスルコトナク又異ニスルコト少ナキヲ以テ品位上等ナル物品ヲ消費スル富者モ品位下等ナル物品ヲ消費スル貧者モ同一ノ課税ヲ負擔スルハ到底平等ノ原則ニ對シテ著シク貧者ニ對シテ酷ナルモノト謂ハスンハアラサルナリ

第二項 財政上ノ原則上、兩税ノ比較

(甲) 租税ノ收入及ヒ性質ニ對スル兩税ノ比較

租税收入ノ原則ニ於テハ直接税ハ常ニ單一税トシテ普通ニ唱道セラルルニ由リテ之ヲ觀ルモ其年年巨額ノ收入ヲ得ヘク而モ其收入額ニ於テ變動少ナキ買税タルコト明カナリ然レトモ租税ノ性質ヨリ之ヲ觀レハ間接税ハ人口ノ増加經濟ノ發達ニ伴ヒ年年其收入ヲ増加スヘキニ反シ直接税ハ所得税等一二ノ例外ヲ除キ皆屈伸力少ナキモノナリ勿論此等ノ租税ト雖モ固ヨリ絶對的ニ屈伸力ヲ有セサルモノニアラスシテ一國ノ富ノ増加ニ伴ヒ税率ヲ高メテ收入ノ増加ヲ圖リ得ヘキコトハ言テ俟タサル所ナリ

(乙) 租稅行政ノ原則ニ對スル兩税ノ比較

直接税ニ於テ租稅行政上最モ困難ナルハ課税物件ノ評價ナリ然レトモ間接税ノ場合ニ比スレハ通税ノ弊害少ナシ我國明治三十五年度豫算ニ徴スレハ租税ノ總收入ハ一億五千三百四十三萬餘圓ニシテ其徵收費ハ四百四十一萬餘圓ナ

ルヲ以テ徵收費ノ平均歩合ハ二分九厘ナリ而シテ其内海關稅ノ收入ハ一千七百四萬餘圓ニシテ此徵收費ハ六十七萬餘圓ナルカ故ニ徵收費ノ歩合ハ三分九厘ニシテ平均歩合ニ對シ一分ノ超過ヲ示セリ其他ノ間接税ニ至リテハ之ヲ知ルコト難キモ大體ニ於テ少ナクトモ直接税ノ徵收費ノ歩合ハ平均以下ナルコト明カナリトス

第三項 經濟上ノ原則上、兩税ノ比較

經濟上ノ原則ヨリ觀察スレハ直接税ハ直接ニ負擔ヲ課スルニ反シ間接税ハ租税ノ轉嫁ニ因リテ間接ニ負擔スルカ故ニ間接税ノ被税者ハ其負擔ノ部分モ純然タル經濟上ノ原因ニ由リ生スル生産費ノ一部トシテ思料セラルルヲ常トスルヲ以テ被税者ノ感情上直接税ノ不利ト爲スヘキ點少ナカラサルモ經濟上貨財ノ生産、交易、分配、消費ニ通シテ最モ影響ヲ及ホスコト大ナルハ間接税ナリトス從テ間接税ハ其検査方法ノ繁簡税率ノ高低等ニ因リテ時ニ特種ノ貨財ノ生産消費ヲ絶對ニ阻害スルコト多ク關稅ノ如キハ外國貿易ニ及ハス影響殊ニ著シキノミナラス

別ニシテ、フ、レ、ス、リ、ニ、ハ、關稅署ヲ維持スルニ充分ナル貿易ノ行ハレサルヲ以テ或
港灣ヲ全然閉鎖スルト共ニ他港ニ於ケル被稅品ノ輸入ニ制限ヲ加ヘ又保稅倉庫
ヲ有セサル都市ヲシテ之ヲ有スル都市トノ競争上常ニ不利益ノ地位ニ立タシメ
産業ノ勃興ヲ阻害スヘシト云ヘリ其他間接税ハ營業規則ノ遵守帳簿ノ保存等諸
種ノ拘束ヲ加フルト共ニ印紙税入市税等ニ於テ其印紙又ハ入市貨財ノ額多キニ
從ヒ稅率ヲ減少スル累退稅ノ行ハルル場合ニハ小産業ヲ撲滅スルノ恐アリ是レ
米國ニ於ケル燐寸煙草業等ニ於テ實例ノ證セシ所ナリトス
之ヲ要スルニ間接税ハ直接税ニ比シテ經濟上ニ及ハス利害關係密接ニ且重大ナ
ルカ爲メ勢ヒ經濟上ニ及ハス弊害モ直接税ノ場合ニ比シテ多ク且複雜ナルヘキ
コト明カナリトス

第二款 結論

上述スル所ノ如ク直接税及ヒ間接税ハ共ニ利害相伴ヒ互ニ獨得ノ長所ヲ有スル
コト明カナルヲ以テ二者之ヲ併用スルハ租稅制度當然ノ事理ニ屬ス而シテ二者

カ租稅收入ノ數額ニ於テ如何ナル歩合ヲ保ツヘキヤノ問題ニ付キミラボーノ如
キハ租稅收入ノ三分ノ一ハ直接國稅ヲ以テシ三分ノ二ハ間接國稅ヲ以テスヘシ
ト主張シ其他幾多ノ此問題ニ付キ論スル學者アルモ此等ハ單ニ一個ノ政治論ニ
シテ全ク時ト處トニ依リ之ヲ各個ノ事實問題ニ歸セスンハアラサルナリ然レト
モ國民的所得即チ一定ノ時期ニ於テ新ニ生産セラレタル貨財ハ常ニ租稅ノ源泉
ナリ故ニ之ニ對シテ直接ニ租稅ヲ賦課スルハ國家カ私人所有ノ貨財ノ一部ヲ要
求スルニ最モ適當ニシテ且簡明ナル方法ト謂ハスンハアラス故ニ財產所得ニ課
稅スルコトカ便宜ナリト思料セララルル場合ニ於テハ之ニ對シテ直接ニ課稅スル
コトハ租稅賦課ノ原則ナリ所謂間接税ト稱セララルルモノハ要スルニ直接税ニ伴
フ事實上政治上ノ困難ヲ避クルカ爲メ他ノ方面ヨリ特種ノ手段ニ訴ヘテ國民ノ
所得ノ一部ヲ徵收スルモノニ外ナラス乃チ物品税ノ如キハ直チニ國民ノ所得ヲ
獲得スルトキニ直接ニ之ヲ徵收セスシテ其所得ノ一部カ支出セラレテ貨財ノ消
費ト爲ルトキニ間接ニ之ヲ徵收スルモノニ外ナラス故ニ直接税間接税ノ二者ハ
何レカ租稅收入ノ大部ヲ占ムヘキヤハ問題ノ要素ニアラスシテ間接税カ理論上

租稅ノ本體タルヘキ直接稅ニ附隨シテ能ク負擔ノ轉嫁ヲ誤マラス相俟テ租稅ノ原則ニ適合スルコトヲ期スヘキモノナリ

第三節 國稅及ヒ地方稅論

緒論

地方公共團體ハ古代主權ノ實力ヲ有シタル獨立ノ團體ノ中央主權ノ興隆ニ伴フテ漸次其權限ヲ縮少セラレタルト國家カ新ニ行政區劃トシテ設定シタルトテ間ハス等シテ自己生存ノ目的タル國家ノ事務ヲ處理スル國家ノ機關ニシテ獨立ノ人格ヲ有スルモノナリ故ニ其權限内ニ於テハ獨立ノ自由意思ヲ有シ其意思ヲ遂行スルカ爲メ獨立ノ財政ヲ維持スルハ地方團體本然ノ結果ナリ近時自治ノ觀念ノ發達ハ漸次地方行政ヲシテ分權主義ニ進マシムルニ至リ地方財政ハ地方經濟ノ發達ト人口ノ増加ニ因リテ絕對的ニ膨脹スルト共ニ行政事務ノ分配ニ伴ヒテ又相對的ノ増加ヲ爲スニ至レリ我國ノ如キモ地方稅ノ收入ハ年年著ク増加シ明治三十二年度ノ決算ニ依レハ府縣稅三千七百五萬餘圓市稅六百六萬餘圓町村稅

三千二百二十九萬餘圓合計七千五百四十一萬餘圓ニシテ之ヲ同年度現計ノ國稅收入一億二千六百三萬圓ニ對照スルトキハ約六割ノ比率ヲ保テリ此ノ如ク地方財政ニ於テハ地方稅收入ノミニシテ猶其數額ニ就テ特ニ研究ノ要ヲ見ルノミナラス其地方財政ノ累年膨脹ノ比率大ナルニ至リテハ更ニ又驚クヘキモノアリ其收入ノ累年比較表ハ累年財政其收入統計表中ニアルヲ以テ明治二十三年度ヨリ三十一年度ニ至ル府縣費市費町村費ノ累年統計表ヲ示セハ次ノ如シ

地方費各別累年統計表

(單位千圓)

年 度	府 縣 費	市 費	町 村 費
二十三年	二〇九一九	二〇六〇	一九二五七
二十四年	二二二四五	二二五一	二〇五三一
二十五年	二三三八九	二四四七	二一五九三
二十六年	二四五〇三	二八八七	二二四五二

二十七年	二六〇〇二	五一六二	二四六九六
二十八年	二四八〇二	六二四二	二六八七五
二十九年	三一六三〇	七九二五	三〇〇三四
三十年	四〇〇四七	一〇二五〇	三〇三五六
三十一年	四一七一九	六四三九	三八二九九

乃チ地方費中府縣費ハ二倍強市費ハ三倍強町村費ハ約二倍ノ増加ヲ來セルモノニシテ其増加ノ急激ナル近時地方財政ニ對シテニ警戒ヲ加フルニ至リシモ亦怪シムニ足ラサルナリ而シテ是等經費ノ支出別ニ就テ見ルトキハ又更ニ憂フヘキモノアリ今府縣費ニ就テ見ルニ其經費ノ四分ノ一ハ土木費ニ投セララルルモノニシテ然カモ此土木費ハ積極的生產的ノ土木費ニ非スシテ其大部ハ主トシテ水害ノ復舊修繕ノ爲ニ支出セララルル所ノモノタリ教育費警察費監獄費ハ各約七分ノ一内外ヲ占メ各國ノ地方財政ニ於テ最モ重要ナル部分ヲ占ムル勸業費ニ至リテハ衛生費ト相併シテ漸ク二十分ノ一以下ヲ占ムルニ過キス此ノ如ク現時ノ地方

團體ハ財產及ヒ産業上ノ財源甚タ乏シクシテ然カモ年々經費特ニ不生產的消費的經費ノ膨脹ヲ來タスヲ以テ地方稅及ヒ地方債ノ異常ノ増加ヲ見ルハ誠ニ數ハ免レサル所トス地方財政ニ就テハ別ニ研究セント欲スルヲ以テ本書ニ於テハ本節及ヒ公債論地方債論ノミニ止メントス

各國地方財政比較表

(單位千圓)

	歲	入	歲	出	人口一人平均
英吉利	一、〇一五、七四六	一、〇三一、三七八			
合衆國		一四一、二七一			二、〇〇
佛蘭西	一〇八、六三四	一〇九、七二四			二、八五
露西亞	七九、二五二	八七、四九〇			〇、八二
印度	六一、一八四	六二、二九二			〇、九五
以太利	五二、八五七	五二、八五七			一、六四

國	日	瑞	加	白	和
士	本	西	奈	耳	蘭
哥	本	太	太	義	蘭
五三、五一二	四四、九三三	三〇、〇七七	二五、一一三	七、〇二一	四、三七五
五二、三〇三	四四、九二五	三〇、四六七	二五、八三八	六、〇四八	四、三七五
四、一八	一、〇二	九、一六	四、八六	〇、八九	〇、八五

(千八百九十七年度、英、瑞ニハ町村費ヲ含マス)

第一款 特別稅及ヒ附加稅

國稅ト地方稅ノ異同ハ前ニ租稅ノ區分ノ下ニ一言シタル所ナリ故ニ茲ニハ特別地方稅ニ付テ大體ノ概念ヲ略述スヘシ
 地方稅トハ地方團體カ團體ノ經費ニ充ツルカ爲メ其團體ノ地域内ヨリ徵收スル租稅ニシテ通常大別シテ附加稅及ヒ特別稅ノ二種トス附加稅トハ國稅ニ準據シ

稅額ヲ附加シテ徵收スル租稅ヲ謂ヒ特別稅トハ地方團體カ自己ノ課稅權ノ範圍内ニ於テ獨立ニ賦課徵收スル租稅ヲ謂フ勿論等シク附加稅ト稱スルモノニシテ單ニ附加スヘキ國稅ノ種類ニ付テノミ制限ヲ加フルアリ尙ホ其附加ノ稅額ニ對シ最高限度ヲ定ムルモノアリ又其各個ノ附加ニ對シテ中央官廳ノ許可ヲ條件ト爲スモノアリ皆各國ノ沿革上各種ノ體裁ヲ有シ特別稅ニ於テモ其課稅權ノ大小ニ伴ヒ稅目及ヒ稅額ノ全部又ハ一部ニ付キ總テ中央官廳ノ許可ヲ條件トスルモノアリ或ハ稅目ノ選定、稅額ノ決定等ニ對シ全ク自由ノ權限ヲ與フルモノアリ其體裁區區ニ分ルルモ要スルニ附加稅ハ國稅ニ準據シテ徵收スルモノナルカ故ニ一種ノ稅率ノ增加ト見ルヘク特別稅ハ新稅ノ設定ト見ルヘキナリ
 附加稅ト特別稅ノ種別ニ對シテハ或ハルロア「ボリ」氏ノ如ク直接國稅ノ附加稅ニ依リテ計算法ヲ均クシ國家ノ機關ヲシテ地方稅ヲ徵收セシムルハ地方財政ノ管理ヲ單純正確ナラシメ且徵收費ヲ減少スルモノナリトシ總テ地方稅ハ附加稅ニ依ラシムヘシト論スル者アリ或ハ「フーラー」氏ノ如ク自治團體ハ團體本然ノ性質上自治ノ目的ヲ達センニハ租稅ノ賦課徵收及ヒ其使用方法ニ對シ之カ自由

ノ行動ヲ許スヘシトシテ、凡テ地方稅ハ獨立稅ヲ以テスヘシト論スル者アリ然レトモ地方ノ財政ハ理論上決シテ附加稅、特別稅單獨ノ存在ヲ許スヘキモノニ非ス蓋シ中央集權ハ國家ノ統一ヲ保テ政治ノ畫一ヲ期スル爲メ必要ナリト雖モ地方ニ依リテ氣候、風土、人情ヲ異ニスルニ拘ハラヌ地方ノ行政ヲ舉ケテ細大共ニ中央政府ノ下ニ歸一スルハ行政事務ノ滯滞ヲ來シ形式ニ流レ個個ノ事情ニ適從シテ變化スルコト能ハサラシメ常ニ中央政府ノ一舉一動ノ下ニ影響セラレテ不安ノ地位ニ立タシムルモノナリ故ニ國家自存ノ目的及ヒ法治ノ目的ニ伴フ行政即チ財政國家行政ノ要素ト見ルヘキモノハ之レヲ中央集權ノ下ニ統一スルコトヲ要スヘキモ主トシテ地方ノ利益ニ關スヘキ國家内治ノ目的ニ伴フ行政ノ一部ハ之ヲ地方ニ分權スルコトヲ要ス故ニ政治上ノ集權ハ國家ノ生存上缺クヘカラスアルモノナレトモ行政上ノ集權ハ却テ國家ノ健全ナル發達ヲ阻害スルモノナルヲ以テ自動觀念ノ發達ハ漸次地方行政ヲシテ分權主義ニ進マシムルモノナリ之ヲ要スルニ一團體設立ノ主旨ハ事情ヲ異ニスル總テノ地方ヲ通シテ中央政府ヨリ之カ行政行爲ノ全般ニ通シテ確實ノ施政ヲ爲スコト不可ニシテ所在ノ人民ヲシテ

自ラ公共ノ事務ニ參與セシメ以テ奉公ノ精神ヲ養ハシムルト共ニ其利害關係ノ密接ナル地方行政其モノノ發達ヲ期スルニ在リ故ニ同一ノ理論ヲ以テ租稅制度ヲ觀察スレハ中央政府カ一様ノ標準ニ據リ全國ヲ通シテ設定シタル國稅ヲ以テ總テノ地方ノ財政ニ至ルマテ之カ經費全般ノ支辨ニ充テントスルハ亦租稅公平ノ原則ノ主旨ニ戻ル所以ニテシテ各地方團體ハ各自其地方特有ノ事情ニ適應セリ租稅制度ニ依リテ其經費ノ一部ヲ維持スルハ皆ニ其地方特有ノ行政ノ性質及ヒ程度ニ適當ナルノミラス又租稅平等ノ原則ニ適ヘルモノニシテ自己ノ財政ニ依リテ自己ノ行政ヲ爲サシムルハ自治團體其モノノ觀念ニ伴フ當然ノ結果ト謂ハスルハアラサルナリ故ノ行政法學者ハ市町村ノ行政行爲ヲ助ケルカ爲メ必要ナル地方團體ノ組織及ヒ之カ設備維持ニ要スヘキ財務行政ヲ以テ自治團體ノ固有事務ノ一要素ト認メタルハ又同一ノ趣旨ニ出サルモノト解セスハアラサルナリ然レトモ地方團體モ均シク國家ノ機關タル以上ハ國家ハ全ク地方財政ヲ對ニ放任スルコトヲ許サズ各種ノ特別稅ヲ認ムルハ外更ニ中央官廳間ノ財政上ノ權衡ヲ維持スルコトヲ要ス此方法ハ或ハ國稅ノ基礎トシテ賦課稅ノ制ヲ設ケ

或ハ國庫ヨリ一定ノ金額ヲ補助シ又ハ下渡ヲ爲スヲ例トス蓋シ特別稅ハ其課稅ノ基礎狹キヲ以テ地方財政ノ經費ヲ充スニ足ラサルノミナラス一方ニハ時ニ巨額ノ支出ヲ要スルコト多キニ原由スルモノニシテ各國ノ財政制度ハ上述シタル二方ノ一方又ハ雙方ヲ採用スルヲ例ト爲セリ我邦ノ地方財政ハ特別稅ヲ認ムル外併セテ附加稅及ヒ國庫ノ下渡補助ノ制ヲ認ム今明治三十二年度ニ於ケル各地方稅ノ決算ヲ示セハ左ノ如シ

第一、府縣稅

(甲) 特別稅

內 附

一、戶數割家庭稅

二、營業稅

三、雜種稅

(乙) 附加稅

內 附

一、地租割

三七、〇五七、〇二二
一五、四一〇、一三五

七、九四〇、一〇〇
二、二九一、五八五
五、一七八、四五〇
二一、六四六、八七七
二〇、七一八、八一七

第二、市稅

(甲) 特別稅

(乙) 附加稅

內 附

一、直接國稅附加稅

い、地價割

ろ、所得稅割

は、營業稅割

二、間接國稅附加稅

三、府縣稅附加稅

い、戸別割

ろ、家屋割

は、營業割

(參照) 國庫ノ下付及ヒ交付金

府縣稅補助及ヒ交付金

第三、町村稅

財政學 第三編 收入論

九二八、〇六〇

五、五〇四、〇九〇

六、〇六五、三三四

八七四、九四二

五、一九〇、三九二

二、九八六、〇〇六

二、〇九八、四〇五

二四二、二四二

六八九、〇八八

一、一六七、〇七五

一四、七四九

三、〇七七、二三八

九四三、三六四

一、四八二、〇六七

六五一、八〇七

二七五、〇〇四

一七七、五九五

三三、二九七、〇二六

(甲) 特別税

内 附

五二〇

一、反則罰及各種特別税

い、反則罰

ろ、各種特別税

二、夫役及口税

い、夫役

ろ、口税

一、〇九七、三七七

七七七、三九四

三一九、九八三

三九六、九一六

三八七、九一八

三八〇、〇九〇

(乙) 附加税

内 附

三〇、八〇二、七三三

一、直接國税附加税

い、地價制

ろ、所得税制

は、營業税制

二、間接國税附加税

三、府縣附加税

い、戸別制

ろ、營業制

一一、〇三六、三七二

一〇、一五五、一四一

三〇九、三二九

五七一、九〇二

三、五三二

一九、七六二、八三〇

一八、二二二、一五七

一、五四一、六七九

(普通) 國庫ノ補助及交付金

府縣税交付金

府縣税補助金

富貴補助金

一一八、四五三

一九一、七五二

五〇一、四七一

三、〇〇一、二七五

二〇四、二二四

以上統計ニ依リテ示ス所ノ外地方ノ財政ハ尙ホ地方公債地方財産ノ收入手數料
等各種ノ收入ヲ有スルヲ以テ地方財政ノ收支總額ニ於テ如何ナル程度マテ財政
ノ獨立ヲ保持スルヤハ直チニ之ヲ斷定シ難キモ今上掲ノ統計ヨリ國税附加税ト
其他ノ地方特別税ト對比シテ之ヲ府縣税以下ノ地方税ニ對照スレハ次ノ如シ是
レ後段特別税ノ特質ニ關スル問題ニ關聯シテ重要ナル事項ニ屬スルモノナリ

第一、府縣税

(甲) 特別税

(乙) 附加税

第二、市税

(甲) 特別税及ヒ府縣特別税附加税

(乙) 國税附加税

第三、町村税

附屬 第五編 收入編

三七、〇五七、〇二二

一五、四一〇、一三五

二一、六四六、八七七

六、〇六五、三三四

三、九一二、一八〇

二、一三三、一五四

三三、二九七、〇二六

五二一

第三節 地方自治 第五節 地方自治 第三節 國稅及地方稅
 (甲) 特別税及市町村特別税附加税
 (乙) 國稅附加税

今之ヲ各地方稅總額ニ對シテ百分率ヲ求メハ次ノ如シ

	府	縣	市	町	村
特別税	四二弱		六五弱		六七弱
附加税	五八強		三五強		三三強
總計	一〇〇		一〇〇		一〇〇

乃チ地方團體ニ在リテハ府縣稅ハ特別税ノ比率總額ノ半ニ達セサルモ市稅町村稅ニ至リテハ其行政區畫ノ狹ク中央政府ニ遠カルニ從ヒ特別税ノ比率大ニシテ約七割ヲ占ムルニ至ルヲ見ルヘシ
 附加税及ヒ特別税ノ課稅權ノ範圍限界ニ付テハ現行法ハ附加税ニ對シテハ附加スヘキ租稅ノ種目及ヒ其附加稅率ノ最高限度ヲ定メ法律勅令中別段ノ規定又ハ各自其監督官廳ノ許可ヲ要件トシテ指定以外ノ租稅ニ對スル附加及ヒ最高限度

外ノ附加ヲ爲スコトヲ許シ(府縣制第百三十四條、市制第百二十六條、郡制第百三十二條、町制第百三十三條、村制第百三十四條)特別税ニ對シテハ府縣稅ハ戶數制營業稅及ヒ雜種稅ノ三種ニ限定シ營業稅ニハ商工業ノ二種、雜種稅ニハ十三種ノ課稅物件ノ種目ヲ制限的ニ列舉シ其種目ノ取捨、稅額ノ査定等ニ付テハ單々中央官廳ニ報告スルノ義務ヲ負ヘシメ尙キ政府ノ裁可ヲ條件トシテ指定以外ノ特別ノ租稅ヲ設定スルコトヲ得ルコトト爲ヒ(明治十三年四月第十號勅令、同月第十號府縣制第百三十三條、郡制第百三十二條、町制第百三十三條、村制第百三十四條)
 市町村稅ハ市制第九十條、町村制第九十條ニ於テ市町村稅トシテ附加シ得ヘキ稅目ハ國稅、府縣稅ノ附加税及ヒ直接又ハ間接ノ特別税ナルコトヲ規定シ特別税ニ關スル規定ハ市條例又ハ町村條例ニ規定スルコトヲ要シ此等條例ノ設定及ヒ變更、特別税ノ新設増額及ヒ變更ハ中央官廳ノ許可ヲ受タルコトヲ條件ト爲セリ(市制第百二十一條、町制第百二十二條、村制第百二十三條)蓋シ行政ノ分權ト政治ノ集權トハ互ニ反對ノ方向ニ進ムモノナルヲ以テ分權其度ヲ失スレハ政治ノ統一ヲ期スルニ難ク中央官廳ノ監督制限其度ヲ失スレハ自治ノ本質ヲ減却スルニ至ルヘシ故ニ課稅權ニ對スル制限即チ租稅ノ種類數額及ヒ其適用ニ對スル制限ノ程度ハ最も重要ナル

事項ニシテ各國ノ地方經濟政治思想ノ狀況ニ相應シテ最モ慎重ノ攻究ヲ爲サス
シハアラサルナリ

第二款 特別税ノ特質

租税ノ原則ニ背馳セサル範圍内ニ於テハ租税制度ノ單純ヲ期スヘキハ固ヨリ言
テ俟タサル所ナリ從テ徒ニ特別税ノ種類ヲ増設スルハ租税行政ノ本旨ニ反ス
ルモノナリ然レトモ私見ニ依レハ特別税ナルモノノ性質ハ一方ニ於テハ他國
税ノ餘額ヲ使スヨト能ハサルト共ニ又絕對ニ之ヲ廢スヘカラサルモノアリ是レ
特別税ノ特質トシテ茲ニ述ヘントスル所ニシテ余ハ前者ヲ稱シテ特別税ノ消極
的性質ト云ヒ後者ヲ稱シテ特別税ノ積極的性質ト云フヘシ此特別税ノ消極的
質トハ特別税ノ税目ニハ消極的ノ境界ヲ有スルコトヲ云ヒ其原因ハ主トシテ特
別税カ限定セラレタル範圍内ニ限リテ徵收セラルルニ基因シ積極的性質トハ或
種類ノ課税ヲ支辨スルカ爲メニ積極ニ特別税ヲ必要トスルコトヲ云ヒ其原因ハ
主トシテ特別税カ限定セラレタル範圍内ノ經費ニ對シテ支辨セラルルニ基因ス

ルモノナリ

第一項 特別税ノ消極的特質

特別税カ消極的ノ境界ヲ有シテ各種ノ租税中特別税ト爲ス能ハサルモノ又ハ爲ス
コトヲ不便不利ト爲スモノアルハ主トシテ其賦課徵收ノ地域カ一行政區劃内ニ
限定セラレルニ拘ハラス其課税物件タル人或ハ物ノ所在或ハ事實ノ發生消滅カ
其地域内ニ確定セラレルニ原由スルモノナリ換言スレハ國際間ニ於テ生スルカ如
キ積極及ヒ消極ノ課税ノ衝突ハ行政區劃間ニ於テハ最モ廣ク多ク且最モ複雑ニ
發生スルニ原因スルモノナリ故ニ茲ニ其消極的ノ境界ヲ明カニスル爲メ特別税ト
爲スヘカラサル重モナル租税ニ付キ一言スル所アルヘシ
地方關稅ノ如キハ國際關稅ニ比シ移轉貨財ノ種類複雜ニシテ移轉ノ方法度數モ
亦不規則ヲ極メ移轉ノ通路モ著シク複雜ナルヘキヲ以テ徵收費用多キニ過キ純
收入少ナク一方ニハ地方貨財ノ生産交易ヲ阻害スルコト著シク大ナルヘキハ疑
ヲ容レサル所ニシテ有名ナル獨逸ノ關稅同盟ノ歴史ノ如キハ此理由ヲ證明スル

少ナシト爲ササルナリ蓋シ國家ノ自存又ハ法治ニ屬スル行動ノ如キハ一國ノ生存ニ關スル行政ニ屬シ之カ經費ハ全國一般ヨリ納付スヘキモノナルモ内治ノ目的ニ出ツルモノニ至リテハ其事項ノ經濟的物質的ナルニ從ヒテ直接ニ人民ニ對スル利害關係ノ密接ヲ來スモノナルヲ以テ所謂利益交換ノ觀念一層強キテ加ヘ漸次手数料ト其形式實質共ニ相近通スルニ至ルモノナリ例ヘハ地方稅中ニ在リテモ汲水稅掃除稅點燈稅道路稅等ノ類ニ至リテハ(直接消費稅ノ地方稅ト爲スヘキ理由ハステアール氏財政學第四)或程度マテニ於テ相互提供ノ原則ノ適用ヲ見ルニ至ルモノナリ之ヲ我地方制度ニ徵スル府縣制第一百一條市制第九十一條ニ於テハ府縣郡ノ一部ニ對シ殊ニ利益アル事件ニ關シテ內務大臣ノ定ムル所ニ依リ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨ヲ規定シ又府縣制第一百二十二條及ヒ市制第九十二條ニハ府縣郡ノ一部ノ地域又ハ一部ノ公共團體又ハ一部ノ納稅者ニ對シ夫役現品ノ稅課ヲ爲スコトヲ得ヘキ旨ヲ規定シ(府縣制第一百二十三條)又市制第一百二十三條第七項及ヒ町村制第二百二十七條第七項ニハ國稅府縣稅ノ附加稅ハ府縣參事會又ハ郡參事會ノ許可ヲ條件トシテ不均一ノ稅率ヲ以テ徵收スルコトヲ得ヘキ旨ヲ規定シ尙

*市制第九十九條及ヒ町村制第九十九條第一項第二項ニハ數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修繕及ヒ保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課スヘシ市又ハ町村内ノ一部ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其部内ニ住居シ若クハ滞在シ又土地家屋ヲ所有シ又ハ行商以外ノ營業ヲ爲ス者ニ於テ其修繕及ヒ保存ノ費用ヲ負擔スヘシ(以下略之)トノ規定ノ下ニ於テ特別ノ目的ノ爲メニ徵收スル租稅ヲ認メタリ是レ所謂負擔稅ト稱セラルルモノニシテ前ニ手数料ノ觀念ノ下ニ於テ論究セル所ナリ

以上述フル所ニ依リ特別稅ハ地方行政ノ事務ノ性質上明カニ積極的ノ限界ヲ有スルヲ見ルヘシ即チ市町村ノ特別稅ノ如キハ府縣ノ特別稅ニ比シテ積極的性質一層著シク殊ニ限地稅負擔稅ノ如キニ至リテハ其特質一層大ニシテ地方稅カ附加稅ト特別稅ノ二稅ヲ併用スル所以ノ理又明カナルヘキナリ(前數百分)

第六章 租税ノ負擔

第一節 負擔ノ免除及ヒ消滅

租税ノ負擔ハ租税問題ノ基礎ト爲ルヘキモノニシテ租税負擔ノ所在カ決定セラ
 ルルニアラサレハ以テ所謂納税力ニ應シテ徵收スヘシトノ租税根本ノ觀念ヲ判
 定スルコトヲ得ス故ニ租税負擔ノ問題ハ租税ノ税目及ヒ課税物件ノ選擇税率ノ
 算定、免稅輕稅ノ處分、累進税率ノ賦課課稅ノ積極消極ノ衝突其他總テ租税立法及
 ヒ行政ニ關スル萬般ノ根柢ヲ爲スモノニシテ特ニ間接稅直接稅ノ問題ト最モ密
 接ナル關係ヲ有スルモノナリ租税ノ負擔問題ニ付テ第一ニ注意スヘキ論點ハ等
 シク納税力ヲ有スルモノニシテ負擔ヲ免カレ又負擔ノ免除ヲ受タルモノト負擔
 ヲ受ケテ負擔其モノヲ消滅スルモノノ別アルコト是ナリ負擔ノ免除ニハ事實上
 又ハ法律上免稅ノ特權ニ依リテ他動的ニ負擔ノ全部又ハ一部カ免除セラレルコ
 トアリ或ハ詐欺ノ申告財產ノ隱蔽秘密ノ賣買等不法ノ手段ニ依リテ自動的ニ負
 擔ノ全部又ハ一部ヲ免カルルコトアリ負擔ノ消滅ハ生産費ノ節略ニ依リテ消滅

スルコトアリ生産貨財ノ品質ヲ下シ數量ヲ減スルコトニ依リテ消滅スルコトアリ
 免除ト消滅トハ共ニ被稅者又ハ被稅者タルヘキ者ヨリ觀察スレハ負擔ノ全部
 又ハ一部ニ對シテ共ニ苦痛ヲ感スルコトナク全ク負擔ナキト同一ノ結果ヲ生ス
 ヘキ點ニ於テ相同シキモ課稅者ヨリ觀察スレハ一ハ故意ニ負擔ヲ課セス又ハ事
 實ニ於テ負擔ヲ課スルコト能ハサルモノニシテ一ハ負擔ヲ課スルモノナリ從テ
 免除ノ場合ハ租税一般ノ原則及ヒ平等ノ原則ニ背反スルモノニシテ立法及ヒ行
 政ノ改正ニ依リテ之カ弊害ヲ除却セスンハアラス之ニ反シテ消滅ノ場合ハ國民
 カ租税ノ負擔ヲ輕減セントスル動念ニ基ク適法ノ行爲ニシテ決シテ之ヲ抑制ス
 ヘカラサルノミナラス事口進テ所謂生産費ノ節略ニ付テ負擔ノ消滅ヲ望マス
 ハアラス是レ國家カ租税ヲ賦課スルハ收入ノ獲得ヲ目的トシ國民ニ苦痛ヲ與フ
 ルヲ目的ト爲スニアラサルニ依ル當然ノ結果ニシテ少ナクトモ其消滅ニ歸シタ
 ル負擔額丈ハ新ニ國民ノ納税力ニ於テ餘裕ヲ生セルモノト見ルコトヲ得ヘケレ
 ハナリ生産貨財ノ品質ヲ下シ又ハ數量ヲ減スルニ因リテ負擔ノ消滅ヲ來ス場合
 ハ少ナクトモ財政上最モ忌ムヘキ現象ニシテ唯政治上稀少ノ場合ニ於テ之カ例

外ヲ見ルニ過キサルモノナリ生産費ノ節約ニ依ル場合トハ生産力ノ改良發達ヲ意味スルモノニシテ同一ノ貨財ハ從來ヨリモ少キ努力ニ依リテ生産セラレルコトヲ謂フ但茲ニ負擔ノ消滅ト稱スルハ其負擔ニ對スル直接ノ消滅ヲ指スモノニシテ例ヘハ酒造業者カ酒造方法ノ改良其他酒造費ヲ節約シ營業者カ其營業方法ノ改良ヲ爲スカ如キ場合ヲ意味スルモノニシテ酒造家又ハ營業者カ租税ノ負擔ヲ避クルカ爲メ一方ニ於テ其酒造又ハ營業以外ノ支出ヲ節畧スルカ如キ場合ヲ包含スルモノニ非ス從テ生産費ノ節略ニ依ル消滅ハ通常小企業者ヨリハ大企業者ニ於テ最モ行ハレ易キモノナリトス負擔ノ消滅ノ場合ヲ除ケハ租税ノ負擔ハ或ハ在來ノ收支ノ適合ヲ維持スルカ爲メ支出ノ節減ヲ爲スカ收入ノ増加ヲ圖ルカ或ハ新ニ支出額ノ増加ニ依リテ之カ負擔ヲ受ケスンハ非ス是レ一般ニ生スル場合ニシテ普通學者カ租税ノ負擔問題ニ付キ特ニ負擔ノ所在ニ付テノミ研究ヲ來レル所以ナリ

第二節 負擔ノ停止及ヒ轉嫁

租税ノ負擔カ歸着シテ他人ニ轉嫁スルコトナキトキハ之ヲ租税負擔ノ停止ト云フ納税者ノ下ニ止マルトキ換言スレハ納税者ト負税者カ同一人ニ歸セルトキハ之ヲ納税者ノ停止又ハ不轉嫁ノ停止ト云フ納税者以外ノ下ニ停止シタルトキハ納税者以外ノ停止又ハ轉嫁ノ停止ト云フ租税ノ負擔カ納税者ト納税者以外ノ者トノ間又ハ納税者以外ノ者ノ相互間ニ於テ移轉スルトキハ之ヲ租税負擔ノ轉嫁ト云フ又租税負擔ノ一部分カ停止シ一部分カ轉嫁セルトキハ之ヲ負擔ノ分擔ト云フ而シテ此等三者ノ場合ハ又各負擔ノ一部分ノ消滅ト相伴フテ發生スルコトアルハミナラス負擔ノ轉嫁カ漸次序ヲ逐フテ汎ク轉嫁スルトキハ特ニ之ヲ租税負擔ノ波及ト稱スルコトアリ

租税負擔ノ納税者ノ停止ニハ豫期ノ停止ト豫期セサル停止トノ別アリ豫期ノ停止トハ立法者カ負擔ノ停止ヲ豫期セル租税即チ直接税カ豫期ノ如ク轉嫁セスシテ直チニ納税者ノ下ニ停止スル場合ニシテ豫期セサル停止トハ立法者カ負擔ノ轉嫁ヲ豫期セサル場合即チ間接税カ豫期ニ反シテ直チニ逆戻シ停止セル場合ヲ謂フ

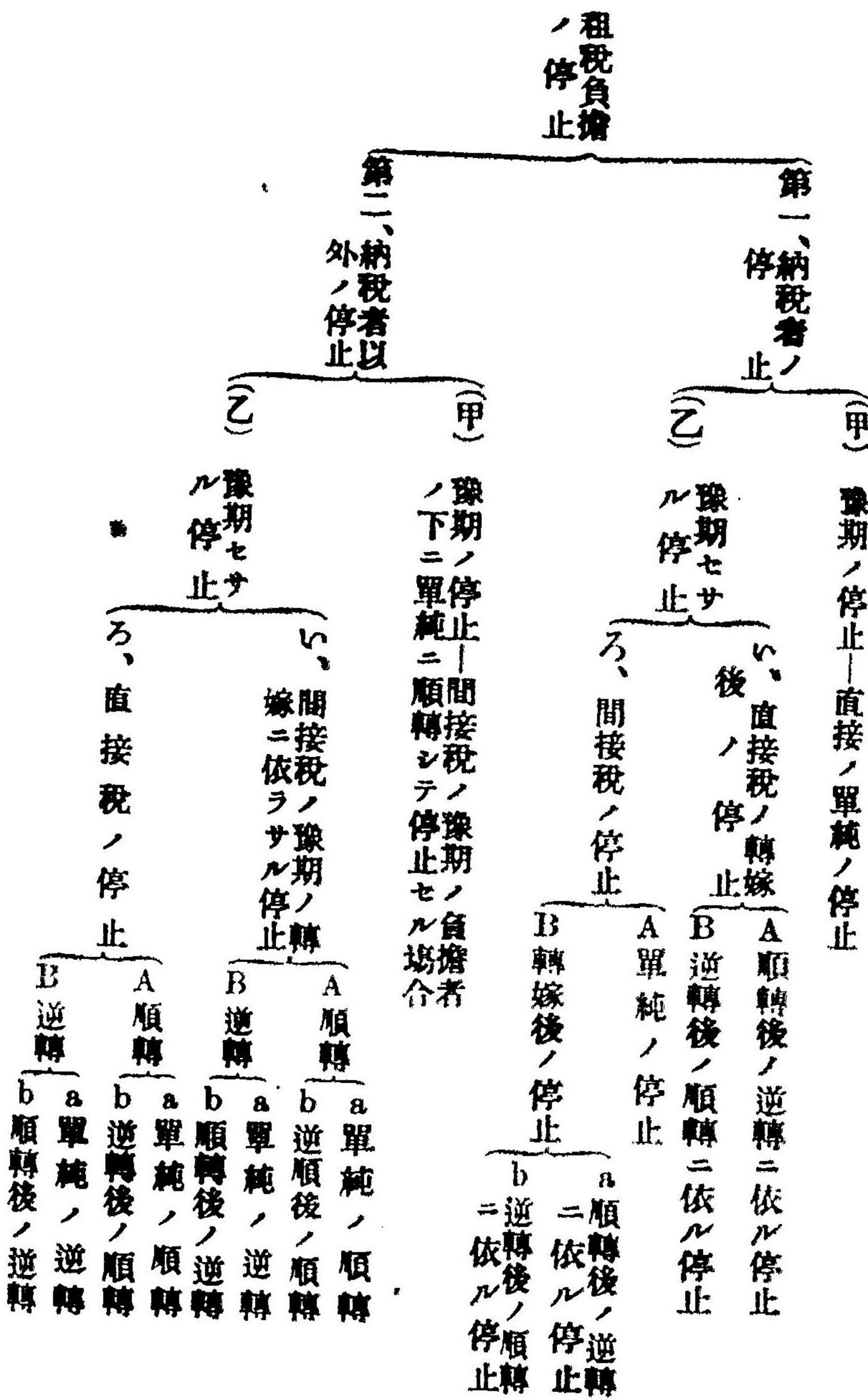
租税負擔ノ納税者以外ノ停止ニモ亦豫期ノ停止ト豫期セサル停止ト別アリ豫期ノ停止トハ立法者カ負擔ノ轉嫁ニ因リテ豫期シタル納税者以外ノ被税者ニ負擔カ停止シタル場合ヲ謂ヒ豫期セサル停止トハ直接税カ納税者以外ノ下ニ停止シタル場合及ヒ間接税カ當初逆轉シテ後順轉シ又ハ豫期ノ被税者ヲ超エテ順轉シテ後逆轉シ豫期ノ被税者ノ下ニ停止シタル場合ヲ謂フ

租税負擔ノ轉嫁ニハ前轉及ヒ後轉ノ別アリ負擔ノ前轉トハ納税者ヨリ順次後者ニ負擔ヲ移轉スルモノニシテ租税カ供給者ヨリ需要者へ課税物品ノ生産者ヨリ販賣者へ販賣者ヨリ消費者へ企業者ヨリ其得意先キ又ハ労働者へ移轉セラルル場合ノ如キヲ總稱スルモノニシテ又負擔ノ順轉ト稱セラル負擔ノ後轉トハ前轉ノ反對ノ方向ニ負擔ヲ移轉スルモノニシテ需要者ヨリ供給者へ消費者ヨリ販賣者へ販賣者ヨリ生産者へ得意先キ又ハ労働者ヨリ企業家へ移轉セラルル場合ノ如キヲ總稱スルモノニシテ又負擔ノ逆轉ト云フ租税ノ轉嫁ニハ又豫期ノ轉嫁ト豫期セサル轉嫁ト別アリ豫期ノ轉嫁トハ納税者以外ノ豫期ノ停止トナル場合ニ

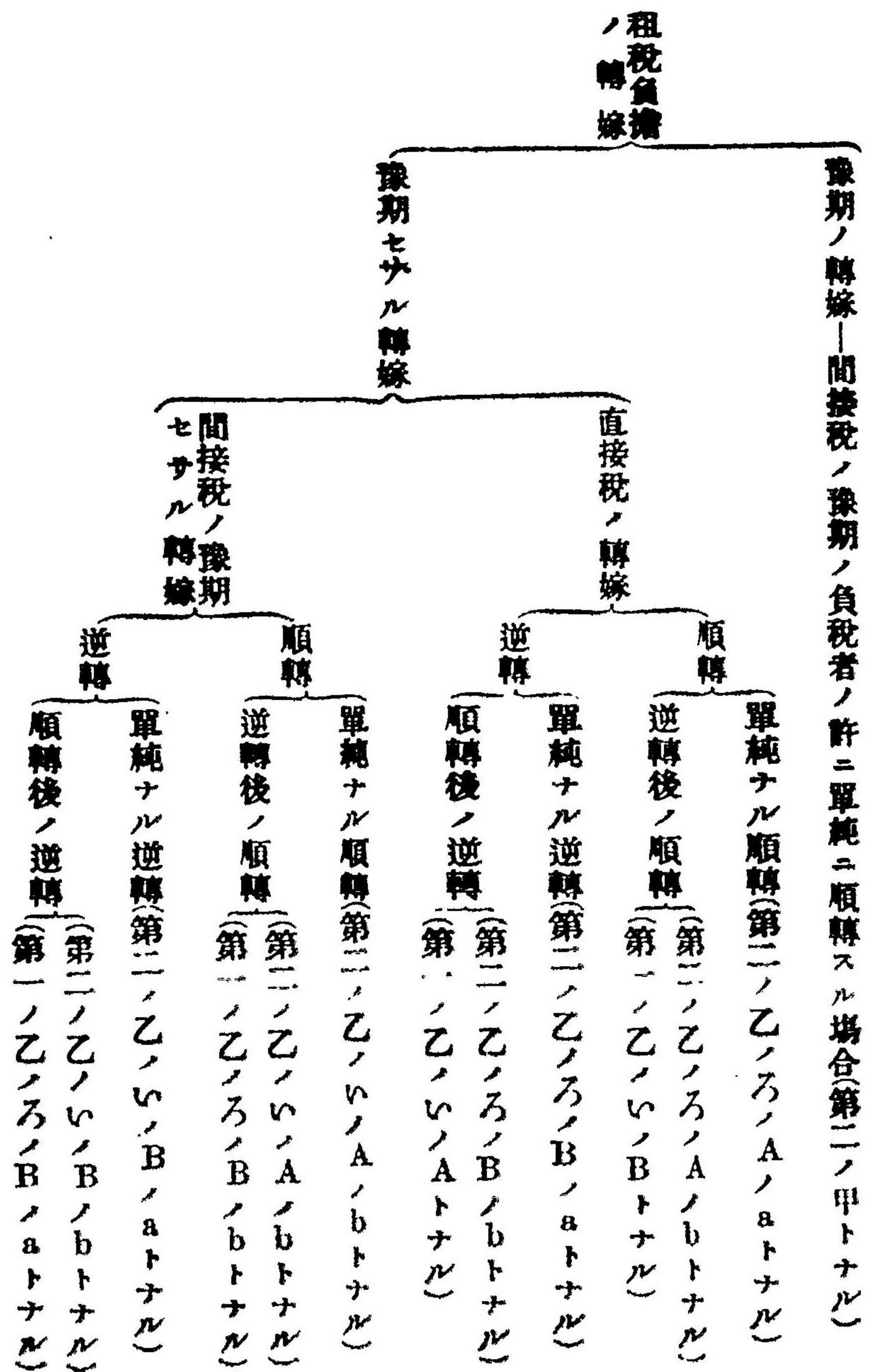
於ケル間接税ノ順轉ヲ謂ヒ豫期セサル轉嫁トハ直接税ニ在リテハ其凡テノ轉嫁即チ直接税ノ單純ナル順轉及ヒ逆轉又ハ順轉後ノ逆轉逆轉後ノ順轉ヲ總稱シ間接税ニ在リテハ納税者以外ノ豫期ノ轉嫁ニ基カサル凡テノ停止トナル場合ノ轉嫁ニシテ單純ナル逆轉及ヒ順轉後ノ逆轉逆轉後ノ順轉及ヒ豫期ノ轉嫁ト爲ラサル單純ナル順轉ヲ總稱スルモノナリ

負擔ノ停止及ヒ轉嫁ノ體様ニ付キテハ財政學者中周密ナル研究ヲ爲セル者少ク或ハ停止ト逆轉ヲ混同シ所謂一般ニ豫期ノ停止又ハ豫期ノ轉嫁ト稱セラルルモノノ中ニ尙ホ豫期セサル停止又ハ轉嫁アルコトヲ識別セサル者少ナカラス茲ニハ其用語ノ是非如何ハ之ヲ別問題トシテ租税負擔ノ停止及ヒ轉嫁ニ於テハ大略左表ノ如キ各種ノ體様カ理論上發生セラルヘキコトヲ信スルモノナリ但本書ニ所謂停止トハ上來述フル所ノ如ク轉嫁ノ場合ニ於ケル一時ノ停止ニ非スシテ終局ノ負擔ノ歸着ヲ意味スルモノナリトス

租税負擔ノ停止類別表



租税負擔ノ轉嫁類別表



第三節 負擔ノ轉嫁ニ關スル理論

負擔轉嫁ノ問題ハ直接税間接税ノ問題ト關聯シテ夙一財政學者ノ研究スル所トナレリ。ロツク、ペンダーランド等カ租税ハ如何ナル人ニ對シ如何ナル課税物件ニ付テ賦課徵收セラルルモ其負擔ハ究極地主ニ歸着ス。シト論シ延テ重農學派ノ土地純生産物論ト爲リ土地單一税ヲ唱フルニ至リシマトハ既ニ單稅論ノ沿革ヲ述ヘシトキニ於テ一言セル所ナリ其後アダムスミスハ負擔ハ所得ノ三分子即チ勞銀、利子及ヒ地代ノ何レカニ歸着スヘキモ主トシテ大部分ハ地代ニ轉嫁スヘキヲ論シリカルドールハ其地代税及ヒ一般ノ利潤税ヨリ各自主地及ヒ資本家ノ下ニ停止シ或格段ナル利潤税及ヒ物品税ニ限リテ消費者ヨリ轉嫁シ勞銀税及ヒ勞働者消費税ハ資本家ニ轉嫁スヘシト論シ其後ミルヘルド等負擔ノ轉嫁ニ付テ研究セル者枚擧ニ違アラヌ又カナアークネー、スタイン等ノ如キハ別ニ租税ノ平等波及論ヲ唱ヘ租税ハ結局純生産物ノ全體ニ歸着スルモノニシテ貨財ノ轉嫁ニ伴ヒ漸次取引者全體ニ波及スヘキヲ以テ租税ノ負擔ハ一定ノ時期ヲ經ルト共ニ全社會

ニ平等ニ波及スヘシト論シ或ハ租税ハ各人カ各其負擔ヲ免カレンカ爲メ互ニ他人ニ轉嫁セントスル競争ノ結果遂ニ真正ノ負擔者ヲ求メテ之ニ歸着スルニ至ルヘク所謂租税自然ノ歸着ニシテ最モ公平ノ原則ニ適合スルモノナルカ故ニ立法者ノ豫期ニ反スル場合ト雖モ決シテ忌ムヘキモノニ非スト論シ租税負擔問題ニ付テ樂天的ノ論決ヲ爲スモノアリ此等ノ論者ハ少ナクトモ租税ノ負擔カ人爲ニ依リテ其平等ノ歸着ヲ動スコト能ハサルモノト誤解シ又各自其轉嫁ヲ爲スニ至ル期間内ニ於テ各自其負擔ノ苦痛ヲ受クルコトヲ看過セルモノナリ負擔問題ニ付テハ之ヲ被稅者ヨリ見ルトキハ通常其負擔ノ轉嫁ニ付テ殆ト純粹ノ轉嫁ナルモノナシ一方ニ於テ或ハ負擔ノ一部カ消滅シ又ハ分擔セララルト共ニ一方ニ於テハ負擔ノ總額カ時ヲ追フテ増加セララルモノナリ即チ甲カ其負擔ヲ乙ニ轉嫁スル場合ニ於テハ必ス一定ノ期間ヲ要スハシ然ルニ此期間内ニ於テハ少ナクトモ甲ハ其負擔ノ一部ヲ分擔スヘク換言セハ其轉嫁スル期間内ニ於テハ尙ホ其負擔カ甲ノ下ニ存スルヲ以テ其期間内負擔額ニ應スル利息ハ損失ヲ受クルモノナリ故ニ負擔カ順次轉嫁セララルニ當リテハ其負擔ノ一部カ消滅

スルカ若クハ分擔セラルルニ非サレハ當初ノ納税時期ヨリ時日ヲ經過スルニ從
ヒ負擔ノ總額カ漸次増加スルモノト謂ハサルヘカラス彼ノ所謂租税平等波及説
ノ如キハ此原理ヲ知ラサルノ誤ニ歸スルモノニシテ余輩カ租税ヲ轉嫁セルトキ
ハ純粹ノ轉嫁少ナク負擔カ常ニ分擔セラルルヲ原則ト爲スヘシト論スル所以ナ
リ

租税負擔ノ問題ハ其全部又ハ一部ノ消滅停止及ヒ轉嫁ニ伴ヒテ最モ錯雜ヲ極メ
學者ノ研究ノ如キモ皆區區ニ分レ飯一スル所ナキヲ以テ先ツ抽象的ニ如何ナル
原因カ租税ノ轉嫁ヲ生スヘキカヲ概述シ以テ本節ヲ終ルヘシ

租税負擔轉嫁ノ原因ニ付テハ古來學說多岐ニ分ルルモコリン及ヒバスターナル
二氏ノ分類ハ比較的勢力ヲ有スルモノナリ今二氏ノ所說ヲ列舉スレハコリンハ
負擔ノ轉嫁ノ原因ヲ

- 一、負擔分配ノ不公平ニ對スル觀念
- 二、不公平ナク分配ヲ避ケントスル願望
- 三、第二ノ願望ヲ達シ得ヘキ金錢上ノ能力

ノ三者ト爲シバスターナルハ

- 一、運動力ノ存否
- 二、需要ノ原則
- 三、課税ノ原則
- 四、産業ノ組織及ヒ其分科
- 五、税額

ノ五者ト爲セリ共ニ本問題ニ對スル有力ナル學理的分類ナリトス
蓋シ負擔轉嫁ノ問題ニ關スル總テノ現象ニ通シテ立論ノ根柢ト爲ルヘキモノハ
利己心ナリ故ニ轉嫁ノ原因ハ常ニ其負擔ヲ免カレントスル動念ト其動念ヲ達ス
ル實力ニ歸ス而シテ第一ニ負擔ヲ免カレントスル動念ハ主トシテ次ノ二個ノ原
由ニ因リテ消長スルモノナリ

(甲) 負擔ノ輕重及ヒ不公平ニ對スル主觀的感覺

(乙) 負擔ノ伴フヘキ欲望ヲ満足セントスル願望ノ多少

甲ノ負擔ノ輕重及ヒ不公平ニ對スル主觀的感覺ハ主トシテ

- 一、賦課徵收ノ直接ト間接
- 二、賦課スル税目ノ多少
- 三、税率ノ輕重
- 四、賦課徵收ノ行政手續ノ繁簡

等ニ依リテ動カサレ乙ノ負擔ノ伴フヘキ欲望ヲ満足ヒントスル願望ノ多少ハ主トシテ

一、習慣力

二、徳義心

三、負擔ノ伴フヘキ欲望ノ満足ニ因リテ享クル利益ノ多少及ヒ其満足ノ必要ノ程度

四、負擔ノ伴フヘキ欲望ノ満足ヲ廢止スル難易

五、負擔ノ伴フヘキ欲望ニ代ルヘキ欲望ノ存在ノ有無及ヒ之カ満足ノ難易

等ニ依リテ動念スルモノナリ故ニ習慣力及ヒ徳義心ノ強キニ依リテ負擔ヲ免カレントスル動念ヲ減却スヘキコトハ世襲又ハ長期ノ間從事セル營業者地主勞働

者等ニ於テ常ニ見ル所ナリ又負擔ニ伴フヘキ欲望ノ満足ニ因リテ享クヘキ利益大ナルトキハ其負擔ヲ享クルモ尙ホ利益ノ餘殘ヲ見ルカ故ニ之カ負擔ニ甘ンスルハ收益多キ事業ニ於テ屢見ル所ナリ又負擔ノ伴フヘキ欲望ヲ廢止スル難易ハ負擔ノ轉嫁ニ重大ナル關係ヲ有スルモノナリ此場合ニハ他働的ニ巨額ノ固定資本ヲ投セル場合ノ如キ特定セル技能ニ依リテ報酬ヲ受クル場合ノ如ク在來ノ方法ノ變更カ收入ノ側面ニ於テ困難ナル場合ト生計ニ必要ナル物品ノ消費ノ場合ノ如キ之カ消費ノ廢止ハ支出ノ側面ニ於テ困難ナル場合トアリ故ニ古來土地其他固定資本カ負擔ノ轉着點トシテ土地單一稅或ハ財產單一稅ノ學說カ唱道セラレ近時尙ホ地主資本家等ハ他ノ負擔ノ轉嫁ヲ受クルモ自己ノ負擔ヲ他ニ轉嫁スルコトヲ得スト云フモ此趣旨ニ基クモノナリ又工業ノ發達ニ伴ヒ技術的ノ分業カ専門ノ勞働者ヲ驅リテ絕對ニ其事業ニ固着セシメ延テ資本家ニ對スル自由競争ヲ許ササルハ又此勞働者ノ負擔除却ノ動念ヲ弱ムルモノニ外ナラス奢侈稅ノ如キハ奢侈品ニ對スル欲望ノ廢止及ヒ節減ハ他ノ必需品ノ消費ノ場合ニ比シテ容易ナルヲ以テ一般ノ消費稅ハ奢侈稅ニ比シ比較的負擔除却ノ動念ニ乏シカル

ヘキコト言テ俟タス又負擔ノ伴フ欲望ニ代ルヘキ欲望ノ有無換言スレハ在來ノ欲望ヲ満足スヘキ性質カ獨占的ナリヤ否ヤハ其程度ニ應シテ之ニ對スル負擔除却ノ動念ニ逆比例スルモノナリ是レ土地家屋等ハ其供給ニ限リアルカ故ニ他ノ直接税ニ比シテ豫期セラレサル負擔ノ轉嫁ヲ爲スコト多キ所以ナリ

第二ニ富者カ貧者ニ勝テ智者カ愚者ニ先スルハ社會一般ノ現象ニシテ租税負擔ノ問題ニ於テモ其負擔ノ轉嫁ハ理論ノ是非負擔除却ノ動念ノ大小ノ如キハ事口第二ニ位シ常ニ強者カ弱者ニ實力ニ於テ其負擔ヲ移轉スルモノナリ夫ノ地主家屋所有者資本家營業家等ニ對スル直接税等ハ立法者ニ於テ之カ負擔ノ單純ノ停止ヲ豫期シ又理論上之カ轉嫁ヲ不可ト爲スモノナルモ事實ニ於テハ小作人借家人勞働者得意先等ノ多數ノ弱者ニ對シテ之カ負擔ヲ轉嫁スルハ普ク一般ニ認メラルル所ナリ近時累進税其他各種ノ租税政策ニ依リテ貧富ノ軋轢ヲ調和シ富ノ分配ノ平均ヲ圖ラントスル者輩出スルニ至リシハ又此等ノ現象ニ基クモノニ外ナラサルナリ

第四編 收支適合論

第一章 總論

第一節 收支ノ不適合

緒論

財政ノ要ハ出ルヲ計リテ入ルヲ制スルニ在リ隨テ財政ノ整理ニハ收入ト支出カ相平均シテ其間ニ過不及ナキコトヲ要ス故ニ收支ノ適合ヲ期シ財政ノ權衡ヲ保持セシニハ當局者ハ一定ノ時期ヲ畫シテ會計期ト爲シ其期間内ノ財政計畫ヲ立テ收入支出ノ種類及ヒ數額ヲ彙類區分シテ收支ノ平均ヲ保持スルニ必要ナル基礎ヲ確定スルコトヲ要ス此財政計畫ハ通常豫算ノ編成トシテ現ハルモノニシテ通常會計期間ヲ一箇年トシテ會計年度ト稱シ收入支出モ亦歲出歲入ト稱セラ

然レトモ複雑ナル國家ノ行政ハ將來ニ於ケル客觀的事情ノ變遷ニ伴ヒ固ヨリ單

純ナル理想ヲ以テ之ヲ律スヘカラス隨テ豫算ハ所期スルカ如ク收支ノ權衡ヲ正確ニ保持シ難ク或ハ歲計ニ剩餘ヲ生シ或ハ不足ヲ告クルコトヲ免レス此遠算ヲ少カラシメントスル積極的方法ハ豫算ノ編成ニシテ歲計論ニ屬シ其發生シタル遠算ヲ調和シ之ヲ救正スヘキ消極的方法ヲ研究スルハ收支適合論ノ目的ニシテ或ハ財政權衡論ト曰ヒ或ハ其救正方法ノ基礎ヨリ觀察シテ國家信用論ト曰ヒ或ハ其重ナル救正方法ノ名稱ヲ借リテ國債論ト稱ス然レトモ後ノ二者ハ其範圍ニ於テハ固ヨリ收支適合論ノ一部ニ屬スヘキコト言テ俟タサルナリ

註一、私人經濟ニ於テハ其收入ノ種類多クハ單一ニシテ其數額モ亦一定セルモノ多クノミナラス其一定ノ收入額ヲ限度トシテ便宜支出額ヲ比較的自由ニ斟酌シ得ヘキモノナルヲ以テ豫算ノ範圍ヲ來タヌコト少カルヘキモ公共經濟ニ於テハ其收入ノ種類複雜ニシテ官有財產ノ收入、官業ノ收入、手数料及ヒ租稅中稅費ニ依ル租稅收入(主トシテ間接稅ノ收入)ハ皆社會現象ノ變化ニ伴ヒテ増減シ財政家ニ於テ左右シ得ヘキ定額ノ收入ハ殆ト盡精ニ依ル租稅收入(主トシテ直接稅ノ收入)ノ一部ニ限ラレ(入頭稅、地租等ノ類ニシテ所得稅等ニ至リテハ其收入額ヲ豫定スルコト難シ)一方ニハ歲出ノ各款項ハ收入額ヲ限度トシテ自由ノ斟酌ヲ許スコト無ク常ニ歲出ノ臨時増加ヲ要スヘキヲ以テ公共經濟ニ於テ豫算ト現計ト不適合ヲ來タスヘキハ其本然ノ性質ニ屬スシモノ

ナリトス

第一款 剩餘ヲ生スル場合

歲計ニ剩餘ヲ生セル場合ハ實ニ事實トシテ種ニ生スルモノナルノミナラス此カ救正ノ方法モ亦甚タ容易ナルモノナリトス若シ其剩餘ニシテ比較的恒久ノ性質ヲ有スルトキハ或ハ租稅中比較的惡稅ト認ムヘキモノヲ廢シ又ハ重稅ノ稅率ヲ低減シ經常ノ收入ヲ減少シテ民力ノ休養ヲ圖ルヘク若シ其剩餘ニシテ一時ノ性質ヲ有スルトキハ其額ノ多少ニ應シテ或ハ公債ノ償還、民有財產ノ買上、官業ノ設備擴張等臨時ノ積極又ハ消極ノ支途ニ充ツルコトヲ得ヘシ

公共經濟ニ於ケル歲計ノ不足ハ又一方ニ於テハ或程度迄ハ豫算ノ編成ニ際シ歲出ヲ高ク見積ルコトニ依リ之ヲ避クルコトヲ得ヘシ隨テ不足財政策ト剩餘財政策ト何レカ理論實際ニ協ヘルヤハ又財政上ノ一問題トリ然レトモ財政ノ要ハ收支ノ適合ニ在リテ剩餘多キニ過クルハ不足多キニ過クルト同シク又非難ヲ免レサルハ總論財政ノ特質ニ於テ既ニ論述セル所ナリ而シテ不足ノ臨時ノ支出ニ基

ク場合ハ毫モ財政上咎ムヘカラサルニ反シ經常收入ノ剩餘ノ多キニ失スル場合ハ少クトモ財政調理ニ對スル非議ヲ免ルルコト能ハサルヘシ
「アダムス氏ハ左ノ三點ヲ以テ剩餘財政政策ヲ絕對ニ非認セリ

第一 歲計ノ不足ハ國民ヲシテ憲法上有スル財政監督ノ大權ノ行使ヲ慎重ナラ

シメ歲入ノ剩餘ハ財政ノ監督ヲ忽ニシ年年過大ノ支出ヲ來タスニ至ルハ千八

百六十年以降千八百八十二年ニ至ル合衆國ノ財政史ニ徴シテ明カナル所ナリ

第二 歲計ノ不足ハ議會ヲシテ該年度ノ支出豫算ヲ再ヒ審査檢閲セシメ延テ翌

年度ノ豫算ノ議定ニ慎重ナル注意ヲ與フルニ至ラシムルモノナリ

第三 歲計ノ剩餘ハ民間ニ於ケル通貨ノ流通額ヲ減少シ産業社會ヲ動搖セシム

ルノ憂アリ但シ其剩餘ヲ公債ノ償還ニ充ツルトキハ市價ニ影響ヲ及ホスコト

少カルヘキモ若シ公債ノ償還ニ充ツルコトナキトキハ通貨ノ減少縱令久シキ

ニ亘ラサルモ起業家ハ通貨減少ノ影響未嘗一般ノ市價ニ及ハサルニ先チ已ニ

之ニ依リテ生スル弊害ヲ感スルニ至ルヘシ

第二款 不足ヲ生スル場合

歲計ニ不足ヲ生スル場合ハ事實トシテ最モ生シ易ク且之カ救正ノ方法又困難ニシテ財政上最モ重要ナル事項ニ屬シ其不足額巨大ナルトキハ其措置ノ如何ハ財政ノ紊亂ヲ來シテ積年ノ累ヲ醸成シ甚キハ一國ノ生存ヲ危クスルニ至ルコト古來其例乏シト爲サス今不足ヲ生スル場合ヲ其性質ヨリ分類スレハ之ヲ次ノ二者ニ分ツコトヲ得ヘシ

第一 金庫上ノ不足

第二 真正ノ不足

第一 金庫上ノ不足トハ單ニ金庫ノ上ニ於テ或時期ヲ限リ不足ヲ來スモノニシテ會計年度ノ末ニ於テハ結局違算ヲ生スルコトナキモ一時收支ノ時期又ハ數額カ豫期スル所ニ違フヨリ生スル一時ノ不足ナリ即チ會計年度内ニ於テ甲收入ノ時期カ豫定ノ時期ヨリ遅ルルカ乙支出ノ時期カ豫定ノ時期ヨリ早キカ丙豫定ノ時期ニ於ケル收入額カ豫定額ヨリ少キカ丁豫定ノ時期ニ於ケル支出額カ豫定

額、ヨリ多キニ基因スルモノニシテ此場合ハ所謂表面上ノ不足又ハ假面上ノ不足ト稱セラル我國ノ租稅收入ニ於テハ一定ノ時期ヲ限ラヌシテ時時ノ收入アル間接稅ヲ以テ歳入ノ大部分ヲ占ムル英國等ト異ナリ政府收入ノ大部ハ直接稅ニ依ルヲ以テ收入ノ時期一定シ金庫上ノ不足ヲ生スル場合比較的多シ而シテ之カ救正策トシテ租稅ノ納期ヲ改正シテ之カ不足ヲ生セサシムルコトハ納期其モノカ被稅者ト課稅物件ノ關係及ヒ性質ヨリ財務行政上容易ニ變更ヲ許スヘキモノニ非サルノミナラス一方ニ納期ヲ改正スルトモ支出ノ時期又豫定スヘカラサルモノ多キカ故之ヲ望ムヘカラサルヲ以テ政府ハ其信用ヲ利用シテ一時資本ヲ借入ルルヲ常トス其多クハ中央銀行ノ力ヲ借ルモノニシテ短期ノ借入又ハ大藏省證券ノ發行等ニ依リテ之カ一時ノ不適合ヲ救正スルヲ例トス其大藏省カ責ヲ負フテ國家ノ信用ヲ利用シ未タ政府全體ニ關係ヲ有セサル點ニ於テ學者或ハ財政信用又ハ財政上ノ公債ト曰ヒ又財政官衙カ政府ノ費用ノ融通ヲ營ムモノト觀テ營業的信用又ハ營業的公債ト稱スルコトアリ其細論ニ至リテハ別ニ公債分類ノ章ニ於テ述フル所アルヘシ

第二 眞正ノ不足トハ會計年度ニ於テ收入ノ支出ヲ充タスルニ足ラサル場合ニシテ或ハ支出額豫定額ヨリ多キニ過クルカ爲メ之カ不足ヲ來シ或ハ收入額豫定額ヨリ少キニ過クルカ爲メ之カ不足ヲ來スモノニシテ事實ニ於テ前者ハ最も多ク發生シ其不足額又著シク巨額ニ上ルヲ例ト爲スモノナリ而シテ其支出超過ヲ來ス重ナル原由ハ戰亂天災等ノ緊急ナル事變ト政治經濟上ノ起業トノ二種ニシテ前者ノ不足ヲ充タス爲メ起債スル公債ハ通常消費公債ト稱シ後者ノ不足ヲ充タス爲メ起債スル公債ハ通常起業公債ト稱セラル

註一、學者又別ニ經濟上ノ不足ナルモノヲ區クル者アリ所謂經濟上ノ不足トハ政府カ經營スル所ノ有形無形ノ生産ハ國民カ支出スル所ノ經濟上ノ價值ニ比シテ及ハサルヲ謂ヒ結局政府カ國民ニ賦課セル額ニ比シテ其效果ノ小ナルヲ指スモノナリ故ニ一方ニハ國家ハ苛重ノ負擔ヲ課シテ一方ニハ其收入ヲ不生産的ニ支出スルトキハ遂ニ民力ノ疲弊ヲ來シ眞正ノ不足又ハ之ニ伴フニ至ルヘント言フニ在リ私見ヲ以テスレハ經濟上ノ不足トハ政府ノ經費ノ生産的ナルヤ不生産的ナルヤト云フコトヲ半面ヨリ觀タル結果ニシテ唯一ハ結果ヨリ一ハ原因ヨリ觀タルモノナリ故ニ理論上不生産的經費ハ總令收支ノ支出ニ超過スルモ結局經濟上ノ不足ヲ生セリト謂フコトナリ妨ケサルト共ニ生産的經費ハ總令支出ノ收入ニ超過スルアルモ結局經濟上ノ不足ヲ生セ

レト謂フコトヲ得サルナリ要之此用語ハ學科ノ上ヨリ觀ルモ必要少キト共ニ事實ニ於テハ此カ有無程度ノ如何ハ之ヲ付度スルニ由ナキモナルヲ以テ此ニ之ヲ認メス

註二、一時限リノ支出ニ屬スヘキモノニシテ而モ何レノ會計年度ニ通スルモ規則正シク或種類ノ行政事務ニ附帶シテ其年要スヘキ經費モ大體ニ於テ之ヲ豫算ニ見積ルコトヲ得而モ其額ノ少額ニ止マルモノアリ例ヘハ公用家屋道路等公有物ノ設備修繕ニ要スル經費ノ如シ此等ハ個個獨立ニ觀レハ又一時限リノ經費ト觀ルコトヲ得ヘキ

モ財政上之ヲ經常不足ト觀ルヲ正當ト爲スモノナリ(經費論經常費臨時費參照)

眞正ノ不足ニ對スル救正ノ方法ハ金庫上ノ不足ノ場合ニ比シ著シク困難ナルモノニシテ其不足カ恒久ハ性質ヲ有スルモハナルトキハ此ヲ填補スルニ臨時ノ收入ヲ以テシ苟且偷安一時ヲ塗抹スルカ如キハ財政學ノ原則ニ違反スルモノニシテ益、財政ノ紊亂ヲ助長シ遂ニ收拾スルコト能ハサル一至ルモノナリ故ニ此カ救正方法トシテ消極的ニハ成ルヘク經常支出ノ節約ヲ行ヒテ民力ノ充實ヲ計リ積極的ニハ其不足ノ經費ヲ支辨スルカ爲メ官有財産又ハ官業ノ改良擴張ヲ計リ積數稅租稅ノ改正ヲ期スル等又經常收入ノ増加ニ依ラマンハアラス而シテ理論ニ於テモ亦實際ニ於テモ主トシテ取ルヘキ方法ハ新稅ヲ起スカ又ハ在來ノ租稅ノ稅率ヲ高ムルニ存シ隨テ此等ノ問題ハ租稅政策ノ範圍一屬スルヲ常ト爲スモノ

ナリ

眞正ノ不足ニシテ一時ノ性質ヲ有スルモノ即チ臨時ノ不足ト稱セラレモノハ交通機關ノ設備軍備ノ擴張編制其他司法行政立法等ノ大改革等ニ伴ヒテ發生スルコト多ク殊ニ天變地異交戰擾亂等絕對ニ豫期スヘカラサル支出ニシテ之ニ要スヘキ經費ノ支辨ニ時日ノ餘裕ヲ許ササルモノ在リ此等ノ場合ニ在リテハ分捕品、獻納金又ハ剩餘金ノ繰出ニ依ルカ如キハ念ク偶然姑息ノ策ニシテ之カ救正ノ方法トシテ認ムヘキモノハ要スルニ次ノ四種アルニ過カス

- 第一 官有財産ノ拂下
- 第二 非常準備法
- 第三 租稅ノ新設又ハ稅率ノ増加
- 第四 公債ノ借入又ハ募集

第二節 臨時ノ不足ニ對スル救正方法

第一款 官有財産ノ拂下

官有財産ノ重ナルモノハ土地ト森林ナリ而シテ土地ハ其經營ノ方法カ直接管理法タルト委任管理法タルト將タ小作法タルトヲ問ハス現時一般ニ政府ノ經營ヲ以テ不得策ト爲スヲ通説ト爲シ又一方ニハ森林ハ治水其他ノ理由ヨリ彼ノ保安林ノ如キ政府ノ手ニ買收シテ猶ホ之カ經營ノ衝ニ當ルヘキモノアルコトハ官有財産ノ章ニ於テ詳論セル所ナリ隨テ現時一般ニ非常ノ支出ヲ辨スルニ足ルヘキ財産ナキカ爲メ絕對ニ不能ナルヲ例ト爲シ縱令事實此等財産ノ餘裕アリトスルモ田地森林ノ類ハ之カ移轉融通ニ不便ナルヲ以テ一方ニハ巨額ノ資ヲ投シテ之ヲ購入スル者甚タ稀ナルヘク一方ニハ其財産ノ巨多ニシテ且拂下ノ必要大ナルカ爲メ其拂下價格ハ必ス相當代價ヲ下ルコト著シカルヘク加フルニ事實急速ノ需要ニ應スルニ難キヲ以テ又相對ニ不能ナルモノナリトス故ニ非常支出後ノ財政整理ノ一方法トシテハ別段非常費支辨ノ方法トシテ理論上積極論ヲ主張スル

者ナク又現時實際ニ此方法ヲ取ルコトナシ

第二款 非常準備法

非常準備法トハ居常貨幣其他ノ貨財ヲ蓄積シテ一朝非常ノ需要アルニ際シ之ニ應スルノ準備ニシテ信川經濟ノ行ハレサリシ時代國家觀念ノ未タ發達セサリシ時代換言スレハ租稅ノ徵收公債ノ募集ノ如キ仍ホ充分ニ行ハレサリシ時代ニ在リテハ一朝有事ノ際非常準備法ノ設備ナキニ於テハ他ニ之ニ應スヘキ方法存セサリシヲ以テ其體様ニ於テハ時ト處ニ依リ多少其趣ヲ異ニスルアルモ何レモ皆斯法ノ精神ヲ取ラサルモノナカリシモノノ如シ

註一、按スルニ希臘時代ニ在リテハ亞典政府ハ波斯戰爭(紀元前四百九十年)ト「ペロポネサス」戰爭(紀元前四百四十六年)トノ間ニ一萬「タレント」(「タレント」ハ凡ソ一千一百八十圓餘ニ當ル)ヲ貯蓄シ波斯ニ於テモ「シラス」大王以後鉅萬ノ軍用金ヲ蓄積シ歷山大王波斯征討ノ際之ヲ略取シ爾後「マセドニア」帝國ノ準備金ノ殘部ハ又羅馬ノ將軍「ポロロス」エミリオスノ略取スル所ト爲レリ又羅馬時代ニ在リテハ「オウルム」ウイセシマリウムト稱シ奴隸ノ身受金ニ五分稅ヲ課シ其收入ハ屬邦ヨリ納ムル貢金、敵國ノ分捕品等ト併セテ「サトルン」ノ殿堂ニ蓄積シタリ其後「オーグスツス」「ダイベリアス」「ウエスパシア

「ノ」諸帝又非常準備金ヲ貯蓄シタリ佛國ニ在リテモ「フランク」時代「ミツテル、アルテル」ヲ遺シ歴代ノ諸王非常準備金ヲ貯蓄シ普魯西ニ在リテハ「フリードリッヒ」ヲ「ワルヘルム」八百七十萬「ターレル」ノ準備金有シ「フリードリッヒ」三世ノ朝ニハ擧ケテ此ヲ蕩盡セシモ爾後此ヨリ巨額ノ準備金見ルニ至レリ歴史家ノ説ニ據レハ六千乃至七千萬「ターレル」ニ上リタリシト云ヘリ東洋ニ在リテハ支那ハ歴代興亡盛衰常ナカリシト共ニ常ニ非常準備法ノ存セシハ史乘ノ證スル所ナリ我邦ニ在リテモ古代實物經濟時代ニ在リテハ政府ハ各種ノ官有財産ヲ以テ非常準備ニ充テテ又大寶令ノ頃ニハ別ニ義介ノ制アリ一位以下百姓ニ至ルマテ上上戸ハ二石、上ノ中戸ハ一石六斗等以下其間ナ九等ニ別テ粟又ハ其他ノ穀類ヲ田租ト共ニ納メシメ貯藏シテ凶歉ノ患ニ備ヘシメタリ其費途ノ一定シテ救恤行政ニ關聯スルモノナレトモ又非常準備法ノ精神ヲ取リシモノナリ降リテ豐臣秀吉カ巨額ノ金塊ヲ大坂城内ニ貯藏セシカ如キ德川家康カ金法馬ト稱スル分銅形ノ金塊ヲ造リ一代毎ニ一箇宛後世ニ遺サシムルコトヲ遺訓セシカ如キ又一種ノ非常準備法ヲ執レルモノト謂フヘキナリ

然レトモ方今信用經濟ノ發達セル經濟界ニ在リテハ資本ノ融通ノ便益又古代ノ比ニ非サルヲ以テ殆ト非常準備法ヲ取ルノ必要ナク各國又此制ヲ採用スル處ナシ唯歐洲ニ在リテハ普魯西及ヒ丁抹ニ於テ猶ホ斯法ノ存スル在リ即チ普魯西ニ在リテハ「フリードリッヒ」ウヰルヘルム以後歴代ノ君主巨額ノ準備金貯蓄シ一千八

百七十年ノ役佛國ト戰フテ巨額ノ償金ヲ得ルヤ其五十億「フラン」ノ内一億五千萬「フラン」ヲ割キテ此準備金ニ繰込ミ一千八百七十六年ノ統計ニ據レハ其總額一億一百萬弗ニ達シ而モ其内譯一千六百萬弗ハ外國ノ有價證券ヲ以テシ六千五百萬弗ハ自國ノ鐵道公債ヲ以テシ眞ニ非常準備ノ目的ヲ達シ得ヘキモノ即チ正金トシテ保存スル額ハ三千萬弗ニ過キスト云フ先年我政府モ日清戰爭ノ收容償金ノ殘額中費途ノ確定セサルモノ七千五百萬圓ヲ軍糧補充、教育、救恤等ノ基金ト爲シ一朝事變アレハ以テ戰爭準備金ニ充テント爲スモノノ如シ隨テ本論ハ既ニ學說實際共ニ大體消極説ニ一致セルモ茲ニ少シク論述スル所アルヘシ
 非常準備法ニ對スル消極説ノ大要ヲ述フレハ第一、政治上ヨリ觀察スレハ常ニ施政者ノ專斷放恣ヲ誘導シ濫川浪費ノ弊ニ陥リ易ク非常ノ支出ヲ填補スルニ足ルヘキ準備金ノ存在ハ一方ニハ不急ノ事業ヲ起シ又ハ無謀ノ戰端ヲ開ク等不生產業ニ費消スルノ機會ヲ與フルコト多キハ普魯西其他ノ歴史ニ於テ證明スル所ニシテ國家ノ行政機關ヲシテ巨額ノ資金ヲ所有セシムルニ依リ政府ヲシテ國民ヨリ獨立セシメ國民ノ監督最モ必要ナル時機ニ於テ監督ノ效果ヲ減失セシムル

モノナリ第二、財政上ヨリ觀察スレハ非常準備金ノ本旨ハ非常ノ支出アルニ際シ直チニ之ヲ填補スルニ在ルヲ以テ正貨トシテ存スルニ非スンハ特ニ斯法ヲ設ケシ精神ヲ達スルコト能ハス故ニ收益ヲ計リテ之ヲ市場ニ投下スレハ一朝有事ノ際之ヲ政府ノ手ニ回收スルニ由ナク又有價證券其他動産不動産トシテ存スレハ必要ノ場合ニハ又之ヲ市場ニ買却セスンハ非ス隨テ其價格ノ低落スルハ固ヨリ其手數煩勞時間ヲ浪費シテ徒ニ經濟市場ヲ擾亂シ而モ斯法設定ノ目的ヲ達スル能ハサルモノトス若シ正貨トシテ倉庫ノ裡ニ貯藏セラレンカ徒ニ活物ヲ死物ト爲スノ愚ヲ學ヒテ一方ニハ巨額ノ流動資本ヲ吸收スル結果トシテ金融ヲ逼迫シ産業ノ發達ヲ阻碍スル場合モ亦少カラサルヘシ

日耳曼ハ五年間ニ七億六千フランヲ不生產業ニ浪費セリ一方ニ巨額ノ有價證券ノ買收ハ其後ノ賣出ニ因リテ其下落ヲ購シ物價ノ騰貴ヲ來シ又商業ノ紊亂ヲ來セリ若シ日耳曼政府カ正金ノ受取額ヲ戰爭費用ヲ償フテ限度トシ其他ハ佛國ノ公債證券ヲ以テスレハ日耳曼ハ爲メニ市場ヲ擾亂スルコトナクシテ永ク敵國ノ膏血ヲ絞リ佛國モ亦爲メニ財政整理ノ反動力ヲ挫折セシメシナラ

ン千八百七十年ノ役ハ兵力ニ於テハ普ハ佛ニ勝チ財政ニ於テハ佛ハ普ニ勝チタリ云云(ホーリヲユ氏財政學卷一第二章非常準備金ノ一節)

第三、經濟上ヨリ觀察スレハ産業ノ進歩國力ノ増進ニ必要ナル資本ノ一部ヲ政府ノ手ニ吸收スルニ因リ經濟自然ノ發達ヲ阻礙シ物價ノ騰貴金融ノ逼迫ヲ來スノ通弊ニ陷ルヘキハ平時人民ヨリ賦課徵收シテ準備金ヲ積立ル場合ニ於テハ殊ニ看易キ弊害ナリトス但非常準備法ニシテ臨時ノ收入ニ依ル場合ハ殊ニ巨額ノ外國ヨリ流入セル價金ノ如キハ内地市場ニ一時ノ流出ヲ爲スヘカラサルノミナラズ一國開戦ノ場合ノ如キ其準備セル正金ヲ國內ニ消費スルコトハ國民經濟ノ活動ヲ保持スルカ爲メ却テ經濟界ニ裨益ヲ與フルモノニシテ産業上國民ノ蒙ルヘキ擾亂ヲ救済スルニ多少ノ效驗アルヘシ是レ臨時收入ニ依ル非常準備法ノ特徴ニ非サルモ此場合ニハ經濟界ニ必須ナル國內ノ流動資本ヲ吸收セルモノニ非サルカ故ニ其弊害無クシテ利益ノミヲ享有スルコトヲ得ヘキナリ

要之非常準備金ノ方法ハ財政上經濟上非難多キノミナラス政治上行政上事實濫費ニ終ルコト多シ換言スレハ非常準備法ハ其目的達セララルモ弊害之ニ過キ又

其目的速セラルルコト少ナキヲ以テ償金等ノ臨時收入ニ對スル手段トシテハ非
 難スヘカラサルモ平時國民ヨリ賦課徵收スル收入ヲ以テ充ツルニ至リテハ何レ
 ノ方面ヨリ觀察スルモ是認スヘカラサル方法ト謂ハスハ非ス况ヤ現時特ニ此
 ノ非難多キ方法ヲ執ランヨリモ他ニ奏效ノ確實ナル方法完備セルニ於テヲヤ乃チ
 我邦ニ於テモ年或程度迄臨時急速ノ需要ニ應スル爲メ憲法第六十九條ヲ以テ
 避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ
 充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ

ノ一條ヲ設ケテ明治二十二年法律第四號會計法第七條及ヒ第八條同年勅令第六
 十六號會計規則第二章第五款豫備金ノ支出ニ關スル九箇條ヲ以テ其手續ヲ規定
 シ一方ニハ凶荒不慮ノ災害ニ對スル非常準備策トシテハ明治三十二年三月法律
 第七十七號罹災救助基金法ノ制定ニ依リ備荒儲蓄ノ制ヲ繼承シ猶ホ上述ノ手段
 ヲ以テ處理スルコトヲ得サル緊急ノ場合ハ憲法ハ第七十條第一項ニ

公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ
 帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲ス

コトヲ得

トノ明文ニ依リ以テ遺憾ナカラシム隨テ今日ニ於テ特ニ經常收入ヲ以テ非常準
 備金ノ制ヲ立ツルノ要ナク又戰時等ニ在リテ之カ需要ヲ満足スルニ足ルヘキ巨
 額ノ經費ヲ正金ニテ貯藏センコトハ殆ト事實不能ニ屬スルモノト謂ハスンハア
 ラス

終リニ臨ミ尙ホ一言スヘキハ非常準備金ヲ以テ公債ヲ買收スルトキハ内國債外
 國債何レヲ可ナリト爲スヤニ在リ「ボリユー」氏其他有力ナル財政學者ノ論スル所
 ニ據レハ多ク外國債ヲ以テ勝レリト爲スモノノ如シ今所論ノ大要ヲ述フレハ内
 國債ヲ購入スルトキハ其資本ハ輸出スルノ憂ナク一國流動資本ノ額ヲ減少スル
 コトナシト雖モ元來此準備タル非常ノ支出ニ備フルモノナルヲ以テ非常ノ場合
 ハ當該國ノ公債下落スルコトハ當然ノコトナリトス若シ一方ニ外國債ヲ以テセ
 ハ一時資本ヲ外國ニ輸出スルノ不利アレトモ此準備ニ充ツル金額ハ歲入ノ殘餘
 又ハ不時ノ收入ヲ以テスルカ故ニ別ニ費途アルニ非ス隨テ之ヲ輸出スルモ甚シ
 キ損害アリト謂フコトヲ得ス況ヤ其償却ニ因リテ其元金ヲ回收スルニ於テヤ

加フルニ内國債ノ利子ハ政府歳入ノ中ニ編入スト雖モ是レ即チ國民ノ拂フ所ノ税金ナリ外國債ノ利子ニ至リテハ全ク外國ヨリ得ルモノタリ而シテ一朝事變アル場合ニ在リテモ外國債ハ敗北スヘシト思惟セラレタル敵國ノ公債ナルカ其他ノ特別ノ場合ト外ハ爲メニ下落スルコトナシ云云ト云フニ在リ然レトモ第一ニ非常準備金ヲ認メス第二之ヲ認ムルモ公債等ヲ以テ所持スルトキハ名ハ非常準備金ナリトスルモ實ハ其用ヲ充タスコト充分ナラサルヲ以テ此場合ハ非常準備ノ爲メ何レカ效果アルヤ否ヤノ問題ハ先ツ以テ論點外ニ置クヘキモノト信ス隨テ單ニ財政上ノ原則ヨリ最モ政府ニ利益アル方法ヲ取ルヲ以テ勝レリト爲スナリ隨テ本問ノ場合ノ如キ當時當該國ノ金融界ノ狀態財政界ノ形勢如何ニ由リ絶對ニ之ヲ論斷シ難キモ利子ノ高低ヲ標準トシ結局利益ノ大ナル方ヲ取ルヲ可トスルモノナリ故ニ今我邦等ニ在リテハ名ハ非常準備タランモ其額又些少ナルモノナレハ公債整理ノ用ニ充ツルヲ以テ勝レリトス

第三款 租税ノ増徴ト公債ノ募集

第一項 公債ノ利害

臨時費支辨ノ方法トシテ官有財産ノ拂下又ハ非常準備金ノ不可ナルコトハ上述スル所ノ如シ而シテ租税ノ新設又ハ増率ヲ可トスルカ或ハ公債ノ借入又ハ募集ヲ可トスルヤニ至リテハ利害關係複雜シテ絶對ニ之カ是非ヲ論斷シ難キ所アリ學說モ亦多岐ニ分レテ一定スル所アルヲ見ス今便宜ノ爲メ茲ニ併セ論シテ其利害ヲ對照シ之カ大體ノ概念ヲ述ヘントス

公債ノ利便ナルハ又言テ俟タサル所ニシテ第十八世紀ノ交ニ在リテハ公債ノ發行ヲ以テ直チニ富ノ増殖トナシ絶對ニ利益大ナルモノト論セシ學者少シト爲サス乃チ若シ政府カ内國人ニノミ公債ヲ募ルトキハ該國ハ決シテ衰頹スルコトナク却テ各種ノ事業ヲ獎勵スルモノナリト曰ヒ(ヴォオルテール)政府ハ其公債ニ因リテ衰頹ヲ來スコトナシ如何トナレハ其利子ハ右手ヲ以テ之ヲ收入シ左手ヲ以テ之ヲ支給スルモノナレハナリト曰ヒ(ムロン)公債ハ一種ノ金坑ナリト曰ヒ(バルケ)借正公債ナルモノハ其額面ノ金高ニ等シキ資本ヲ以テ國家ノ富ヲ増加スル

モノナリト曰ヒ(ピントウ)政府ハ公債ヲ募リ以テ一時世間ニ流通スル資本ヲ奪フト雖モ常ニ直チニ之ヲ返還シテ復タ之ヲ融通セシムルモノナリ如何トナレハ政府ノ公債ヲ募集スルハ之ヲ支出センカ爲メナレハナリト曰ヒ(シユフレイヌセイ)レオン(英國ノ繁榮ハ一ニ公債ニ存スルモノナリト曰ヒ(カニール)公債ハ大砲ノ如シ彼國民之ヲ用フルトキ此國民モ亦之ヲ用ヒスハ危難ヲ避クルコト能ハサルモノナリト曰フ等又公債制度發達ノ當初ニ於テ如何ニ其利便ノ人心ヲ眩惑セシメシヤヲ見ルニ足ルヘキナリ

蓋シ公債ハ其利便甚タ大ナルト共ニ其濫用ハ又甚シキ害毒ヲ醸シ又其濫用サルル機會少シト爲ササルナリ公債ノ弊害ハ公債其モノニ存セスシテ之カ使用方法ノ誤マラレ易キニ在リ公債ノ募集ハ政府ノ浪費ヲ誘引シテ行政ノ弛廢ヲ來スト曰ヒ租税ニ依ルコトヲ得ヘキ場合ニ公債ニ依ルハ政府好シテ損失ヲ招クモノナリト曰ヒ公債ハ現世ノ人ノミ其利益ヲ享有シテ其苦痛ヲ後世ノ人ニ貽スモノナリト曰ヒ公債ノ募集ハ却テ政府ノ信用ヲ失墜シテ財政ヲ紊亂スルノ虞アリト曰ヒ租税ハ公債ニ比シテ政府人民共ニ此カ勤勉節儉ヲ獎勵スト曰ヒ屢々公債ヲ募集

スルニ於テハ資本家ヲシテ偷安ノ氣ヲ生セシメ必要ナル事業ノ發達ヲ妨害スルノ憂アリト曰ヒ公債ハ一國流動資本ノ増加ヲ障害シ不動資本ノ改良ヲ阻害スルノ弊アリト曰ヒ公債ハ戰爭ヲ誘導シ租税ハ戰爭ヲ制止スト曰ヒ公債ハ國民ノ財政監督ヲ軟弱ナラシムルモノナリト曰ヒ公債ノ募集ハ物價ノ昂騰ヲ來タシ率テ恐慌ノ原由ヲ爲スモノナリト曰ヒ公債ハ勞力者ノミヲシテ公費ヲ負擔セシムルモノナリト曰フ等此等ノ非難モ究竟公債ノ使用法ヲ誤ラレ易シト云フニ歸一スルモノニシテ其使用方法ノ誤ラレ易キハ一ニ其募集ノ容易ナルニ在リ收入ノ途容易ナルトキハ濫費ノ之ニ件フハ數ノ免レ難キ所ニシテ殊ニ政府ニ在リテハ負債ノ危險ハ一私人ノ場合ニ比シテ發生スルコト稀ニシテ又此カ救正手段ニ乏シカラサルヲ以テ不知不識ノ間ニ弊害ヲ醸成シ借ニ租税ニ依ルヘキ場合及ヒ租税ニ依ルコトヲ得ヘキ場合ニ公債ヲ以テスルノミナラス施政者ノ功名心不注意ハ不急無用ノ事業ヲ企テ時ニ一國ノ生命ヲ危クスルコト少カラス是レ一方ニハ人民カ租税ノ場合ノ如ク其利害關係自己ニ直接ニ影響スル所ナク公債ヲ起ストキハ結局之カ償還ノ爲メ後來租税ノ負擔ヲ受クヘキモ眼前ノ利害關係ニ影響セサ